東アジア文化都市
2023 静岡県
Culture City of East Asia
2023 SHIZUOKA

事業報告書

東アジア文化都市
2023 静岡県
Culture City of East Asia
2023 SHIZUOKA

事業報告書

目　次

主催者あいさつ 004

開催概要 009

東アジア文化都市とは 010

東アジア文化都市2023静岡県 事業概要 011

開催都市 016

成果 019

知事対談 020

シンポジウムレポート 032

成果報告 040

公式行事 043

交流事業 055

コア事業 071

協働プログラム 133

地域連携プログラム 173

資料 229

広報 230

実施体制 238

事業収支 240

アンケート 241

新聞記事 242

事業経過 250

主催者あいさつ

静岡県知事
東アジア文化都市2023静岡県実行委員会　会長

川勝 平太

富士山世界文化遺産登録10周年を迎えた2023年、静岡県は中国成都市、梅州市、韓国全州市とともに「東アジア文化都市」として、「ようこそ！文化が花開く ふじのくに芸術回廊へ！」をコンセプトに、様々な文化活動を県内全域で実施いたしました。日本の「文化の顔」、いわば「文化首都」として、芸術、スポーツ、産業など文化の定義を広く捉え、本県及び日本の文化の魅力を、国内をはじめ東アジアや世界に向けて１年を通して発信してきたところです。

2023年の５月からは、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが５類に移行したことにより、イベント参加への機運が高まり、富士山静岡空港の航空路線の再開とともに、海外との往来を伴う国際交流も再開するなど、多くの文化事業や交流が大盛況となりました。

実施に当たっては、県主催事業のみならず、市町、民間団体が主催する文化イベントも「東アジア文化都市」の認証事業に位置付け、多くの皆様に参画いただくことで、文化の素晴らしさを再認識し、大きな活力を得ることができました。

特に、文化芸術の秋である９月から11月までを「コア期間」に設定し、「静岡国際オペラコンクール」や「伊豆文学祭」など、中核となる文化・交流事業に加え、食文化やスポーツなどのイベント、地域に伝わる祭りなどが集中的に繰り広げられ、秋空の下、文化活動を楽しむ多くの県民や来訪された皆様の笑顔に包まれました。

また、国際交流では、韓国全州市において伝統遊び文化祭りで県内高校生が交流し、静岡県内の専門家を派遣し、紙文化や食文化による文化交流を行いました。県内では、東アジア工芸展、日中韓の学生フォーラム、中学生年代の国際サッカー大会等を開催するなど、対面での国際交流も数多く実施できました。

この結果、「東アジア文化都市2023静岡県」は、**認証事業数979本**（過去最高値397本）、**来場者数は1,345万人**（同357万人）、**経済波及効果は389億円**（同91億円）と、これまで９回の開催都市の実績をはるかに上回る成果を上げることができました。

今後は、「東アジア文化都市2023静岡県」を通じて育まれたつながりや取組を、国内外との更なる交流拡大、より一層の文化振興につなげ、東アジアの協調・共生、平和を希求してまいります。そして、2024年以降も、静岡県は東アジア文化都市として培った実績を糧に、創造的で持続可能な文化があふれる豊かな都市として、発展を続けてまいります。

結びに、御協力いただいた県民の皆様や、国内外の全ての関係の皆様に厚く御礼申し上げ、挨拶といたします。

文化庁長官

都倉 俊一

静岡県にて開催された2023年の東アジア文化都市が成功裏に終了したこと、誠に喜ばしく思います。静岡県をはじめ、多くの関係者のご協力・ご尽力に心より感謝を申し上げます。

東アジア文化都市は2014年から開始され、日中韓それぞれの都市が互いの豊かな文化芸術を発信し、交流することで、三か国の友好協力関係の深化を図る事業です。また、選定された都市が、その文化的特徴を活かして、文化芸術・クリエイティブ産業・観光の振興を推進することにより、都市自体の発展も目指しています。

静岡県では、「ようこそ！文化が花開くふじのくに芸術回廊へ！」をテーマに掲げ、この一年県民の皆様総参加のもと、中国の成都市、梅州市、韓国の全州市と連携しながら、東アジア文化都市事業に取り組んでこられました。全体を通じて、舞台芸術等の芸術文化をはじめ食文化、茶文化、産業文化も含めた幅広い分野を文化として捉えた多種多様な事業が催され、事業数、来場者数ともに大きな実績となったと承知しております。

文化の力、静岡県の魅力の再認識というだけではなく、日中韓三か国に共通する文化や価値観の発見・再確認につながったのではないでしょうか。

「東アジア文化都市静岡県2023」は閉幕しましたが、静岡県の魅力が日中韓だけでなく世界に発信されていくとともに、東アジア文化都市の取組を通して蒔かれた文化の種たちが各地で花開き、日中韓三か国の文化交流が一層深まり発展していくことを期待しております。

ようこそ！　文化が花開く　ふじのくに　芸術回廊へ！

開催概要

東アジア文化都市とは

東アジア文化都市 2023 静岡県事業概要

開催都市

Welcome to the “Open Garden Theatre” of Culture and Art!

東アジア文化都市とは

「東アジア文化都市」は、日中韓文化大臣会合での合意に基づき、日本・中国・韓国の３か国において、文化芸術による発展を目指す都市を選定し、その都市において、現代の芸術文化や伝統文化、また多彩な生活文化に関連する様々な文化芸術イベント等を実施するものです。これにより、東アジア域内の相互理解・連帯感の形成を促進するとともに、東アジアの多様な文化の国際発信力の強化を図ることを目指します。

また、東アジア文化都市に選定された都市がその文化的特徴を生かして、文化芸術・クリエイティブ産業・観光の振興を推進することにより、事業実施を契機として継続的に発展することも目的としています。

これまでの開催都市

2014

日本　横浜市

中国　泉州市
韓国　光州広域市

2015

日本　新潟市

中国　青島市
韓国　清州市

2016

日本　奈良市

中国　寧波市
韓国　済州特別自治道

2017

日本　京都市

中国　長沙市
韓国　大邱広域市

2018

日本　金沢市

中国　ハルビン市
韓国　釜山広域市

2019

日本　豊島区

中国　西安市
韓国　仁川広域市

2020-2021

日本　北九州市

中国　揚州市（2020年）
　　紹興市・敦煌市（2021年）
韓国　順天市

2022

日本　大分県

中国　温州市
　　済南市
韓国　慶州市

2023

日本　静岡県

中国　成都市
　　梅州市
韓国　全州市

東アジア文化都市2023静岡県　事業概要

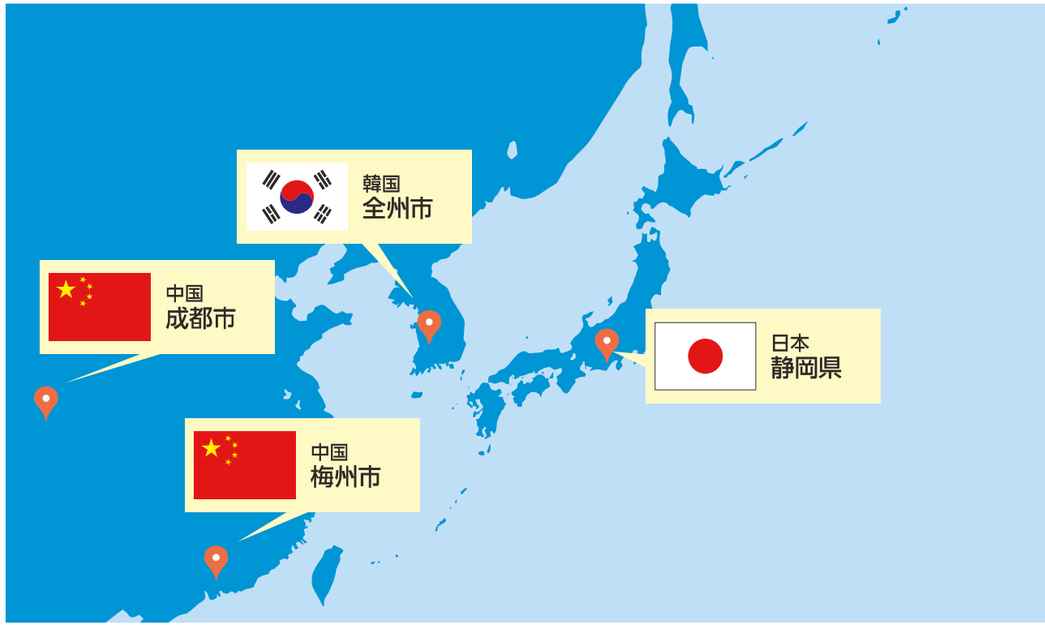
2022年８月26日に開催された日中韓文化大臣会合において、静岡県が「2023年東アジア文化都市」に選定されました。本県は、富士山をはじめ豊かで美しい自然環境と、世界農業遺産のお茶やわさびなどの食文化、サッカー及びラグビーワールドカップ、オリンピック、パラリンピックのスポーツのレガシーなど、独特で他地域にない多彩な文化の魅力に溢れています。

この東アジア文化都市の制度は、今年10年目の節目を迎え、静岡県にとっても2023年は、霊峰富士山が世界文化遺産登録10周年、さらには３年に１度の静岡国際オペラコンクールの開催年に当たるなど、文化の大きな節目となりました。

この記念すべき年に、東アジア文化都市に認定され、今年1年を通して静岡県全域で、集中的に多彩なイベントを展開しました。

会　　期	2023年１月～12月（コア期間9～11月）
実施事業	979事業
参加者数	1,345万人
主　　催	東アジア文化都市2023静岡県実行委員会、静岡県、文化庁
会　　場	静岡芸術劇場、静岡県コンベンションアーツセンター（グランシップ）ほか 県内各所・各施設 成都市・梅州市（中国）、全州市（韓国）

開催都市



ロゴマーク

東アジア
文化都市
2023静岡県
Culture City of East Asia
2023 SHIZUOKA

●コンセプト

日本の飾り結びのうち、結びつきの象徴として縁起が良いとされる「あげまき結び」の、結ぶ前の形状をモチーフとしています。

３国で交流するため３色を使い、特に青色で富士山の形を、赤と黄色でハートの形を連想させます。また、完全に結ぶ直前の形にすることで、文化振興や東アジアの交流が、今後発展し確実に実を結んでいく意味を込めています。

制作者：静岡文化芸術大学デザイン学部 入江七海さん

テーマ

「ようこそ！文化が花開く ふじのくに芸術回廊へ！」

Welcome to the “Open Garden Theatre” of Culture and Art!

「静岡県の持つ豊かな文化的魅力とは、東西南北に拡がる美しい自然環境の下で、古来よりそれぞれの地域が多彩な文化の特色を持っていることであり、静岡県を訪れると、まるで回廊を巡るかのように、次々に新たな感動や刺激に出会えることから、静岡県の文化振興基本計画の基本目標を「ふじのくに芸術回廊」の実現としています。

東アジア文化都市の期間中には、県内各地を自然豊かな「庭園」（Garden）のような「劇場」（Theatre）と見立て、様々な文化行事を集中して実施し、県民や訪れる人々に回廊のように県内を巡っていただきます。

さらに、2023年は日本の文化の代表都市として、静岡から日本文化の魅力を東アジア３カ国や世界に発信する役割を積極的に担い、開かれた芸術回廊（Open Garden Theatre）として、「文化首都」としての使命を実現してまいります。

開催趣旨

2023年は、富士山の世界文化遺産登録10周年を迎えます。古来、日本人は富士山を霊峰として畏敬し、信仰の対象や芸術の源泉として敬ってまいりました。この富士山を有する静岡県は、「ふじのくに」として、富士山の姿のように、美しく調和した地域づくりを目指し、文化を大切にしてまいりました。

さらに、静岡県は、ユネスコエコパークの南アルプス、世界で最も美しい湾クラブに加盟する駿河湾、世界ジオパークの伊豆半島に代表される美しい自然に培われた多彩な文化を有し、長い歴史と交流の中で、歴史的な遺産にとどまらず、世界農業遺産の茶草場農法や水わさびの伝統栽培、食文化、民話や伝説、伝統芸能など、生活の中に多彩な文化が育まれています。

こうした文化を基盤に、県民の文化活動の活発化を目指し、これまで県立劇団ＳＰＡＣの運営、静岡国際オペラコンクールの開催など、世界に開かれた芸術の発信や、住民主体の文化活動を支援するアーツカウンシルしずおかの設置など、静岡県独自の文化芸術振興の取組を展開してまいりました。

2023年は、静岡県が日本を代表する「東アジア文化都市」として、ＳＰＡＣせかい演劇祭や静岡国際オペラコンクールなど、世界に開かれた静岡県独自の文化芸術、スポーツ、食、ファッション、芸能、温泉、旅、花・庭、モビリティ、多文化共生など、幅広い分野にわたって日本文化を国内外に発信する事業を、静岡県全域を舞台にするとともに、他県と連携して、１年を通じて切れ目なく実施してまいります。

それにより、「日本の文化首都」として、東アジアや世界に向けて、静岡県をはじめとする日本の魅力を発信してまいります。中国、韓国との文化交流を深め、相互理解や多様な価値観の尊重につなげてまいります。

県民の皆様とともに、国内外から多くのお客様を、最高のおもてなしでお迎えできるよう、国や市町、関係団体などと連携し、多彩な文化が花開く「ふじのくに芸術回廊」の実現を目指してまいります。

目的

“ふじのくに”づくり

静岡県の有する世界クラスの資源群などを生かし、独自の多彩な文化の魅力を国内外に発信し、文化のブランド力で「憧れ」を呼ぶ文化首都“ふじのくに”づくりを進めます。

多様な価値観を認め合う

１年を通じて集中的に、文化による交流や発信を行うことにより、国内・東アジア域内の相互理解と連帯感の形成を促進し、多様な価値観を認め合う環境を育みます。

創造的な地域社会づくり

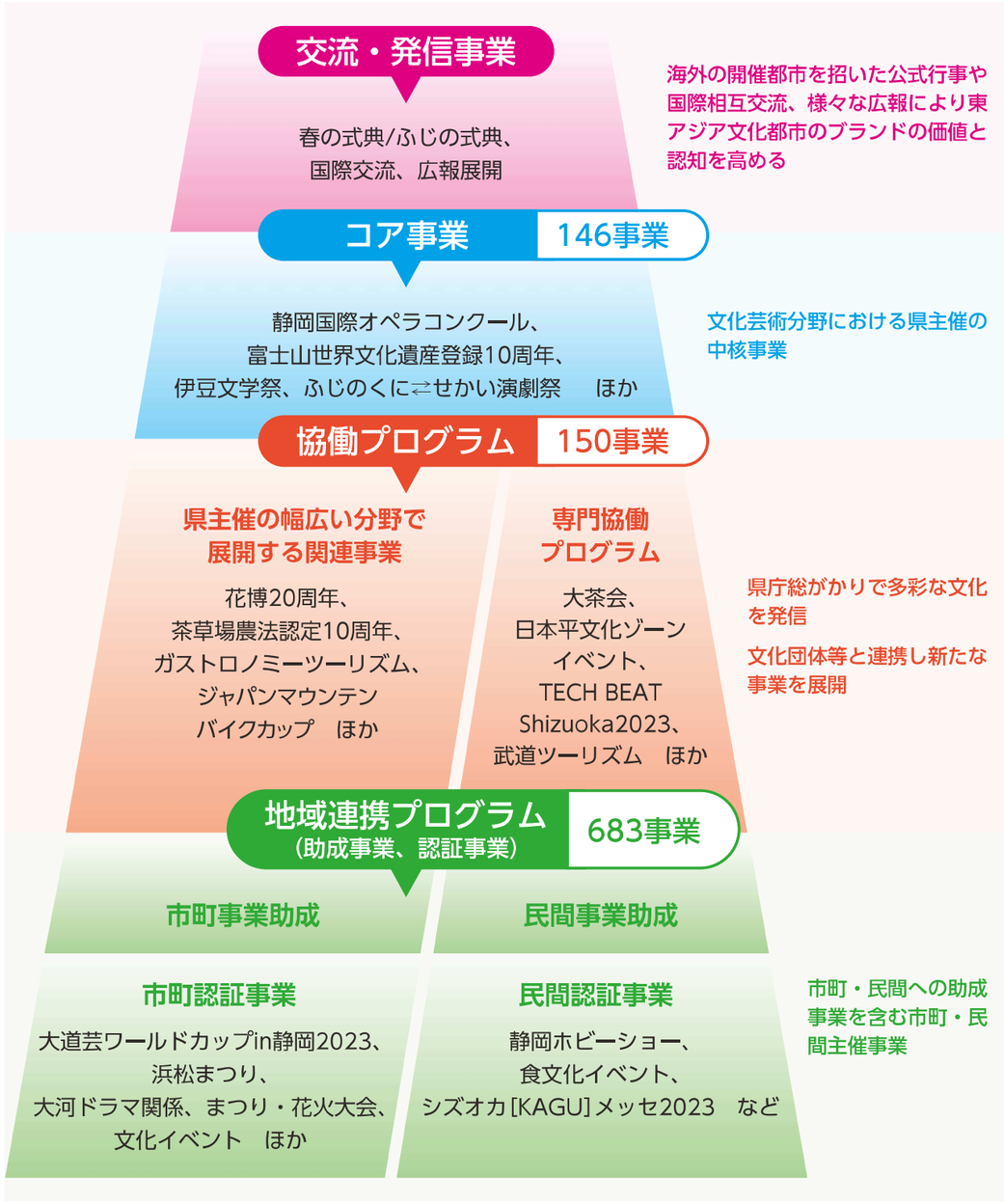
文化都市を契機に、県民が自らの地域の文化を再発見し、文化首都としての誇りを抱くとともに、自らが表現者として様々な形で文化活動に親しむことにより、創造的な地域社会づくりを推進します。

アフターコロナ時代に向けて

来たるべきアフターコロナ時代に向け、静岡県の文化活動を再び活性化し、観光価値の向上やインバウンドの拡大、国際競争力の強化を図ります。

事業構成

東アジア文化都市2023静岡県は４つの階層により構成されたプラットフォームです。



開催都市

中国

成 都 市（せいと）

人口：2,119.2万人　面積：14,380㎢

四川省の中央部に位置する大都市で、「天府の国」の異名を持つ豊かな平原の中にあり、三国志の舞台としても有名で、三国時代にまつわる遺跡などの歴史スポットがあります。3,000年もの間、都市の名前が変わっていないことが、その歴史の深さを物語っています。

中国

梅 州 市（ばいしゅう）

人口：544万人　面積：15,860㎢

広東省東端の山間部にある都市で、製鉄、科学、食品、紡績、酒造などの産業が盛んであり、かつては海外に進出する華僑を多く輩出していました。客家（ハッカ）語を使用する人が多く、他にも特色のある家屋など、独特な文化が伝わっています。

韓国

全州市（ちょんじゅ）

人口：65万人　面積：206㎢

首都ソウルの南、約200kmに位置する全羅北道の中部にある都市。後百済の王都であり、朝鮮王朝の発祥の地であった歴史の面影を残しており、観光スポットが豊富なため多くの観光客が訪れます。「食の都」としても知られ、特産品は「全州八味」と称されます。

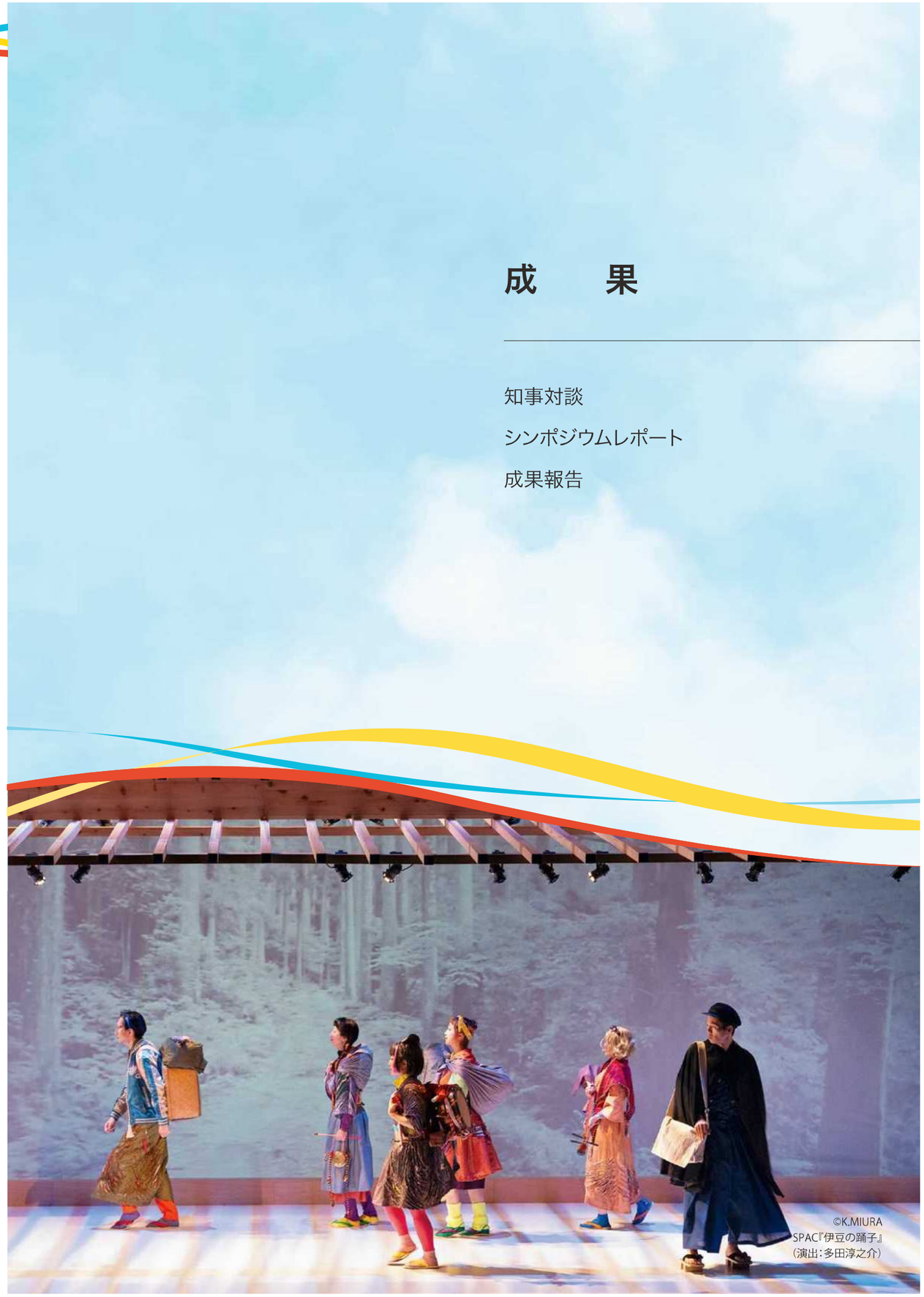
2023 동아시아문화도시 전주
CULTURE CITY OF EAST ASIA 2023 JEONJU

成　　果

知事対談

シンポジウムレポート

成果報告



©K.MIURA
SPAC『伊豆の踊子』
（演出：多田淳之介）

静岡県総合情報誌 ふじのくに52号（2023年3月発行）掲載

知事対談 Special Talk

静岡県知事 川勝 平太 × 元文化庁長官 近藤 誠一氏

日本の聖地を世界へ

文部科学省は、日本の文化芸術を世界に発信する国際イベント「東アジア文化都市」の今年の「日本の文化の顔」に、静岡県を選んだ。川勝平太知事（74）は、最高顧問に元文化庁長官の近藤誠一さん（76）、同県富士山世界遺産センター館長の遠山敦子さん（84）、元東京オリンピック・パラリンピック組織委員会会長の橋本聖子さん（58）の3氏を任命。政治的な対立を超え、中国、韓国の各自治体との文化交流によって、日中韓の相互理解を深めるとともに、県と日本の魅力を多様な形でアピールしていく意向だ。川勝知事と近藤元長官が、富士山を遠望できる日本平夢テラス（静岡市清水区草薙）で、その意義や抱負を語り合った。

［司会は毎日新聞客員編集委員、認定NPO法人富士山クラブ事務局長の七井辰男、写真・山田茂雄
本文および写真（一部除く）は毎日新聞より転載　2023年2月23日付　対談日：2023年1月16日］

静岡市清水区草薙の日本平夢テラスで

「東アジア文化都市」静岡 その意義は

―今年は、日本の文化芸術を世界に発信する「東アジア文化都市」発足10年目、富士山の世界文化遺産登録からも10年という節目の年を迎えます。

知事　近藤さんがこの両方に深く関与されたことに敬意と感謝を申し上げます。世界文化遺産登録にあたり、富士山と三保松原が文化的に一体である、と説得されたのが当時、文化庁長官だった近藤さんでした。また、欧州文化首都をベースに日本、中国、韓国の文化のつながりを強めようと、両国を説得されて東アジア文化都市の実現に汗をかかれたのも、近藤さんでした。

世界的にも有名な富士山と比べ、東アジア文化都市は、認知度が低い。昨年暮れに閣僚と全国の知事が意見交換する場があり、当県が引き受けた話をしたら、誰も知らない。しかし、永岡桂子文部科学相が、これは当省の中核事業ですと言われ、すごく大事にされていることがわかりました。今はウクライナ戦争をはじめ中国と米国が敵対関係にあるなど難しい状況ですが、静岡県が日本の文化の顔、いわば「文化首都」として平和を発信するという重大な使命を担うことになりました。

近藤氏　いずれも決まった現場に私がいて、10年で、それぞれが非常に意味のあるプロジェクトになりました。文化都市について言えば、政治や経済というのは、いい意味では競争、しかし、行き過ぎると敵対関係になりがちです。しかし、文化に関する限りは、違いはお互いに学び合い、互いに高めあう性格のものです。

2011年に奈良の日中韓文化相会合で日本が提案をして即座に両国からOKの返事をいただいた。ところが、直後に尖閣諸島の国有化問題が起きた。中国が、かんかんに怒って大騒ぎになり、もう駄目かなと思ったら、14年に無事スタートしたんです。

東アジアは、3国を合わせて国内総生産（GDP）でも25%ですから、そこが争ってはいけない。世界を文化でつなごうという動きが、政治的な紛争が絶えない東アジアで、無事にずっと続いて10年間、政治問題による中止や停止、延期が一切なかったというのは、本当に勇気づけられる実績ではないかと思っています。しかも10年後に最も尊敬する川勝知事の静岡県で両者が交わったということは、夢のような気持ちでおります。

―東アジア文化都市に川勝知事はどう取り組まれ、世界に発信されるお考えですか。

知事　日中韓の文化交流とともに、富士山を中心とした日本の文化の魅力を見せたいと思っています。これも近藤さんのご功績ですが、世界文化遺産登録の際、「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」と名称をつけた。スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラやサウジアラビアのメッカのような聖地であり、信仰の対象であるだけでなく、芸術の源泉というわけです。

富士山は日本の国土のシンボルであり、この地位は世界遺産になることによって国際的に認められました。富士山は美しい。そして活火山ですから、畏敬（いけい）の念を抱かせるとともに、常に自然災害に備えなさいよという危機管理も促す。初冠雪や富士見の季節、春霞（がすみ）、雪解け、登山シーズン、四季の変化を知らせる自然の気象台でもある。同時に富士山の湧水（ゆうすい）などによって、静岡県は日本最多の339品目の農産物が育つ。水は駿河湾に注ぎ、多くの海産物も生まれ、食の恵みの源でもあります。

どこから見る富士山が一番いいと聞いたら、それぞれが違う展望場所を選びます。富士山はその全てを受け入れる。多様性の大いなる和、まさに大和（ヤマト）です。「富」は豊かさを、「士」は、3人の最高顧問のような立派な人材のことです。貧困を克服し、人材を育てなさい、というメッセージも送っています。

静岡県総合情報誌 ふじのくに52号（2023年3月発行）掲載

日本の聖地を世界へ

知事対談 Special Talk

静岡県知事 川勝 平太 × 元文化庁長官 近藤 誠一氏

静岡県知事 **川勝 平太**

1948年生まれ。京都市出身。早稲田大、同大学院を経て英オックスフォード大で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学長などを経て2009年から現職。現在4期目。著書に「文明の海洋史観」など。

生活に生きる自然観

―静岡県での開催について、どんな点に期待されていますか。

近藤氏　思想家であり、歴史家でもある知事が陣頭指揮を取られるので、静岡県の文化や経済の振興はもちろん、世界を視野に置いた東アジア文化都市として日本の文化をアピールする橋頭堡（きょうとうほ）になっていただけると大いに期待しております。

特に10年前よりも一層、日本の文化が大事だと思われるのは、自然観というか、自然と生命というものをどうみるかという点です。西欧の自然科学というのは、自然を外部から見て、観察をして仮説を立てて実験をして、その通りになれば、それが真実だと決めてしまう。自分と自然とは主と客で、二元論なんです。自然はあくまでも物であり、機械であるととらえて、自然の持つ生命力というものを分析できないんです。

一方、古代のギリシャ人も日本人もそうですが、人間は自然の一部であるとみる。自然を内から直感的に見るという伝統があって、欧米の人にはなかなかわかりにくい。しかし、今の文明による自然破壊を見ていると、西欧のように自然を自分とは違う異質な物だと分析して、資源として使うという発想では、自然破壊は止まらないと思います。ですから、日本的な自然観を大いに世界に打ち出す絶好のチャンスだと思うし、その必要性は今、ますます高まっていると思います。

知事　富士山は標高が3776メートルで、冬の山頂は氷点下40度にもなり、寒帯に近い。一方、伊豆半島は川端康成が「南国の模型（モデル）」と書いたように亜熱帯に近い。亜寒帯の北海道から亜熱帯の沖縄までを、伊豆半島と富士山が表している。日本列島の縮図です。まったくの熱帯、寒帯だと、住みにくい。みんなが住みやすいところに列島がたまたま南北に広がっている。だから地球的自然のいわばミニチュアだと。そのミニチュアの中のミニチュアである「ふじのくに」が、そういう意味の全体性を部分の中に宿しています。静岡県の位置関係を見ても、東洋の文明、西洋の文明をそれぞれ入れ込んだ京都と東京の真ん中にあり、両文化を融合したところでもある。

日本を世界に発信する際には、近藤さんが言われた自然観が大切です。日本には、縁側と庭や茶室に見られるように、自然との調和を重んじる文化が生きています。教会は西洋では家の外にありますが、日本では仏壇や神棚は家の中にあります。芸術、宗教、美的なものが日常の生活文化の中に入り込み、溶け込んでいます。

私は文化の顔という場合、衣食住の生活文化を基礎に考えないといけないと思います。特に食が大切です。和食でなく、「和の食」です。和は足し算で、中華、韓国、イタリア料理のほか、いろいろな食文化が日本では楽しめます。日本の生活文化の顔を静岡から発信したいと思います。

―知事は、文化都市開催についてコロナ禍などを踏まえ「若い人たちに希望を与えるようなプログラムを組みたい」と言われました。お二人に内外の若者たちへのメッセージをお願いします。

知事　美しいものへの感動は誰もが持っているので普遍的です。美しいと感ずる心は神から人間への贈り物ではないかと思います。静岡県は、国籍・文化・宗教の違いを超えて、人々を魅了する地域資源に恵まれています。富士山は、文化的景観として借景で、いわば庭の一部です。富士山には、月見草も梅も桜もツツジも、どの花も似合います。皆様も、富士山に似合う華のある人生を送ってください。富士山も喜ばれると思います。

元文化庁長官 **近藤 誠一**

1946年、神奈川県出身。東京大卒業後、72年外務省入省。ユネスコ大使、文化庁長官などを歴任。2013年、近藤文化・外交研究所設立。三保松原文化創造センター・みほしるべ名誉館長、富国有徳の美しい"ふじのくに"づくりリーディング・アドバイザーを務める。

近藤氏　今は、ポスト真実の時代と言われています。一部のメディア、とくにSNSは真実だけを伝えるんじゃなくて、相手にアピールすること、相手の感情を揺さぶることを流し、それがあふれている。ばらまく力が強いだけに何が本当かわからない。それに惑わされずに、何が人生にとって、自分にとって一番大事なのか、真善美は何かと考えるときに、富士山は、それを教えてくれると思うんです。

富士山は一つの真実、アイデンティティーの礎となるものを持っています。移り行くけれども美しさはずっと残っている。当然、何が善かということも、そこからにじみ出てくる。富士山は真善美のシンボルだし、ポスト真実の時代に自分が依拠すべき一つの大事なポイントであり、ほかの世界遺産とは違うんだということをぜひ強調しておきたいと思います。

静岡県総合情報誌 ふじのくに53号（2023年7月発行）掲載

知事対談 1

スポーツ医療の知見を活用し、新産業を創出するふじのくにの挑戦

SPECIAL TALK

静岡県知事
川勝 平太
×
参議院議員
橋本 聖子氏

「東アジア文化都市2023静岡県」が開幕し、日本の文化首都として文化芸術、スポーツ、食、多文化共生などを世界に発信する静岡県。東アジア文化都市2023静岡県実行委員会の最高顧問であり、ふじのくに特別観光大使である橋本聖子参議院議員と川勝平太静岡県知事が、さまざまな産業を包摂し新しい産業を創出するスポーツ文化の可能性について熱く語り合った。

東アジア文化都市とは

日本・中国・韓国の3カ国において、文化芸術による発展を目指す都市を毎年原則1都市選定し、文化交流、文化芸術イベントなどを実施する国家的プロジェクト（2023年の開催都市に静岡県が選定された）。地域の相互理解などを深め、東アジアの多様な文化を世界に発信する。

ふじのくにから、スポーツ文化を世界へ

知事　ふじのくに特別観光大使にすでに御就任いただいておりますが、このたび、東アジア文化都市2023静岡県実行委員会の最高顧問を御快諾くださり、誠にありがとうございます。東アジア文化都市として選定された今年の静岡県は日本の「文化の顔」、いわば「文化首都」です。

橋本氏　東アジア文化都市宣言を行った「富士山の日」フェスタでは、講演の機会を頂き、ありがとうございました。

知事　素晴らしい講演でした。オリンピックとの運命的な縁、苦難続きのアスリート人生、スポーツ医科学に開眼されたことの他、スポーツが人間形成、医療、健康、観光、食文化、地域産業などと広く関わるという、実に内容の濃い講演でした。

オリンピック憲章はスポーツと文化の融合をうたっているので、本県は東京2020オリンピック開催に合わせ、文化プログラムを県内各地で展開しました。スポーツ立県を目指す本県は、オリンピックの自転車競技の開催地になったことから、自転車競技の振興やサイクルツーリズム、走行空間の整備など「サイクルスポーツの聖地づくり」に力を入れています。

1964年の東京オリンピック開会5日前に誕生され、東京オリンピックの開会式のために上京されたお父様が聖火台の点灯シーンに感激されて、お名前を決められたそうですね。

橋本氏　はい。唯一の被爆国である日本において、平和の象徴として聖火リレーの最終ランナーに選ばれたのは、広島に原爆が投下されたその日に生まれた広島県三次（みよし）市出身の坂井義則さんでした。父はそのことに深く敬意を抱き、トーチを持って旧国立競技場の階段を上る坂井さんを目の前で見たそうです。聖火台に火がともり、燃え上がる炎の中に生まれたばかりの私の顔が浮かび、オリンピックの選手になるようにとの思いを込め、聖子と名付けたと聞きました。

知事　生まれたばかりの愛娘のかわいい顔が燃え上がる炎の中に浮かんだ！　コノハナサクヤヒメは燃えさかる産屋（うぶや）で山幸彦と海幸彦をお産みになりました。炎の神コノハナサクヤヒメは富士山の御祭神です。富士山周辺でトレーニングをされ、オリンピックに実に7回も出場され、議員になられてからは、東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣、仕上げは東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長と、東京五輪の成功に多大な貢献をなさいました。御尊父もコノハナサクヤヒメも喜ばれていることでしょう。

病から学んだストレスコントロール

知事　天性のアスリートだと思っていましたが、小学3年生の時に急性腎臓病で長期入院、中学でスケートを再開し、高校では全日本選手権で日本一になってオリンピック候補に挙がる中で、高校3年生の秋に腎臓病が再発し、ストレスから呼吸筋不全症、医療事故でB型肝炎に感染するなど挫折と逆境の中のアスリート人生であった事を、先の講演で初めて知って驚きました。パラリンピックに理解が深いわけですね。

橋本氏　腎臓病を自分の中で受け入れることができず、強いストレスから呼吸筋不全症になってしまったことが悔やまれますが、後々それを克服することで、オリンピックではほとんど緊張することはありませんでした（笑）

知事　どのようにして、そのような境地に達せられたのですか?

橋本氏　ストレスをためないことです。できるようになれば簡単ですが、最初は難しかったですね。あとは、ストレスとは何か、怒りとは何かを理解することです。治療のため精神科病院に入院し、今でいうカウンセラー、メンタルトレーナーと出会いました。この先生は、スポーツにメンタルトレーニングを取り入れる手法をアメリカなどで勉強されていて、ストレスや怒りの原因を元から絶つトレーニングを教えていただきました。

知事　宮沢賢治の『雨ニモマケズ』の一節に「欲はなく決して怒らず　いつも静かに笑っている」とありますが、これは賢治が仏像のお顔の表情を詩で表現したものだと思います。凡人は怒りから自由になることはできません。いつも笑顔で明るいのは、心身のトレーニングというか、厳しい修行の成果なのですね。

橋本氏　入院生活が長かったこともあり、どんなに苦しいトレーニングであっても、トレーニングができることは本当に幸せなことだと思っていました。そのため、トレーニングの時間、食事の時間をとても大事にしていました。

海外に目を向けると、当時から立派なナショナルトレーニングセンターやスポーツ医科学研究所が世界各国にありました。病気だったこともあり、遠征先で各国の医療のお世話にならないといけないので、数多くのスポーツ医科学研究所を見て回ることができました。

驚いたのは、それらの施設が、芸術や文化をはじめ、医療や福祉、食文化、観光、地場産業といったものをリサーチし、それらの産業を結び付けるスポーツの役割を徹底的に研究していたことです。海外で先行していたこれらの取り組みを日本も進めなければ、全ての分野において遅れてしまうのではないかという危機感をアスリート時代に体感できたことは、政治家になった今、貴重な財産になっています。

次ページへ続く

静岡県総合情報誌 ふじのくに53号（2023年7月発行）掲載

SPECIAL TALK

スポーツ医療の知見を活用し、新産業を創出するふじのくにの挑戦

次代に残すべき、オリ・パラのレガシー

知事　東京2020オリンピック・パラリンピックは新型コロナウイルス感染症という人類の危機の中での開催となりました。最高責任者の組織委員会会長として、選手が病気にかかりストレスを抱えないようにするなど、選手村の運営には大変な苦労があったでしょう。

橋本氏　地域医療がひっ迫するかもしれないという大きな責任を負う大会でもありましたので、いわゆる統合医療、ウェルビーイングをコンセプトに掲げ、選手村に医療機関であるトータルコンディショニングセンターを設置しました。感染症対策はもちろん、ゲノム解析、集団免疫の専門家、あらゆる分野の医師、科学者、社会学者など、さまざまな専門家に協力いただき、医学的、科学的知見から対策を進めていきました。

また、分析した選手の医療データを、治療科、コンディショニングトレーナー、ストレングスコーチ※などと共有することで、その都度説明しなくても、選手はそこに行くだけですぐに治療を受けられるようにしました。これらの取り組みこそが東京オリンピックの最大のポイントであり、未来に残すべきレガシーだと考えています。

> 「スポーツには、芸術や文化をはじめ、医療や福祉、食文化、観光、地場産業などの産業を結び付ける力がある」
>
> 橋本氏

知事　スポーツ医療は日常の地域医療とは違いますね。

橋本氏　明確に一つだけと言われたら、薬を飲めるか、飲めないかになります。いわゆるドーピングコントロールです。アスリートはIOC（国際オリンピック委員会）が認定する薬以外は飲めません。そのため、普段から食事に気を使い、予防や病気にならない体づくりを徹底して行うのがスポーツ医療です。しかし、富士山頂を目指すのに登山道が幾つもあるように、風邪の治し方も人ぞれぞれです。それを見ずに、風邪だから風邪薬を出すというのはスポーツ医療ではあってはならないことです。

トータルコンディショニングセンターでは、人間が持つ本来の治癒能力を引き出す医療を行います。この医療モデルと社会モデルを融合させ、心身ともに健康であり続けるための医療を地域医療が行えば、健康寿命が延伸され、ウェルビーイングなまちづくりができ、地域の活性化につながります。さらに、今の日本の財政を圧迫している、40兆円を超えようとする医療費と社会保障費を大幅に削減できるはずです。一つ補足すると、治療薬を飲んでは駄目だという話ではなく、サプリメントや予防のための薬を開発するという発想の切り替えが重要だということです。

知事　医療・社会保障費の削減は国家が果たすべき課題です。薬を使わずに人間の持つ本来的な治癒能力を引き出せれば、人は健康になります。静岡県では2021年、病気を予防する社会健康医学※の重要性を知って、「静岡社会健康医学大学院大学」を日本で初めて開校しました。病気にかからないようにして健康寿命を延伸する医学です。スポーツ医学の考え方と通じるものがあります。トータルメディカルコンディショニングを実践するエリアとして、景観の美しい富士山麓は最適ではないでしょうか。

橋本氏　そう思います。富士山から頂いている素晴らしい景観も、実は医療なんだと思います。さらに、富士山という大自然の恵みを当たり前ではなく、感謝の気持ちを忘れてはいけませんね。世界に誇る素晴らしい遺産に誇りと愛着を持ち、育んでいくことが、日本の発展につながると思っています。

スポーツが産業をつなぐことで、社会が変わる

橋本氏　スポーツを文化として捉えることが、地域の活性化や新しい産業の創出につながります。これからの時代、食産業だけで生き残っていくのは困難ですし、それは観光も、医療なども同じです。スポーツを媒介に、芸術や文化、医療といった地場産業を全て融合させ、日本にしかない産業を新たに創造することが大切です。スポーツには産業や文化を阻害することなく、それらを結び付け、コラボレートさせる大変素晴らしい力があります。それは、全ての産業が一つの輪になるようなイメージです。

※ストレングスコーチ
選手のパフォーマンス向上とけがの予防を目的に、筋力を中心とした体づくりを指導するトレーナー

※社会健康医学
伝統的な公衆衛生学にゲノム医学や医療ビッグデータ解析などの新しい学術領域を加えることで、社会における人の健康を幅広い視点から考究、社会実装する学問

撮影場所／都道府県会館

静岡でおいしいものを食べて終わりではなく、富士山に登ってみたい、自転車に乗ってみたい、温泉に入りたいといった、次々とつながっていく産業をつくり上げていくことが、これからの時代に求められているのだと思います。

知事　アスリートが医科学を取り入れているように、一般人も食に栄養科学の知見を取り入れるのが望ましいですね。美しい景色がアスリートのコンディションや健康増進に役立つというのはとてもいいヒントです。アスリートにとって、食はいうまでもなく、きれいな景色も心身に良いとのことですから、景色と料理を組み合わせれば心身の健康を増進できます。静岡県は富士山や南アルプスなどから清らかな水の恩恵を受け、東西に長く、多様な風土のおかげで、全国トップクラスの439品目の農林水産物を生産する食材の王国です。富士山、浜名湖、伊豆半島、駿河湾をはじめ、美しい景色を堪能し、温泉・歴史・伝統・文化なども楽しみながら食を味わう「静岡ガストロノミーツーリズム」を推進しています。

橋本氏　私は北海道に生まれ、山梨で働き、富士山の麓で静岡の皆さんと共に生活しました。それで分かったのは、これほど素晴らしいポテンシャルを持ったエリアは他にないだろうということです。今後は、健康産業、食産業、観光産業、医療産業というものは一体にならなければいけないと思います。

知事　静岡県民の健康寿命は世界トップクラスです。県民がどうして健康なのかを検証しながら、どうすれば誰もがより健康になれるのかを、栄養科学や医科学的な視点から啓発できる人材を育成したいと思いますが、差し当たり実行できることとして、何かご提案がありますか。

橋本氏　例えば、スタジアムを単に競技場で終わらせるのではなく、地域の集いや食の勉強ができる場にすることで、健康になり、治癒能力が高まっていくといった要素があってもいいかと思います。また、スポーツはするだけでなく、見たり、応援したりしても、体に良い影響を与えることが研究で分かっています。

静岡県には、たくさんのスポーツチームがありますよね。

知事　サッカー、ラグビー、バスケットボール、サイクリング、バレーボールチームなどがあります。

橋本氏　地域のチームを一生懸命に応援するサポーターは、それだけで健康になっているといえます。スタジアムの付加価値が高まるようなサポートをすることで、新たな産業が生まれるのではないでしょうか。

知事　オリンピック憲章には、スポーツと文化・教育を融合させ、生き方の創造を探求するのがオリンピックの精神だとうたわれています。静岡から日本を元気にする産業をつくり出すために、オリンピアンのご指導をぜひお願いしたい。本日はありがとうございました。

静岡県総合情報誌 ふじのくに54号（2023年10月発行）掲載

知事対談

富士山と人が織りなす、多様な文化の花が咲き誇るふじのくに

SPECIAL TALK

静岡県富士山世界遺産センター館長 遠山 敦子氏 × 静岡県知事 川勝 平太

2023年、富士山が「信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録され10年を迎えた。時を同じくして、静岡県富士山世界遺産センターは開館5周年となり、富士山の保全や安全対策、学術調査・研究に取り組んでいる。同館館長であり、「東アジア文化都市2023静岡県」実行委員会最高顧問である遠山敦子氏と川勝平太静岡県知事が、富士山の麓で文化的意義について語り合った。

静岡県富士山世界遺産センター

世界遺産である「富士山」を守り、後世に伝えるための拠点施設。学術調査機能なども併せ持つ施設として2017年12月に開館した。

富士山の文化的価値を伝える活動拠点

知事　「東アジア文化都市2023静岡県」実行委員会の最高顧問にご就任いただいており、改めてお礼を申し上げます。静岡とのご縁は、日本平のロープウェイ建設の技師として、ご尊父が静岡に招かれた時からですね。

遠山氏　中学1年生の秋に静岡市へ移りました。真っ青な空の下に白雪を頂いた富士山を見まして、その崇高さに胸を打たれました。私にとって富士山は別格の存在になり、生意気にも、人生の目標であり、よりどころとなりました。学校時代、社会人時代、そして今日まで、富士山のおかげで、何とか生きることの基軸をもらえたと思っています。

知事　富士山の世界遺産登録では、中曽根元総理の下、理事長として「富士山を世界遺産にする国民会議」（現富士山世界遺産国民会議）をリードしてくださいました。感謝に堪えません。

遠山氏　こちらこそ、世界遺産登録に関わらせていただいて光栄でした。

富士山が世界文化遺産になって、今年で10年。東アジア文化都市が今年で10回目。ダブル文化イヤーの中で静岡県は、「ふじのくに文化年」を迎えているわけです。この10年間、さまざまな取り組みをしてきましたが、特筆すべきことは、知事が静岡県富士山世界遺産センターをお造りになったこと。この拠点ができたおかげで、富士山についての学問、文化、発信のハブになることができました。

知事　センター設立に際しては、高い行政能力、広い文化的視野、幅広いネットワークをお持ちの館長に、基本構想委員会に加わっていただきました。他に当時、静岡県立美術館の館長で、比較文化・文学の泰斗、芳賀徹氏、東西の美術に通じた高階秀爾（たかしな しゅうじ）氏など、そうそうたるメンバーでした。あの委員会には、センターをハブとして富士山の普遍的価値を継承して内外に発信するのだという意欲と使命感がありました。基本コンセプトを「守る」「伝える」「交わる」「究める」の4本とし、それを指針にコンペを実施し、建築家の坂茂（ばんしげる）氏の案を採用されました。その数日後、坂氏は優れた建築家・作品に与えられるプリツカー賞を受賞されました。委員諸氏の目利きぶりに感心したのを覚えています。ありがたかったのは、センターの初代館長にご就任いただいたことです。開幕式典は、正面の水盤を生かし、晴れやかで、素晴らしい門出のお祝いになりました。

遠山氏　センターの建物は逆円錐形で、水盤に映ると富士山が現れるという独創的なアイデア。しかも富士山の湧水を使い、水盤や館内の冷暖房に利用するなど、富士山の恵みをきっちりと受け止めて完成した建物なんですね。研究者たちも一生懸命努力して、富士山の自然・信仰・芸術など優れた研究成果を出してくれています。この7月には富士山世界文化遺産登録10周年記念として、「世界の聖なる山と富士山」と題する国際シンポジウムを開催できました。

世界の聖なる山は、数多くあります。多くの場合、天国などの霊的な場所に最も近いところだと信じられ、信仰体系や伝承の一部となっています。その中には聳（そび）え立つ高山もあり、火山もあれば、人々が信仰する小さな山などさまざまで、富士山は毅然として雄大であり、人々が古くからあがめ、愛し、そして誇りにしてきた大きな存在であると改めて気付かされました。世界の聖なる山と連携を取り、聖なる山の役割についての学問的、文化的な価値について発信してほしいという要望もあり、当センターが中心的役割を果たしていきたいと考えています。

世界とつながる聖なる山・富士

知事　センターは、開館から5年の間に、皇族のお成りが2度もあり、多数の来館者が続き、開館5年目の節目に開催された富士山世界文化遺産登録10周年記念国際シンポジウムには、館長のお声がかりで、一流の方々が

次ページへ続く

静岡県総合情報誌 ふじのくに54号（2023年10月発行）掲載

静岡県富士山世界遺産センター館長
遠山 敦子 氏

PROFILE

1938年三重県生まれ。静岡育ち。東京大学法学部を卒業し、文部省（現文部科学省）に初の女性上級職として入省。1994年、文化庁長官就任。駐トルコ共和国日本大使、国立西洋美術館長を歴任し、2001年、初の民間からの文部科学大臣として入閣。2005年には新国立劇場運営財団理事長に就任。主な著作に『来し方の記　ひとすじの道を歩んで五十年』『トルコ　世紀のはざまで』など。2013年、旭日大綬章受章。

「多彩な文化事業の花開いた2023のレガシーを、どう残して真の〝文化幸（さきわ）う県〟としていくか、知恵と情熱が不可欠」
……遠山氏

参加されました。元ユネスコ世界遺産センター長、ニュージーランドのトンガリロ国立公園、中国の泰山、イタリアはピエモンテとロンバルディアの代表などトップクラスの布陣でした。

遠山氏　彼らを呼び寄せたのは私ではなく、富士山なんです。皆さん、富士山のためなら行こうと言ってくださる。富士山学※を追求することも大事ですが、世界、あるいは地球規模の視野を持った上で富士山の位置付けを行い、聖なる山が持つ意味を世界に発信していく必要があります。参加されたトンガリロ国立公園は、世界で初めて「文化的景観※（カルチュラル・ランドスケープ）」を理由に、世界文化遺産に登録されました。（オンライン講演で）印象的だったのが、「I am my mountain, and my mountain is me.」という言葉で、山と自分は一体という話です。自然と人間の共感といいますか、先住民であるマオリ族の伝統、精神、誇りを今も守り続けていることが、世界遺産につながったとおっしゃっています。人間と山との深いつながりを学びました。

知事　西洋で文化といえば、ノートルダム寺院、ケルンの大聖堂、ピラミッドなど、人間が造ったものです。自然は、文化と対極にあり、ワイルドな存在だと見なされていました。山岳を文化と見ることに抵抗があったはずです。19世紀にラスキンが山岳を神聖視する見方を出しましたが、主流とはならずに、登山を楽しむアルピニズムが流行しました。

ご著書『来し方の記　ひとすじの道を歩んで五十年』で、「富士山に対峙して恥じることのない人生を歩みたい」と書かれています。霊峰は館長の心の支柱ですね。生涯1500点も富士山を描いた横山大観は、「富士山を描くということは、富士にうつる自分の心を描くことだ」と述べています。いずれも、日本古来の富士山観と通底しています。海外では、ニュージーランドの先住民マオリ族が、日本人とよく似た山岳信仰をもっています。「文化的景観（カルチュラル・ランドスケープ）」はトンガリロを文化遺産にするために考案された、実に独創的な概念です。自然景観に文化性を公式に認めたもので画期的でした。これで西洋人の文化に対する見方が変わりました。そのおかげもあって、富士山が信仰や芸術の源泉となってきた日本古来の文化が高く評価され、世界文化遺産になりました。

遠山氏　普遍性の意味が変わったわけですね。それまではヨーロッパ的な価値観がユネスコの評価基準でしたが、トンガリロの一件をもって、自然と人間の共用関係、協調関係といいますか、そこに歴史や伝統も加わり、文化的な価値があると認めたことは、とても大きな変化だと思います。

山水一体の恵まれた地、静岡県 文化都市のレガシーを しっかりと残すことが大切

遠山氏　静岡県はとても恵まれていて、日本一、世界一と言ってよいかもしれません。一つには富士山があり、それ以外にも南アルプスや竜爪山（りゅうそうざん）といったさまざまな山があり、海がある。論語には「知者は水を楽しみ　仁者は山を楽しむ」とあります。静岡県民は知者にも仁者にもなりうる環境があり、加えて大地には豊かな食材があふれています。その意味で、静岡は天下に誇りうる恵まれた県だと思います。その県が文化都市として、ふじのくに文化イヤーを契機に、あちこちで文化の花が咲き匂う県になっていってもらいたいなと思います。

知事　「山は富士 お茶は静岡 日本一」と言われますが、富士山の世界遺産登録とほぼ同時に、本県の茶草場農法が世界農業遺産になりました。翌2014年には南アルプスがユネスコエコパーク、2016年には富士山の水が注ぐ駿河湾が「世界で最も美しい湾クラブ」加盟、2018年に伊豆半島がユネスコ世界ジオパーク認定など、また、本県ゆかりのノーベル賞受賞者、芸術家、世界トップクラスのアスリートなど、富士山の世界遺産登録の2013年6月から毎年「世界クラスの資源・人材群〝ふじのくに〟静岡県」をリストにしていますが、現在、145件※を数えます。10年間でこれほどの世界クラスの地域資源・人材が公認された地域は他にないと思います。こうした資源や人材を生かして内外の人々の幸せのために活用していくことは我々に課された責務です。

※2023年（令和5年）10月1日時点

遠山氏　今、東アジア文化都市を開催している静岡県が、県内のあちこちでさまざまな文化の花を咲かせようとしています。市町や団体が実施する幅広い文化のイベント・企画が、800以上認証されていると聞いています。これを機会に、地元の人たちが本気になり、継続していく意欲のある魅力的文化事業をいくつか選び、育てて、文化都市のレガシーとしてしっかり残していく事が大事です。そこにこそ文化イヤーの意義があると思います。

多様な文化をおおらかに包む文化都市

知事　知事になってまず「富士山の日」条例を定め、また、大家のご協力を仰いで、柿本人麻呂・山部赤人以来の名歌集『富士山百人一首』を手がけた後、『富士山百人一句』『富士山百画』『富士山漢詩百選』『富士山万葉集全20巻』『富士山歳時記全5巻』等々を編みましたが、これらは富士山が芸術の源泉であることの現代における証しです。

遠山氏　見事な成果でして、とても参考になります。国際的にも、17世紀の終わりにドイツの医者で博物学者であるケンペルが日本を訪れ、富士山を見て、「世界一美しい山だ」と言っているんですね。ケンペルはヨーロッパに日本を伝えた人として知られ、のちにフランスの劇作家・詩人で駐日大使だったポール・クローデルや、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）なども、日本文化や富士山の美を、世界に発信してくれています。やはり、静岡県の人たちは、漠然と富士山を見るのではなく、もっともっと誇りを持って、そして、常によく学び、自らの心を鍛えるとともに、文化活動への参加をお願いしたいですね。しかも、大地の豊かな食を楽しめるのですから。

知事　静岡には、山の幸、海の幸、野の幸など、食材の数で日本一の439品目の農林水産物があり、どの食材も品質が高く、まさに「食の都」です。「東アジア文化都市2023静岡県」では、静岡の文化を広く捉え、衣食住の生活文化、茶の文化、芸能・芸術、温泉文化、スポーツ、ファッション、花、庭などを対象にしています。食文化はその中で文化の基本です。ふじのくにの食と絶景を楽しむ「静岡ガストロノミーツーリズム」を推進していますが、これは日本のどの地域でもできるプロジェクトです。できる限り、静岡中心主義にはならず、日本の「文化首都」にふさわしいように、本県を舞台にしながらも、日本の多様な魅力を広く世界に発信しています。

遠山氏　私も大賛成です。観光や食、他都市と何かが違うとかではなく、静岡という土壌の中で起こる幅広い文化を全て含め、文化幸（さきわ）う県であってよいと思いますし、それが文化都市であり、静岡県の今後に大いに期待しています。

知事　「東アジア文化都市2023静岡県」の事業を東アジア地域の平和につなげていくことが大切です。世界文化遺産登録10周年、国際シンポジウムなど、いずれも平和づくりに貢献するものです。それを将来につなげていくのは楽しい仕事です。遠山館長には、引き続き、お知恵をお借りしたいと思っております。本日は、ありがとうございました。

静岡県知事　**川勝 平太**

PROFILE

1948年生まれ。京都市出身。早稲田大学、同大学院を経て英オックスフォード大学で博士号取得。早稲田大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在4期目。

※富士山学
富士山に関わる諸学問分野を横断的に連携させるとともに、富士山の持つ顕著な普遍的価値についてさまざまな知見を結集させ、富士山の総合研究を目指す学問。その研究成果を広く公表するため、センターでは学術雑誌「富士山学」を毎年刊行している。

※文化的景観
自然と人間の暮らしが相互に影響を与え、生み出されてきた景観のこと。日々の生活に根差した身近な景観であるため、日頃その価値に気付きにくいが、文化的な価値を正しく評価し、地域で守り、次世代へと継承していくことが重要。棚田や農山村の景観などがある。

シンポジウムレポート

東アジア文化都市2023静岡県シンポジウム　～静岡県の挑戦～

東アジア文化都市2023静岡県のフィナーレを飾る公式行事として、12月23日（土）グランシップにてシンポジウムが開催されました。第1部は、近藤誠一氏（東アジア文化都市2023静岡県最高顧問、元文化庁長官）による基調講演と、静岡県による成果報告。第2部は、溝畑宏氏（大阪観光局理事長、元観光庁長官）による講演と、「東アジア文化都市2023静岡県を検証する」と題した有識者によるパネルディスカッションが行なわれ、川勝静岡県知事と未来を担う県民代表による「東アジア文化都市2023静岡県宣言」によりシンポジウムは幕を下ろしました。

基調講演 ｜ 東アジア文化都市のあるべき姿

近藤 誠一

東アジア文化都市2023静岡県最高顧問　元文化庁長官

昭和21年生まれ。神奈川県出身。昭和47年外務省入省。在米国日本大使館参事官、同公使、外務省経済局審議官、OECD事務次長、外務省広報文化交流部長などを経て、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、駐デンマーク特命全権大使、平成22年7月より同25年7月まで文化庁長官。退官後は、近藤文化・外交研究所を設立し、JXホールディングス取締役、カゴメ取締役、パソナグループ取締役、東京都交響楽団理事長、東京大学政策ビジョン研究センター特任教授、東京芸術大学客員教授、国際ファッション専門職大学学長などに就任。『FUJISAN世界遺産への道』『日本の匠』『近藤誠一全集Ⅰ～Ⅲ』等著書、論文多数。

本日は、「東アジア文化都市のあるべき姿」について、静岡県にとって2023年で終わりではなく、この素晴らしい「スタート」を契機として、今後、静岡県がどのような方向に進むべきかということを「静岡県の挑戦」と題してお話をしたい。東アジア文化都市は、2014年に第1回が始まり、2023年、日本では静岡県が10年目を飾る東アジア文化都市になった。この事業の目的は、東アジア地域の相互理解連帯感の形成、国際発信力の強化、そして、選ばれた都市がそれぞれ特性を活かし、継続的に発展させていくというものである。今回、静岡県が大変短い準備期間にも関わらず、静岡県が保有する文化資源や人材の魅力を惜しみなく発揮した。また、富士山の世界遺産登録10周年という素晴らしいタイミングと相乗効果で、静岡県ならではの成果を上げられたと確信をしている。そして、分野も狭い意味の文化ではなく、スポーツ、文化芸術、歴史文化、もちろんお茶、温泉文化、サブカルチャーなど非常に幅広い分野であらゆる人を巻き込むことで、文化交流の素晴らしさや人間が仲良くすることの素晴らしさとなどを大いに発信したことに、改めて敬意を表したい。

ここからは、この東アジア文化都市がどのような意味があるのか改めて考えてみたい。現在の国際情勢は大変厳しくなっている。例えば、ロシアによるウクライナ侵攻、そしてイスラエル軍によるガザ地区への侵攻など、状況は19世紀に戻っているかのような厳しい段階に来ている。平和のためのテクノロジーが悪いことに使われてしまい、一つのことを解決しようとすると、それが別の問題に負の影響を与える。このように、現在の全人類が直面している問題は複雑に絡み合い、解決は困難なのではと危惧される。そうした中で、唯一の希望と言えるのは人間が持っている「共感力」である。これは、人類の進化の過程において、人類だけが持っている力である。論理的、合理的に物事を解決することは重要であるが、今、この複雑系ともいえる問題を解決できるのは、そういう理論から離れた感性であり「共感力」であるということを改めて感じている。

この東アジア文化都市のモデルとなったのは欧州文化首都であるが、最初は1985年にアテネで始まった。それまで、欧州統合は大変な苦労をして進んできたが、最初は石炭や貿易などを自由化するというように、機能別に統合を進めてきたが、うまく進まなかった。欧州連合の生みの親の一人であるジャン・モネは、「今から思えば、文化、つまり、合理性とか、理性ではない感情感性の部分でもっと統合すべきであった。そうすれば、もっと早く順調にＥＵヨーロッパは統合できていたのではないか」ということを、回想録で漏らしている。この考え方は、東アジアの諸問題を乗り切っていく上で、大いに参考になることは間違いない。

東アジアの地域は、日中韓合わせて、世界のＧＤＰの4分の1を占めるため、地域における目先の政治経済の利害対立、民族の歴史に根ざす恨みを晴らすなどといった負の連鎖が生じやすい。それを断ち切るには、やはり文化芸術には、それだけの力があるんだということを我々が示すことが大きな意義として考えられる。その点において、この事業が10年間継続したということは大きな成果である。もう一つは、東アジアの文化思想といったものが問題解決に大きな力があるということである。例えば、自然観や善悪二元論、人を善人か悪人かに分けてしまうということではないという日本が持つ思想。このようなアプローチをする日本の思想は、これからの世界を変えていく上で大変重要な役割を持っており、この東アジア文化都市の成功によって日本人が持っている最も誇るべき精神性というものが、日本の文化に内在しているということを示すことができる。

さらに、東アジア文化都市の特徴として挙げられるのは、この事業の主役が「国」ではなく「都市」であるということである。都市は防衛問題や領土問題など、そのようなことにはとらわれない、つまり、メンツに拘ることなく、人類全体の平和を求めて行動することができる、そういう組織体が都市であるということである。この点が非常に重要である。都市というのは、それぞれの民族文化を中心として出来上がった共同体であり、国境というのは文化というものを考慮せずに、武力や国のリーダーにより勝手に国境線が引かれてしまう。文化というものが無視されている一方で、都市で考えた場合、都市が持っている文化は、隣の都市の文化との間に国境線はない。そして先程の「共感力」というものにより、社会が求める政治経済の問題や違いを超え、相互理解を深めることができる。そう考えることで、例えば、これからの日韓関係に何か問題が起こり、新聞に反日デモのようなニュースが掲載されても、「いやいやあのソウルにはたくさん自分の友人がいる。彼らはこんなことをするはずがない。これはきっと、ごく少数の過激派の活動をメディアが取り上げただけだ」というように、ぱっと友人の顔が浮かんでくれば、どんなニュースにも耐えて友好関係を続けていこうと思うことができる。そのような顔が見えないと、どうしても悪いイメージが先行してしまう。そういう意味では、「顔の見える交流」が大事だということである。

東アジアという地域は、これからますます大きな存在になるであろう。政治的な対立はありながらも、東アジア文化都市は10年間も交流を続け、今後ともそれが発展していくことは、説得力が対外的にも増していく。今後、この10年間の成功をさらに発展させていくために、静岡県は、この大成功が終わりではなく、スタートであり、長いロケットを軌道に乗せるため、うまく発射できたという段階に過ぎない。静岡県は、過去の日本の開催都市や中国、韓国の都市や、また、これから新たに文化都市になる都市とも連携をとりながら、つまり縦の繋がりと横の繋がりを強化することによって、この素晴らしいプロジェクトがますます発展していくような努力を続けてもらいたい。そのためには、次世代の育成、若者たちがお互いに顔の見える関係を日中韓で作ることが重要である。しかし、世界への発信や、次世代への継承など、言葉でいうのは簡単であるが、実際に静岡県にできるのかと。静岡県には、日本の美、歴史、繊細で洗練された文化の価値、精神性を誰より深く携え、すべての時代のすべての世代からアクセスがあり、かつ世界から畏敬の念でみられている味方がいる。それは勿論「富士山」である。富士山を味方にして、静岡県が大きな人類の前進に向けて引き続き貢献していくこと、それこそが静岡県の挑戦ではないだろうか。

基調講演 ｜ 東アジア文化都市2023静岡県の求めた理念、意義、レガシーについて

溝畑 宏

大阪観光局理事長　元観光庁長官

昭和35年生まれ。京都府出身。昭和60年東京大学法学部卒業、自治省入省。平成14年大分県企画文化部長。平成16年（株）大分フットボールクラブ代表取締役。平成20年Jリーグナビスコ杯優勝。平成22年国土交通省観光庁長官。平成24年内閣官房参与、大阪府特別顧問、京都府参与。平成27年大阪観光局理事長（大阪観光局長）。大阪府市都市魅力戦略推進会議 委員。平成29年大阪府・大阪市IR推進会議　座長。大阪・関西スポーツツーリズム＆ＭＩＣＥ推進協議会　会長。

まず「東アジア文化都市2023静岡県」が掲げる五つの理念について説明する。一つ目は、「世界の協調・共生と平和の希求」ということである。ウクライナ等の問題が顕在化する中、やはりこれからこの日本のあるべき姿というのは、欧州文化首都の理念を繋いで世界の協調・共生の軸になっていく。そのような趣旨として一番最初に掲げている。

二つ目は「都市の魅力、住民の豊かさの創出」であるが、文化芸術やスポーツは都市の魅力を測るバロメーターであると考えている。文化やスポーツのない都市は、世界的な評価はされない。まさに、文化やスポーツを都市づくりの源泉としていこうということである。

三つ目は「ローカル外交の再促進」である。やはり、これからのグローバル社会にどうやって日本を良くしていくのかというとき、日本という国があっても、その主役は地方自治体だと、地方をグローバル化していくことがこの国を良くしていくという理念が重要であり大切である。まず、地域住民が自分の住んでるところに元気と誇りを持つ。そして、未来の世代に一流のものを見せて、世界と向き合わせてあげる。やはり、この大きい夢を描き、世界の高みを目指し、やがて自分が世界というフィールドに行くんだと思ってもらうことが、地方自治の重要な役割だと考えている。そして、ローカル外交というのは、国と国との争いがあったとしても、都市としての交流は、国家間よりも障壁が低い。その点で、ローカル外交をしっかりやっていくことは、国家の安定、そしてまた日本という国の将来に向けての平和を広める意味でも非常に重要である。これこそが「ローカル外交」の意味である。

そして四つ目が、「アフターコロナ時代の交流の復活」である。コロナ禍の2021年以降の2年間というのは、コロナが収束するかと思えば、またコロナが再度感染拡大するというような見通しが立たない時期であった。しかし、そのような環境下、思い切って2023年はアフターコロナとして交流が復活する時代になると、知事がやると決めた決断である。実は、他の自治体では先が見通せず、逡巡としていた中での決断により、約3年ぶりに多くの文化事業を復活することができた。

最後の五つ目は「持続可能社会の創造」である。私は静岡県に関わる中で思っているのは、最もＳＤＧsの意識の高い県であるということである。例えば、サイクリングに向けた取組においても、ゼロカーボン社会、脱酸素、車から人など、多くの取組を進めている。そして、静岡県は非常に美しい自然、美しい水が残っており、自然がしっかりと守られている。そこには、しっかりと先代が創り上げたものをしっかりと未来へ継承していくという意思があるからこそ、この美しい森林河川が残ってる。SDGsへの取組については、今後、世界の選ばれる都市の大きな基準になる。この１年間、東アジア文化都市で取り組んできた事業の一つ一つに、ＳＤＧｓの考え方がしっかりと刻み込まれている。そして、この取組が2025大阪万博の輪に繋がってくる。大阪万博の理念は、「いのち輝く未来社会のデザイン」である。

この５つの理念は、今後もしっかりと胸に刻み込み、未来の静岡というものを、さらに第2、第3フェーズに持っていく。「シングローバル、アクトローカル」の精神で世界に通用する「聖地」として、日本一の都市を目指す。この流れをしっかり継承し、未来へ伝えていく。そのような意味では、2024年以降が非常に大事になると。今回の取組は、知事のリーダーシップのもと、これまでの開催都市の中で一番の成果が上がったことは大変素晴らしいことである。今後は、近藤元長官の御意見をふまえ、東アジア文化都市2023静岡県で培った実績を、レガシーとして、しっかりと繋いでいくことが大変重要である。

パネルディスカッション ｜ 東アジア文化都市2023静岡県を検証する

コーディネーター
同志社大学経済学部教授　太下 義之

太下 義之

昭和37年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。平成3年から三和総合研究所へ入所。主席研究員、芸術文化センター長を歴任し、令和２年から同志社大学経済学部教授。他に、独立行政法人国立美術館理事（平成28年～令和元年）、静岡県文化政策審議会委員等、自治体のアドバイザー多数。「アーツカウンシル」をはじめ、著書、論文多数。

パネリスト
大阪観光局理事長　元観光庁長官　溝畑 宏
アーツカウンシルしずおか　アーツカウンシル長　加藤 種男
SPAC-静岡県舞台芸術センター　芸術総監督　宮城 聰

加藤 種男

アサヒビール株式会社及びアサヒビール芸術文化財団で企業メセナを担当。企業メセナ協議会専務理事、京都造形芸術大学客員教授などを歴任。企業の立場からNPOの環境整備に取り組み、関係機関とともにアートNPOフォーラム等を立ち上げる。令和３年からアーツカウンシルしずおかアーツカウンシル長。

宮城 聰

演出家・SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督。昭和34年生まれ。東京都出身。東京大学で演劇論を学び、平成２年ク・ナウカ旗揚げ。平成19年よりSPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督。自作の上演と並行して世界各地から現代社会を鋭く切り取った作品を招聘、世界を見る窓」としての劇場運営をおこなっている。令和5年6月より静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ館長を兼務。

太下：「東アジア文化都市2023静岡県を検証する」と題し、３名のパネリストと振り返り、検証を進めてまいります。溝畑さんは、先ほどご講演いただきましたが、「東アジア文化都市2023静岡県」でチーフオペレーティングディレクターを務められたアーツカウンシルしずおか長の加藤種男さん、総合芸術プロデューサーを務められたSPAC芸術総監督の宮城聰さんにご登壇いただいています。お二人から、「東アジア文化都市2023静岡県」との関わりと実績についてお話いただきたいと思います。加藤さんからお願いいたします。

静岡でオリジナルプログラムを開発できる時代に

加藤：まず、このプロジェクトの当事者となって仕事をしていただいた市町、民間の文化芸術をはじめとするスポーツ、観光も含めて、さまざまな方に御礼を申し上げたいと思います。その上で、プロジェクトに加わらせていただいたことを大変光栄に思っています。というのは、いくつか重要な場面に立ち会わせていただいたからです。その一つが「ふじの式典」です。非常に素晴らしいものでした。韓国全州市の国楽団による演奏があり、特に二胡の演奏レベルは、かつて聴いた経験がないほど素晴らしい演奏でした。プログラムの最後に、「『第九』を踊る」というベートーヴェンの合唱で踊る演目があり、一見何でもないように思えますが、『第九』を踊るという発想自体が珍しいですし、芸術文化の創造を考える上で非常に興味深い。２台のピアノでオーケストラを奏でられ、ソリスト８人の歌い手が、ソロ４人、合唱４部ですべての歌唱を担当し、10人で演奏を成り立たせていました。佐藤典子舞踊団の皆さんを含め、10人の演奏家と舞踊団の殆どが静岡県出身者か県にゆかりのある方々だそうで、非常にレベルが高く驚きました。

成功の理由は、宮城さんの演出だと。ダンス部門をダンサーだけに放置しないで、プログラム全体を演出されたことが成功へ導いたのです。このようなレベルの高いオリジ

ナルプログラムを静岡県でつくることができるのだから、他の都市や外国の文化を羨ましがる時代を卒業したほうが良いのではないかと思いました。ベートーヴェンや西洋由来のモダンダンスを使われた点はさまざまな文化の融合ではありますが、全体像としては静岡発。静岡でオリジナルプログラムを開発できる時代になってきたのだから、さらに静岡発のオリジナル作品を創り上げていくと良いのではないかと思いました。

全州市立国楽団

歓喜に至れ！～ベートーヴェン「第九」による～

太下：ありがとうございます。「『第九』を踊る」は大変素晴らしい公演でした。アーツカウンシルが今回、東アジア文化都市に関わったことのご紹介も、お伺いできればと思います。

我々のゴールは県民すべてが創造者になること

加藤：私はかねてから、この「東アジア文化都市2023静岡県」の検証や成果をどのように表すかという時に、来場者の数を誇っても意味がないと。来場者が多い、少ないといっても、果たして地域社会に文化が根付くかどうか、文化が価値を持つかどうかは分からないと考えてきました。それでは我々のゴールが何かというと、県民すべてが創造者になること。分かりやすく言うとアーティストになるようなイメージ。アーティストとまでいかなくても文化に関わる、当事者になる、県民360万人が運営しているという形になれば、一番良いと思っています。そのためには、イベントをやったほうがいい。回数を積み重ねていくことは重要ですが、それだけでなく制度やシステムを作る必要があると思います。その中で、アーツカウンシルという制度を作っていただいたことは、非常にありがたいことだと感謝しています。

「アーツカウンシルしずおか」では、地域密着の、地域に根差した、地元の人がアートプロジェクトを推進し、それを応援するという仕掛けを一番の柱にしています。そうしたプログラムを展開することで何をしたいかというと、総合力を発揮することです。静岡県には、独自のプログラムを開発できるダンスの団体があり、SPACのような劇団、もちろん美術館もある。何といっても富士山があり、資源は豊富にあります。ところが、県外の人から県の特色を聞かれた時に、「富士山」。しかし、「山梨県もそうだよね？」「日本全体の象徴でしょ？」と、特色として挙げにくい。それを解決するのが「総合力」だと思うのです。さまざまな事柄を、伝統的、あるいは文化遺産、資源と新しい表現活動を結び付けて総合的に推進していくシステムが要る。それは県の文化、スポーツ、観光のチームでやりますが、必ずしも専門家がいるわけではない。アーツカウンシルには、文化のさまざまな領域の専門家がいるので、この人たちが全体が集まることで特定の分野ではなく、総合力を発揮してやっていこうとしています。

先ほどご紹介いただいた「超老芸術」は、高齢になって突如アート活動に目覚めた人たちの展覧会で、高齢者の生きがいづくりとして大変効果があり、この人たちの活躍が高齢社会の課題解決の一助になるかと。それらを含めて、アーツカウンシルで取り組んでいます。この「東アジア文化都市2023静岡県」で我々がお手伝いしたことは、単にイベントをやって終わるのではなく、これを制度化し、次へつなげていくことだと考えています。

制作中の超老芸術家・本田照男さん

太下：「超老芸術」は素晴らしい展覧会でしたので、先般『Tokyo Art Beat』というウェブマガジンの、2023年のベスト３の一つとして推薦させていただきました。「東アジア文化都市2023静岡県」では、宮城さんにもさまざまな形で関わっていただきました。まずは、ご自身の関わりを総括していただけますでしょうか。

演劇は、最もローカルであり、最もグローバルでもある表現のジャンル

宮城：SPACがなぜ、「東アジア文化都市2023静岡県」の広報アンバサダーだったのか。これには二つ理由があると思っています。一つは、海外に行くと日本の劇団で一番知られてるのがSPACで、「世界で活躍している」ということが挙げられます。しかし、僕はもう一つ重要なことがあると思っていて、それは演劇が、グローバリティーとローカリティーの両方に足を掛けた芸術だということです。普通はローカリティーや地域などと考えますが、我々の周りで最もローカルなものは肉体。まさにそこにある、さまざまな要因をすべて引き受けて育っていくわけです。肉体には幾つかの要素があり、一番分かりやすいのが言語ですね。気候風土、そこに育まれる食べ物、そして、テレビなども含めた文化が体をつくっている。例えば、ギリシャ悲劇を上映しても、イギリスの俳優が演じるのと日本の俳優が演じるのとでは全く異なる。日本語で考えている人と英語で考えている人の体の動きは少し違うのです。逆に考えると、僕は若い頃から「世界で活動したい」「世界一になりたい」と思っていましたが、その割に演劇というジャンルを選んだ。つい最近まで、これは矛盾していると思っていました。なぜなら、演劇ほど国の壁が高い芸術はないからです。しかし、イランやクロアチア、ポーランドなど、その言語を話している人たちの人口がかなり少ない国にも国際演劇祭はあるのです。それはなぜかと考えてみると、言葉が違っていても共感できるからです。僕は海外の演劇祭で、一言も台詞の意味が分からないのに3時間ぐらい観てしまうということを、よく経験します。以前、とある演劇祭で隣にいたフランス人が、「フランス語が分かるの？」と。「全く分からない」と答えると、「なぜ観ていられるの？」と言われましたが、言葉が分からないはずなのに、ある瞬間に会場の空気がひとつになる、同じことを願っている、いわば「共感」というものが、良い演劇の場合は訪れるのです。壁が高くても、人間は分かり合えるのかもしれない、という夢のようなことが、演劇を通じて本当だと思えるのです。ですから、最もローカルでありながら、しかも最もグローバル、あるいは最もユニバーサルであり得る表現のジャンルとして演劇があるのでしょう。そう考えると、この「東アジア文化都市2023静岡県」のアンバサダーに、劇団であるSPACが選ばれているのは、必然性があると思いました。

東アジア文化都市2023静岡県のポスターを飾るSPAC俳優

太下：ありがとうございます。お二人のお話を聞いて溝畑さん、いかがでしたか？

溝畑：「共感」についてはよく分かります。横に座っている全く知らない人が、一つになってつながっていく。その瞬間が、「共感」や「共生」。文化芸術は、都市をつくっていく時にその集積だと言いますよね。皆が集まって来る時に、それがあるから、集まるのではないかと思います。経済は、どちらかと言うと文化の下部であり、文化には活力があるから、そこにみんなの連帯感が醸成される。二人のお話を聞いて改めてそう感じました。

静岡が、文化をイノベーションするという風土があると分かったので、逆に文化、芸術、スポーツでみんなをマネージしたり、モデレートしていく高い位置になれる可能性をすごく感じました。お二人の業績に深く共鳴しています。

太下：ありがとうございます。近藤先生や溝畑さんのプレゼンテーションでお話に出ている欧州文化首都。これをモデルに東アジア文化都市はできています。欧州文化首都は、EU統合を実現するための文化政策です。非常に面白いのが、その目的です。実は二つあり、一つは、EUはフランスやドイツなど、さまざまな国が合体してEU国になるという壮大な社会実験。ユーロピアンとしての文化的共通性を確認しようという目的です。もう一つは、いずれはEUという一つの国になるのなら、またなったとしてもフランスはフランス、ドイツはドイツというように互いの文化的多様性は価値を認め合い、尊重しようという目的です。これをモデルに始まった東アジア文化都市ですので、イベントだけで終わらない形で提供できると良いのではないかと思っています。今後のチャレンジという意味で宮城さん、いかがでしょうか。

歴史的な難題があるからこその文化交流

宮城：私は、この「東アジア文化都市2023静岡県」の意義を、日本全体で共有するような広報が重要ではないかと思いました。中国や韓国と文化交流をする、最初にそれだけを言うと反発があったりします。東アジア文化都市は、仲が良いから交流しようという親善イベントではないですよね？むしろ反対。日・中・韓は、確かに歴史的な難題があり、互いにさまざまな気持ちがある。しかし、3カ国で上手くできるようになれば、他のアジア諸国にも取り入れていけるのではないかと。難しいからこそ、文化交流をしているのだと。

もう一つの観点として言えば、政治的、軍事的な対立が深まろうとも、経済的な相互依存関係があれば戦争にはならないというイメージが、かつてあったと思います。しかし、歴史をさかのぼってもそんなことはなく、経済的な相互依存関係があっても戦争は起きています。そうなると、

最後の希望が文化芸術だということになる。互いの文化に対してリスペクトを持っていたら、最悪の事態が避けられるのではないか。これが、1945年に書かれたユネスコ憲章の趣旨ですよね。ユネスコ憲章には、「戦争は人の心の中に生まれるものだから、人の心に平和の砦を築かなければいけない」とあります。「もっと現実主義でいこう」と思われそうですが、これが1945年の廃虚のヨーロッパで起草されたことを考えると、当時最も現実的な考え方だったと言えますよね。この東アジア文化都市の趣旨というか狙いを、もっと日本の多くの人に知ってほしい。それによって、この先も東アジア文化都市という枠組みが広がり、現実に平和の砦として機能する道筋がつくのではないかと思います。

太下：最後に、皆さまからこれからの静岡の文化、スポーツ、観光に向けてメッセージをいただいて締めくくろうと思います。溝畑さんからお願いいたします。

溝畑：「東アジア文化都市2023静岡県」で素晴らしい効果を出されたので、原点・理念を忘れずに継承しなくてはいけないと思います。

先ほど、私は静岡を「聖地」と言い、世界の中で住んでよし・働いてよし・学んでよし・来てよし、のすべてを満たす可能性のある都市だと思っています。だからこそ、スポーツや文化、芸術などの資源があり、イノベーション、改革を醸成する風土がいっぱいあります。これを今後、どのような形で制度を作り、続けていくか。政府がやらなくてはいけないことを、開催都市が代替して実施していると私は思っています。今回のアウトプットは、外務省、文化庁、スポーツ庁、官公庁、総務省の各省にしっかりと提案し、国家を挙げて取り組むべきものだと。そして、この静岡のレガシーを国家がしっかりと受け止め、静岡が聖地として君臨していくことを目指すべきだと思っています。特に、文化、スポーツ、芸術、アートは育成が本当に大事です。簡単に芽が出るものではありませんが、育成するための制度とルールをしっかりと作り、子どもたちが頑張れば、第二の大谷翔平になれる、というような夢のある静岡、チャレンジ、これに尽きると思います。

太下：ありがとうございます。加藤さん、お願いします。

芸術文化の創造活動から生まれる新しい発想

加藤：浜松に知的障害者が通う「クリエイティブサポートレッツ」という団体があります。ここでは、世間で問題行動といわれる子どもたちの行動を「表現」だと捉えて、表現まで至らないかもしれないので「表現未満」という形で捉え直し、これを中心に興味深いプロジェクトをいっぱいやっておられます。それがちまた公民館や浜松のちまた会議へ発展しつつあって、福祉の活動がアートの活動であり、町づくりの活動でもあるようなところに展開しています。従来、結び付かないかもしれないと思われていたジャンルが、現在では幅広く結び付き、静岡県でもスポーツ、文化、観光を結び付けています。もっと言えば、「文化」というだけで、すべてが入るという状況になりつつあるのではないかと。文化そのものが、他の領域と幅広く結び付く時代になってきた。文化側が他の領域に提供できるものは経済効果のような説明がありましたが、経済効果よりも社会的課題を解決する時に、従来の考えでは必ずしも合意していないような新しい発想が、芸術文化の創造活動の中から生まれるわけです。そうしたことを通して、文化にもっと投資していくべきだと。投資すれば、すぐ投資者にリターンがあるというよりも、県民に投資の効果が必ずや表れるので、ぜひ投資をするべきだと言いたい。いずれにしても、文化の領域が非常に拡大するとともに、他の領域と結び付く間の総合化ということにも、これから取り組んでいく必要があるだろうと思っています。

シンポジウムの様子（2023年12月23日、静岡市グランシップにて）

太下：ありがとうございました。最後に宮城さん、お願いいたします。

物差しの数を増やすことで、人は分かり会える

宮城：地球上にはさまざまなバックグラウンドを持った人たちがいて、一見とても理解し合えないだろうと思える人たちが、「共感」という言葉の奥に結び付くことがある。その方策として、スポーツと文化芸術という2つの車輪があります。これは、古代ギリシャから同時に２つ進んでいる。僕はよく思うのですが、スポーツはバックグラウンドがものすごく違っています。あえて一つの物差しで、ものすごい違う人たちが100メートルを走ってみる。そういう時に、「人間は同じじゃん」と言える気がするのがスポーツの効能ですよね。文化芸術はその反対で、物差しの数を増やすのです。今まで、これが「美」とされていた、その物差しだけだと窮屈な人がいるわけです。例えば僕が、「美」の物差しから見ると全然美しくないと思えてくる。しかし、「美」の物差しを増やしていくと、「この物差しなら結構イケている」と思ったりする。この２つは正反対の方法ですが、最終的に「同じ人間だから分かり合えるかも」と思えるようなゴールを持っていたのです。

芸術は物差しを増やさなくてはいけないのです。その時に、今まで芸術と言われていなかった生活文化なども含まれてくるわけですよね。ここに「美」があるのです。例えば、おしぼりの畳み方でも、「日本的で美しいよね」という見方がある。天ぷらを乗せる和紙の折り方も外国にはないから、「ちょっと美しいかも」というように、いろんなところに「美」の物差しを見つけられるのです。物差しを増やすことがいわゆる多様性で、今まで芸術と言われなかったものも、実は、物差しを増やしていく役にものすごく寄与している。そういうことが、この1年間の取り組みのレガシーとして残っていけば良いと思いました。

東アジア文化都市はノーベル平和賞に値する

太下：宮城さん、ありがとうございました。この1年間の取り組みを通じて、「東アジア文化都市2023静岡県」に関心を持って来ていただいた多くの県民の方々がいらっしゃると思います。少し想像してみてください。東アジア文化都市が、今後さらに10年、20年続くことを。このプログラムが続いているということは、日中韓の3カ国で に決定的な亀裂が入っていないということです。10年後、20年後から振り返ると、3カ国が平和を維持できたことで、文化交流が一定の役割を果たしたと評価されるようになるのではないか。先ほどの溝畑さんのプレゼンテーションの中で、「静岡は国際平和の聖地」というメッセージがありましたが、東アジア文化都市がノーベル平和賞に値する、その大きなスタートをこの静岡県が切ったと想像できたら素晴らしいと思います。

SPAC『マハーバーラタ ～ナラ王の冒険～』（演出：宮城 聰）

東アジア文化都市未来宣言

シンポジウムの締め括りとして、川勝静岡県知事と東アジア文化都市2023静岡県のイベントに参加した静岡県の未来を担う県民代表が2024年以降に向けた東アジア文化都市未来宣言を行いました。

東アジア文化都市未来宣言

２０２３年、私たちは日本の文化首都「東アジア文化都市」として、東アジアの協調・共生を目指し、県民が力を合わせて、ふじのくにの文化イベントを開催してきました。

私たちは、各地域の多彩な文化をあらためて体験し、ふるさと静岡県の文化の豊かさを実感することができました。

僕たちは、芸術の力で、アフターコロナ時代の扉を開き、海外の人々とのふれ合いや交流を復活させることができました。

私たちは、東アジア文化都市との文化交流により、お互いの理解を進め、中国、韓国との親しい関係を創り出すことができました。

僕たちは、サッカーや産業など、ふるさと静岡県の多くの特色ある文化を、国内や海外に発信し、アピールすることができました。

私たちは、東アジア文化都市のブランドにより、観光やインバウンドの魅力にあふれ、国内外から人々が訪れたくなる「ふじのくに」を創造できました。

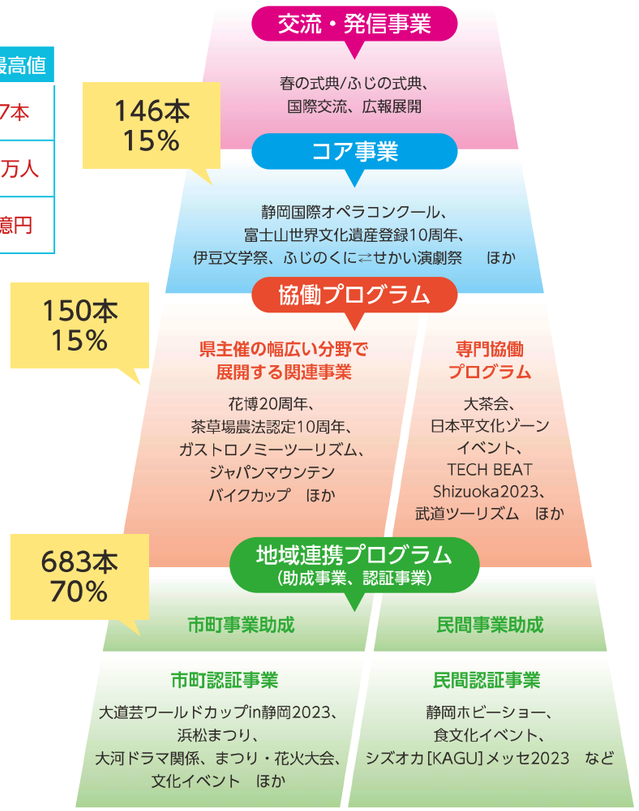
そして、静岡県は、２０２３年の成果を生かし、２０２４年以降も、東アジア文化都市開催都市として、持続可能で文化があふれる豊かな都市として、発展を続けて行くことを、未来を担う若者とともに、ここに宣言します。

成果報告

＜文化都市のプラットフォームは、どのように築いたのか＞

下記が「東アジア文化都市2023静岡県」のプラットフォームです。目標に対する実績ですが、認証事業数979本、来場者数1,345万人、経済波及効果389億円と、目標を大きく上回り、過去開催都市の実績もはるかに上回る成果となりました。プラットフォーム別では、市町、民間による地域連携プログラムが、7割の683本を占めました。県主催事業は、ほぼ計画通りの実績となりましたが、認証制度により、市町事業や民間事業をプラットフォームに取り込んだことが、高い実績を生み出しました。

目標数値	実績	過去最高値
①認証事業数500本以上	**979本**	397本
②来場者数360万人以上	**1,345万人**	357万人
②経済効果100億円以上	**389億円**	91億円



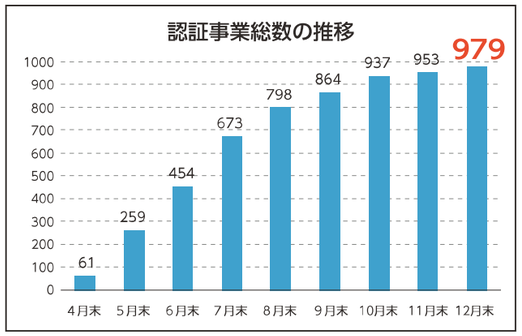
＜推進体制におけるポイントはどこか＞

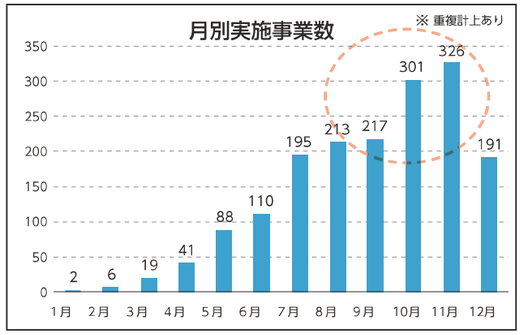
推進体制は、会長の下に最高顧問を置き、本気度、信頼性を高めました。事業成果があがったことは、庁内推進組織を立ち上げ、県庁挙げての意思統一ができたことや、各地域局が市町との連携を進めたことが大きな要因です。また、４階層のプラットフォームで主催者責任を明確化し、実行責任を分散化したマネジメント体制を推進できたことで、専任５人の小さな事務局でも高い実績を上げることができました。

区　分		主な役割
会長　静岡県知事		代表権者
最高顧問（近藤誠一氏、遠山敦子氏、橋本聖子氏）		外交、文化、スポーツの象徴顧問
実行委員会	委員長　　静岡県副知事	基本方針と執行体制 事業計画と予算の審議
	総合芸術プロデューサー　宮城聰氏	
	各分野を代表する委員	
企画専門委員（各分野毎に任命）		新たな協働プログラム企画・実施
庁内東アジア文化都市推進会議（部局長･地域局長）		庁内意思統一、各部対応の徹底 地域局は市町助成、市町連携による広報の推進
事務局	チーフ･オペレーティング･ディレクター　加藤種男氏	新規事業の助言等
	事務局長　静岡県理事（東アジア文化都市担当）	公式式典、国際交流事業、広報の実践、認証制度運用、予算管理等
	文化政策課 東アジア文化都市推進班（専任５名）	

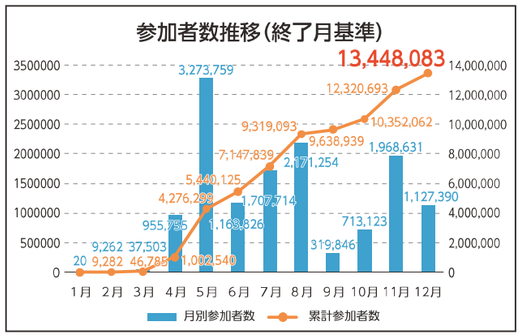
＜文化が豊かな都市であることを証明できたのか＞

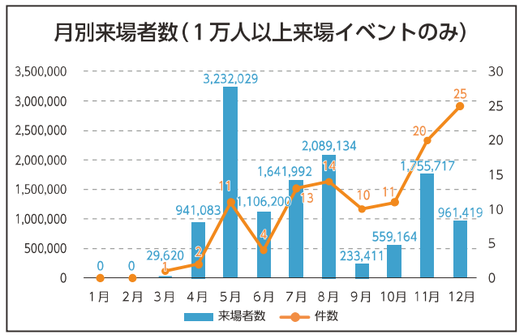
年度会計であるため、３月までの期間は準備が中心となり、事業が実施できませんでしたが、夏以降は認証事業が一気に増え、勢いが付いた結果、979件となりました。９月から11月のコア期間には、事業の半分が集中し、秋をコア期間として設定したことは成功といえます。「文化の秋」は、多くのイベントが集中していることが証明されました。





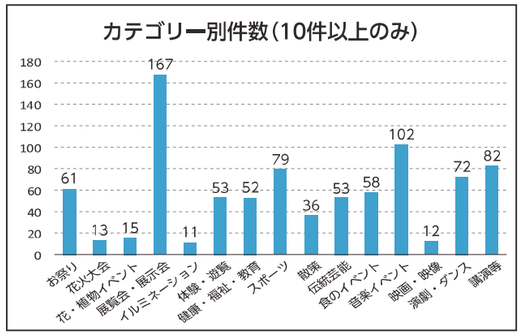
参加者数の伸びは、春の静岡、浜松の２大まつりの復活で一気に加速し、夏の花火大会や、夏祭りで２段目の加速となり、５月のコロナ規制の緩和は大きな追い風となりました。９月から11月のコア期間には事業の半分が集中しましたが、中小規模の文化事業が多く、文化の秋は地域密着の多彩な文化活動で成り立っていたことが分かります。毎週どこに行くのか迷うほど、文化イベントが豊富な静岡県、文化の豊かさは誇れるものと証明できました。

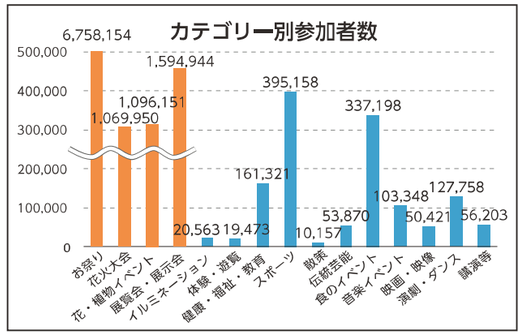




＜文化をどのように捉えたのか＞

「東アジア文化都市2023静岡県」では、文化の捉え方を文化芸術に限らず、スポーツ、食、産業に至るまで、生活文化全般に広く捉えたことが大きな特徴でした。文化の分野別の件数と参加者数です。芸術系の展覧会、音楽会が主流ですが、スポーツ、食など他分野にも満遍なく分布し、本県の文化の多彩なポテンシャルが証明できました。お祭り、花火大会の集客は群を抜いていますが、イベント数としては、多くの県民が多彩な文化を楽しんだ１年となりました。認証事業には、プロスポーツや著名アーティストによる舞台やコンサートは、殆ど含まれていません。つまり、静岡県には、無料または安価で楽しめる文化が、１年を通して豊かであることが証明されたといえます。





＜人々の心に平和の砦は築けたのか＞

国際交流について、韓国全州市とは、伝統文化、食文化、工芸、大道芸、青少年交流など、多彩な分野で相互に行き来しての交流が実現しました。また、11月には全州市長が来静し、知事と静岡市長を表敬。静岡市と交流確認書を交わし、大きな外交成果となり、今後の友好の深まりが期待されます。中国とは、梅州市とサッカーによる交流が進みました。中国、韓国と文化を分かち合えた人々には、お互いの尊敬が生まれ、争いや非難を意味なきものと思う気持ち、「平和の砦」が築けた気がしています。（実績は交流事業の項目を参照）

＜文化の主体は誰なのか＞

まとめになりますが、成果のポイントを挙げます。４階層のプラットフォームにより、市町や民間の参画を高めたことが実績の拡大につながり、祝祭化を実現できました。また、文化を文化芸術に留まらず、スポーツ、食文化など、広く捉えたことが、成果を拡大しました。助成制度を新設したことも、市町、民間のモチベーションの向上と参画の推進に有効でした。春のビッグイベントが参画し、復活したことが気運を上げました。 そして、文化の秋であるコア期間で、予想以上の大きな盛り上がりを作ることができました。一方、国際交流では、韓国全州市と積極的な交流がなされ、高い交流成果がありました。市町や民間団体の方々が積極的に参画し、それぞれの意欲や誇りを持って静岡県を発信してくれたことで、まさに、県民総がかりで文化都市の盛り上げを図ることができました。まさに、文化の主体は県民全てであり、一人一人が表現者であることを体感できた一年となりました。今後は、しっかりと東アジア文化都市による成果が、様々な場面で実を結んでいくことを期待します。

作　戦		成　果
４階層のプラットフォーム効果	▶▷▶▷	県計画の限界を民間参画により祝祭化
文化を広く捉えた	▶▷▶▷	本県の魅力を最大限に発揮し、成果を拡大
助成制度創設の効果	▶▷▶▷	市町・民間参画のモチベーションを向上
春のビッグイベントが参画	▶▷▶▷	復活が気運を向上、人々に勇気を与えた
文化の秋にコア期間を設定	▶▷▶▷	気運上昇の流れでピークを作れた
全州市と積極的に交流	▶▷▶▷	国際理解、交流が活性化、大きな成果
民間団体へ積極的に協力要請	▶▷▶▷	誇りにより静岡を発信

公式行事

東アジア文化都市2023静岡県クライマックス公演
歓喜に至れ！～ベートーヴェン「第九」による～　スタッフ・テス（株）根本浩太郎

第13回日中韓文化大臣会合、2023年東アジア文化都市宣布式

会合では、(1) 新型コロナウイルス感染症拡大の影響が続く中でも、連携して文化芸術活動の発展を支えていくこと、(2) 東アジア文化都市事業等、日中韓の枠組での文化協力事業を引き続き推進していくこと、(3) 日中韓の文化芸術の魅力とその文化的価値を世界にも発信していくこと等について、三大臣間で一致し、その成果を盛り込んだ「曲阜行動計画」を発出しました。また、2023年東アジア文化都市として日本は静岡県、中国は成都市及び梅州市、韓国は全州市が正式に決定されました。

本大臣会合の成果を踏まえ、同日、中国の胡和平文化観光部長、韓国の朴文化体育観光部長官及び2023年東アジア文化都市の首長等の同席の下、2023年東アジア文化都市宣布式も行われました。

【日程】
2022年8月26日（金）
15:00〜15:45
第13回日中韓文化大臣会合
16:00〜16:20
2023年東アジア文化都市宣布式
【会場】
オンライン開催
【出席者】
［日本］永岡桂子文部科学大臣ほか
［中国］胡和平フーフーピン文化・観光部長ほか
［韓国］朴普均パクボギュン文化体育観光部長官 ほか

大分県閉幕式、引継式

「東アジア文化都市2022大分県　閉幕式典」において、静岡県への引継式が行われました。川勝知事は、文化芸術や食、スポーツなど幅広い分野で、静岡から日本文化を国内外に一年を通じて発信し、美しい風土の中に多彩な文化が花開く「ふじのくに芸術回廊」の実現を目指すと挨拶し、成功に向けて意気込みを語りました。また、会場では、静岡県の魅力が詰まったプロモーションビデオを披露しました。

【主催】
東アジア文化都市2022大分県実行委員会、大分県、文化庁
【日程】
2022年11月6日（日）
【会場】
大分県立美術館１階アトリウム（大分市）
【来場者数】
154人

「富士山の日」フェスタ2023

２月23日の「富士山の日」に、世界遺産富士山の顕著な普遍的価値を次世代へと確実に継承するとともに、その保全に関して県内外に理解を広げていくため、静岡・山梨両県は「富士山の日」フェスタ2023を開催しました。富士山の世界文化遺産登録10周年を祝うとともに、川勝知事が県民及び国内外に向けて「東アジア文化都市2023静岡県」宣言を読み上げ、東アジア文化都市の認知度向上と県民参画の呼びかけを行いました。

《プログラム》
ウェルカムミュージック
　富士山静岡交響楽団　弦楽四重奏「ふじの山」
主催者挨拶、来賓祝辞、祝電披露等
富士山世界文化遺産登録10周年イヤー開幕セレモニー
東アジア文化都市2023静岡県宣言
長崎山梨県知事による富士五湖自然首都圏フォーラムの概要紹介
SPAC演劇『羽衣』
参議院議員橋本聖子氏による記念講演「富士の国からスポーツ文化を世界に」

【主催】
静岡県、山梨県
【日程】
2023年2月23日（木・祝）
14時から16時10分
【会場】
プラサヴェルデ（沼津市）
【来場者数】
350人

ウェルカムミュージック

川勝静岡県知事あいさつ

10周年記念ロゴマーク発表

東アジア文化都市2023静岡県宣言

10周年イヤー開幕セレモニー

SPAC演劇『羽衣』

東アジア文化都市2023静岡県 春の式典

2023年の日本の東アジア文化都市として、中韓の開催都市派遣団を招へいし、「東アジア文化都市2023静岡県春の式典」を開催しました。

式典のオープニングでは、第5回静岡国際オペラコンクールで第1位、三浦環特別賞を受賞した光岡暁恵さんが、各都市の魅力を紹介する美しい映像を背景に、「私は夢に生きたい」、「ふじの山」の２曲を高らかに歌い上げ、式典の開会を華々しく飾りました。

式典の開会にあたり川勝知事が静岡県を代表して挨拶し「日本の文化の顔、日本のいわば文化首都として、成都市、梅州市、全州市の皆さま方とともに、10年の節目をきっかけにして、大いに東アジアの存在感を世界にも示していき、世界平和に貢献をしていきたい」と決意を述べました。

続けて主催者として文化庁の都倉俊一長官が「静岡県は、今年、世界文化遺産登録10周年を迎える富士山をはじめ、歴史的な遺産や美しい自然にとどまらず、舞台芸術、音楽、伝統芸能、食文化など、実に多彩で豊かな文化が育まれてきた土地であり、県立劇団SPACや静岡国際オペラコンクールに代表されるように、静岡県独自の文化芸術の取組も盛んであり、まさに「東アジア文化都市」としてふさわしい都市と言えます。中国の成都市、梅州市、韓国の全州市との交流を通じ、静岡県がさらなる飛躍を遂げられ、日本全国に文化芸術のさらなる可能性を示してくれることを期待しています。」と、ビデオメッセージによる挨拶がありました。

中韓の開催都市を代表して、梅州市の超東副市長、全州市の金仁泰副市長が交流への抱負と新たな関係構築への期待を述べました。

その後、各都市の文化を紹介する文化公演が行われ、中国２都市の公演映像に続き、全州市の公演団による「全州旗接遊び」に、会場が熱気に包まれました。

フィナーレは、富士山がユネスコの世界遺産に登録されたタイミングで制作され、10年に渡り世界遺産富士山への想いと共に踊り継がれてきた『不尽の山を望る歌』を佐藤典子舞踊団が披露し、静岡県の東アジア文化都市事業の本格的な開幕を告げる式典となりました。

《プログラム》
オープニング
開会挨拶：静岡県知事
主催者挨拶：文化庁長官
各都市紹介映像・代表挨拶：
　中韓各都市代表　梅州市副市長　超東、全州市副市長　金仁泰
各都市文化公演
　成都市　パンダ雑劇芸術団「舞韵天府」（映像）
　梅州市　広東漢劇伝承研究院　「南国牡丹の香り」（映像）
　全州市　ハプグッマウル「全州旗接遊び」
　静岡県　ＳＰＡＣ紹介映像
フィナーレ
　佐藤典子舞踊団「不尽の山を望る歌」

【主催】
東アジア文化都市2023静岡県実行委員会、静岡県文化庁
【日程】
2023年５月２日（火）
【会場】
グランシップ 中ホール（静岡市）
【来場者数】
600人

オープニング

川勝平太 静岡県知事

都倉俊一 文化庁長官

趙東 梅州市副市長

金仁泰 全州市副市長

記念撮影

成都市文化公演

梅州市文化公演

全州市文化公演

フィナーレ

ＳＰＡＣ特別公演『天守物語』

春の式典に引き続き、駿府城公園へ会場を移し、静岡県を代表する文化公演として、ＳＰＡＣ－公益財団法人静岡県舞台芸術センターによる特別公演『天守物語』が上演され、式典の出席者が特設会場で野外劇を観劇しました。『天守物語』は1996 年に初演され、日本国内をはじめ、インド、パキスタン、中国、エジプト、韓国、アメリカ、フランス、台湾等の 国内外30都市で上演されてきました。出席者は、宮城聰芸術総監督による演出の特徴である「俳優による生演奏」と「二人一役の手法（一つの役を“台詞”を担当する俳優「語り手」と“動き”を担当する俳優「動き手」の二人で演じる）」をはじめ、アジアの多様な演劇の伝統を現代の新しい創作につなぐ趣向が随所に散りばめられた“祝祭音楽劇”の原点を楽しみました。

©Y.INOKUMA

©M.HIRAO

©Y.INOKUMA

©Y.INOKUMA

【主催】
東アジア文化都市2023静岡県実行委員会、文化庁
【日程】
2023年５月２日（火）
【会場】
駿府城公園紅葉山庭園前広場特設会場（静岡市）
演出：宮城 聰
作：泉 鏡花

2023年東アジア文化都市・中国成都活動年開幕式

成都市における東アジア文化都市の一連の活動の幕開けを飾る式典が開催され、静岡県からは上海事務所長が出席し、川勝知事のビデオメッセージが上映されました。また、過去に選定された中国の東アジア文化都市の代表が壇上に上がり、「2023年東アジア文化都市共同宣言」に署名しました。日中韓４都市の伝統文化も披露され、静岡県からは静岡県舞台芸術センターＳＰＡＣの『羽衣』映像を上映しました。

【日程】
2023年６月29日（木）
【会場】
四川省成都世紀城国際会議中心５階水晶庁（中国・成都市）

2023年東アジア文化都市・中国梅州活動年開幕式

「客家の首都梅州のスタイルを強調し、東アジア文化の統合を促進する」をテーマとした「2023年東アジア文化首都・中国梅州活動年」が正式に開幕しました。王輝市長をはじめ東アジア文化都市関係者があいさつ、各都市の出席者が壇上にて開幕ボタン起動式に参加し、梅州市を代表する客家文化を中心に、客家山歌、舞踊、雑技、広東省伝統演劇など文化公演を鑑賞しましました。静岡県からは上海事務所職員が出席し、川勝知事のメッセージ動画が上映されたほか、会場ではSPAC『羽衣』の映像が上映されました。

【日程】
2023年４月13日（木）
【会場】
亮勝客家芸術センター劇場大ホールなど（中国・梅州市）

全州市開幕式

日中韓の開催都市関係者のほか約2,000名が出席し盛大に開幕式が開催されました。出野勉静岡県副知事によるあいさつでは、富士山を初めとする世界に誇る自然・文化芸術・食を紹介しました。また、式典では、東アジアの魅力を日中韓で連携して世界へ発信するために各都市の文化公演を行い、静岡県からは静岡県舞台芸術センターSPACが『羽衣』を披露しました。

【日程】
2023年４月26日（水）
【会場】
韓国ソリ文化の殿堂 モアク堂（韓国・全州市）

東アジア文化都市2023静岡県 ふじの式典

12月３日、東アジア文化都市2023静岡県を総括する行事「ふじの式典」を開催しました。

静岡県立磐田北高等学校箏部によるドラマチックな箏演奏のオープニングから始まり、東アジア文化都市に選定された中国成都市・梅州市、韓国全州市の各都市の文化を紹介していく文化公演が行なわれました。

１年を通して多彩な文化イベントが開催され、県民総がかりの取り組みが結実した１年となりました。

主催者として川勝平太静岡県知事が「各都市と食、スポーツなどを含む文化全体で交流した。東アジア文化都市の原点は平和づくり。東アジアは決して争わないという強い志が生きている。11回目を石川県にバトンタッチし、できる限り応援する。時代につないでいくための出発点といえる。」と振り返り、2024年に選定された石川県に引き継ぎしました。

東アジア文化都市2023静岡県では、将来の静岡県の文化を担う多くの次世代の方々が活躍しました。フィナーレは、次世代の中から浜松市主宰の合唱団ジュニアクワイア浜松の皆さんの美しく楽しい歌声で始まり、最後には、東京2020パラリンピックの開会式で演奏を披露したバイオリニスト伊藤真波さん、今年開催された第９回静岡国際オペラコンクール本選で入選された伊藤尚人さんとも共演し、会場からは盛大な拍手と歓声が上がりました。

《プログラム》
オープニング
　静岡県立磐田北高校箏部
事業総括
主催者挨拶
各開催都市代表挨拶
各開催都市文化公演
　成都市：成都交響楽団「成都」
　梅州市：梅州市客家山歌保存センター「杯花舞」
　全州市：全州市立国楽団「散調合奏」
クライマックス公演紹介
引継式
フィナーレ
　伊藤真波、伊藤尚人、ジュニアクワイア浜松
記念撮影

【主催】
東アジア文化都市2023静岡県実行委員会、文化庁
【日程】
2023年12月3日（日）
【会場】
オークラアクトシティホテル浜松
４階「平安」（浜松市）
【来場者数】
250人

オープニング

事業総括映像

川勝平太 静岡県知事

都倉俊一 文化庁長官

趙東 梅州市副市長

李英淑 全州市文化政策課長

成都市文化公演

梅州市文化公演

全州市文化公演

引継式

馳浩 石川県知事

フィナーレ

記念撮影

東アジア文化都市2023静岡県クライマックス公演 歓喜に至れ！～ベートーヴェン「第九」による～

静岡県で日本の現代舞踊を確立してきた佐藤典子氏の企画・監修、SPAC芸術総監督の宮城聰氏の台本・演出により、リストが編曲したベートーヴェンの「第九」をベースに、新しい舞台を上演しました。

静岡県にゆかりのあるピアニストや声楽家による演奏に合わせ、東京2020パラリンピック開会式にも出演した大前光市氏をソロダンサーとして迎えるなど、ダンス×音楽×演劇を融合した新しい舞台を創作しました。

©スタッフ・テス（株）根本浩太郎

©スタッフ・テス（株）根本浩太郎

©スタッフ・テス（株）根本浩太郎

©スタッフ・テス（株）根本浩太郎

【主催】
歓喜に至れ！実行委員会、
東アジア文化都市2023静岡県実行委員会
【日程】
2023年12月3日（日）
【会場】
アクトシティ浜松　中ホール
（浜松市）
【来場者数】
786人

全州市閉幕式

「memory」をテーマに、一年間多岐にわたる分野において活発に実施した日中韓の文化交流と全州固有の文化による成果に思いをはせ、全州市長による閉幕宣言が行われ、静岡県からは渋谷静岡県理事が壇上で祝辞を述べました。式典では、日中韓の各都市による文化公演が披露され、大塚晴也氏（島田市）とＳＰＡＣによる津軽三味線公演を上演しました。

【日程】
2023年11月２日（木）
【会場】
国立無形遺産院 大公演場
（韓国・全州市）

2023 東アジア文化都市・中国成都活動年閉幕式コンサート

2023 東アジア文化都市・中国成都活動年閉幕にあたり、成都交響楽団によるコンサートが開催されました。コンサートでは、「胡蝶」、「I Love You, China」などの中国古典曲のほか、日韓の有名曲も演奏され、３か国文化の交流と相互理解を深めました。会場では、静岡県川勝平太知事のビデオメッセージや、静岡県の文化公演として三味線公演映像が上映されました。

【日程】
2023年12月７日（木）
【会場】
成都交響楽団コンサートホール
（中国･成都市）

2023 東アジア文化都市・中国梅州活動年閉幕式

式典では、梅州市関係者によるあいさつのほか、日韓の開催都市から祝辞が寄せられ、参加者による記念撮影、舞踊・歌謡パフオーマンスを行い閉幕しました。また、式典にあわせ東アジア文化都市梅州活動年の取組を記録した150点余りの写真展及び梅州市の茶文化紹介、伝統工芸品の展示が行われ、写真展では静岡県の写真も展示されました。

【日程】
2023年12月７日（木）
【会場】
金徳宝凱国際温泉度度假酒店
（中国・梅州市）

交流事業

東アジア青少年伝統遊び文化祭り

青少年交流

東アジア青少年伝統遊び文化祭り

韓国全州市が日中韓の青少年による交流事業を開催し、静岡県からは静岡サレジオ高校の生徒9名、教員１名が参加しました。各都市を代表して参加した生徒等約50名は、一緒に各国の伝統遊びを体験し、数日間を過ごすことで、国境と言葉の壁を越えて繋がる交流の場となりました。参加した生徒は「古くから交流があったことを認識した」、「日韓の文化には共通点が多いと感じた。これからのより良い関係づくりに貢献したい」など感想を口にしており、若い世代の交流推進やグローバル人材の育成に期待が広がる事業となりました。

【主催】
全州市、韓国伝統文化の殿堂
【開催日】
2023年7月26日(水)～7月30日(日)
【会場】
韓国伝統文化殿堂など(韓国･全州市)
【参加者数】
全州市：全州完山女子高校、韓国伝統文化高校ほか　30人
静岡県：静岡サレジオ高校　10人
成都市：成都文化芸術学校　10人

静岡サレジオ高校と全州市完山女子高校による交流

韓国全州市の完山女子高校から生徒５名、教員２名が来静し、日韓の伝統遊びなどを通じて静岡サレジオ高校の生徒と交流を行いました。滞在中、静岡浅間神社や清水ドリームプラザ、駿府の工芸匠宿など文化観光地で静岡県の文化を体験し、8月15日（火）には両校の生徒が出野副知事を表敬訪問し、韓国全州市で開催された「東アジア青少年伝統遊び文化祭り」など交流について報告しました。

【主催】
静岡サレジオ高校、完山女子高校
【開催日】
2023年8月13日(日)～8月16日(水)
【会場】
静岡サレジオ高校ほか（静岡市）
【参加者数】
15人

浙江省短期留学生相互交流事業

静岡県では、友好提携関係にある中国浙江省との教育交流を深め、大学・学生交流を促進するため、2008年度から短期留学生交流を実施しています。2023年は、浙江省から短期留学生８名を静岡大学、２名を静岡県立大学で受入れました。期間中、大学生を対象としたガストロノミーツーリズムの講座への参加、駿府の工房匠宿等で開催された地域芸術祭「SHIZUOKA ART VISION」の訪問等、浙江省の留学生が静岡県の多彩な魅力に触れる機会になりました。

【主催】
静岡県
【開催日】
2023年9月27日(水)～12月15日(金)
【会場】
静岡大学、静岡県立大学ほか(静岡市)
【参加者数】
10人

東アジア文化都市学生フォーラム

「学生が考える東アジア地域の文化と文化交流」をテーマに、日本・韓国・中国の学生交流を通じて三国間の理解促進を図るとともに、新たな大学・学生間の交流を創出することを目的とし、成都市・梅州市（中国）、全州市（韓国）から大学生を招へいし、県内の日本人学生や留学生を交えたフォーラムを開催しました。静岡県の大学生が中心となって企画運営したフォーラムでは、自国文化のマインドマップ制作を通じた、東アジアの文化に関するディスカッションを行い、三国間の文化の相互理解を深めました。また、フィールドワークとして、富士山世界遺産10周年を記念し、富士山五合目や富士山世界遺産センターを訪問したほか、本県の歴史、文化、食など多彩な静岡県の文化に触れ交流を深めました。

【主催】
静岡県大学課（協力：地域外交課、静岡県立大学グローバル地域センター）
【開催日】
2023年10月６日(金)～10月10日(火)
【会場】
グランシップ、静岡市、富士宮市　等
【参加者数】
延べ87人
中国：４人（成都市：２人、梅州市：２人）、韓国（全州市）：４人、日本：各日30人程度（企画・運営、通訳、運営協力、一般公募）

静岡日韓友好フェスティバル2023 第12回静岡韓国語スピーチ大会&日韓友好ステージ

言葉と文化芸術を通して日韓両国間の相互理解を深めることを目的に、韓国語スピーチ大会と日韓友好ステージを開催しました。静岡県と韓国忠清南道の友好協定締結10周年を記念し、協定締結を結んでいる韓国の忠清南道に所在する韓国K―POP高等学校の生徒10名を招き、若い世代間の日韓友好的交流を推進しました。

【主催】
在日本大韓民国民団静岡県地方本部
【開催日】
2023年12月２日(土)
【会場】
MIRAIEリアン コミュニティホール
七間町 多目的ホール（静岡市）
【来場者数】
300人

K―POPトークカフェ

日韓の高校生交流として4年目となる2023年は、これまでのオンライン形式でなく対面による交流を行いました。総勢30人以上のK-POPが大好きな高校生たちが集まり、韓国K-POP高等学校の生徒たちとそれぞれ練習してきたダンスや歌を一緒に合わせたり、トークコーナーでお互いの学校生活や好きなアーティストについて語り、大いに盛り上がりました。最後にグループごとに練習した歌やダンスの発表を行い、メンバー間の固い絆が生まれ、互いに今後の交流の継続を約束しました。

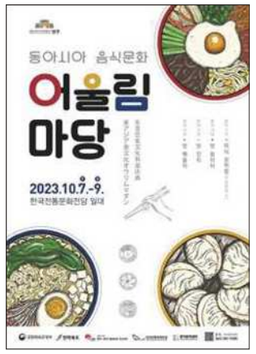
【主催】
静岡県
【開催日】
2023年12月３日(日)
【会場】
静岡市清水文化会館マリナート
(静岡市)
【参加者数】
40人

食文化交流

東アジア食文化ふれあい広場

ユネスコ食文化創造都市である韓国全州市から、食文化交流の打診があり、ふじのくに食の都づくり仕事人（日本料理）である一木敏哉氏（浜松市）による静岡県のお茶やかつお節、全州市の特産物「全州八味」を食材とした和食料理体験教室を開催しました。一木氏からは、和食の特徴であるかつお出汁や静岡県の郷土料理を紹介し、全州市の参加者に静岡県や日本の食文化に触れていただくことができました。

【主催】
全州市、韓国伝統文化の殿堂
【開催日】
2023年10月7日(土)
【会場】
韓国伝統文化の殿堂（韓国・全州市）
【来場者数】
40人



東アジア食彩フェスティバル

2023年の東アジア文化都市に選定された中国成都市と韓国全州市は、共にユネスコ食文化創造都市に認定されている「食の都」です。成都の四川料理やビビンバをはじめとする韓国料理など中韓の食文化を体験するイベントを開催しました。東京でも大盛況のグルメイベント「四川フェス」と連携し東京、愛知、静岡の四川料理店が一同に集結したほか、大型フードトラック「BISTOR LAND SHIP」では中韓コラボメニューが登場し、来場者は、秋空の下、本場の美食とともに、変面師 王文強氏率いる中国雑技団によるパフォーマンスを楽しみました。

【主催】
東アジア食彩フェスティバル実行委員会
【開催日】
2023年10月28日(土)～10月29日(日)
【会場】
グランシップ芝生広場（静岡市）
【来場者数】
5,023人

スポーツ交流

静岡ゴールデンサッカーアカデミー2023

中学生年代の国際ユースサッカー大会に韓国全州市から全北現代モータースU-15を招へいし、競技力の向上を図るとともに、サッカーを通じたスポーツ交流を行いました。中国梅州市からも関係者２名が来静し、大会の視察と、同時に開催した指導者講習会への参加を通じて、今後のサッカー交流や指導者派遣について静岡県のサッカー関係者と意見交換を行いました。

【主催】
静岡ゴールデンサッカーアカデミー実行委員会
【開催日】
2023年10月7日(土)～10月9日(月)
【会場】
エコパスタジアム、補助競技場(袋井市)
【来場者数】
3,400人

伝統文化交流

東アジア無形遺産国際文化交流

歓待の文化が栄える韓国全州市において、「歓待～客人をもてなすそれぞれの方法～」をテーマに日中韓３国の伝統芸能団体が公演しました。全州市からは教房舞踊、中国成都市からは川劇の舞踊劇、静岡県からは熱海見番による芸妓舞踊を披露し、東アジア各国の無形文化遺産の多様性に触れる機会を提供することで、無形文化遺産への理解が一層深まりました。

【主催】
ユネスコアジア太平洋無形遺産センター
【開催日】
2023年9月8日(金)～9月9日(土)
【会場】
国立無形遺産院（韓国・全州市）

東アジア紙文化特別展

韓国の伝統紙「韓紙（ハンジ）」の産地である全州市において、日中韓の伝統紙を学び、相互理解するために東アジア紙文化特別展が開催されました。期間中、伝統紙の手漉き試演や、日中韓の紙文化をテーマとしたファッションショー、紙作品の展示、ワークショップなどが開催され、伝統紙の活用可能性を知ることで、今後の韓紙産業の変化への期待が高まりました。静岡県からは、内藤恒雄氏（富士宮市）による和紙の手漉き実演や、張子作家の坂田吉章氏（浜松市）による張子ワークショップが実施され、内藤氏の和紙、坂田氏及び羽根田英世氏（島田市）の作品が展示されました。

写真 YUYA SUZUKI

写真 YUYA SUZUKI

【主催】
韓国伝統文化の殿堂
【開催日】
2023年9月15日(金)～10月28日(土)
【会場】
韓紙産業支援センター、韓国伝統文化殿堂ほか（韓国・全州市）

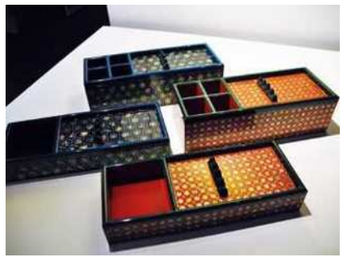
東アジア「全・成・梅・静展」

朝鮮後期の三大名筆に数えられる蒼巌三晩など、傑出した書芸家のふるさとである韓国全州市で、漢字文化と儒教文化を共有する韓国の書芸、中国の書法、日本の書道が一堂に会し、世界書芸全北ビエンナーレと連携した展示を行いました。韓国から23名、中国の成都市から2名・梅州市から5名、静岡県から5名が参加し、似ているようで異なる、異なるようで似ている、3ヶ国の「和而不同」を表現しました。急変する現代社会において、墨で表現された東アジアの書の精髄と静かに流れる時間の美しさを味わう契機となりました。

【主催】
世界書芸全北ビエンナーレ組織委員会
【開催日】
2023年9月22日(金)～10月8日(日)
【会場】
韓国伝統文化殿堂（韓国・全州市）

交差しつづける技 東アジア工芸展

土・火・木・漆・糸・布、様々な素材を巧みに扱い世界を舞台に活躍する日中韓9名の若手の工芸家による展示が、駿府の工房 匠宿を舞台に行われました。初日の11月3日には、日本人工芸家3名と来日した中韓の工芸家3名によるトークセッションや交流会を開催しました。会期中は、参加工芸家による小学校への訪問・実演や匠宿オリジナルコラボ体験の実施、韓国からも複数の団体が視察に訪れるなど、国内外問わず現役で活躍する工芸家との交流や、作品に対する思い、技術に直接触れる機会を創出しました。



＜参加作家＞
鄒英姿　Zou Ying Zi（中国・刺繍）
崔任廷　Choi ImJung（韓国･テキスタイル）
洋輔　Yousuke（日本・手芸家）
李宣周　Lee SeonJoo（韓国・漆芸）
小田伊織　Iori Oda（日本・漆芸）
鄒伝志　Zou Chuanzhi（中国・漆芸）
前田直紀　Naoki Maeda（日本・陶芸）
黄永星　Huang Yongxing（中国・陶芸）
金世玩　Kim Sewan（韓国・陶芸）

【主催】
駿府の工房匠宿
【開催日】
2023年11月3日(金)～12月3日(日)
【会場】
駿府の工房匠宿伝統工芸館(静岡市)
【来場者数】
5,872人

大道芸交流

東アジア文化都市　全州芸術乱場（ナンジャン）

文化観光都市である韓国全州市内の名所などをはじめとし、様々な空間を舞台とした野外芸術祭に日中韓のアーティスト約250名が参加し、50以上の公演を繰り広げ、全州市民や観光客と触れあいました。静岡県からは、大道芸ワールドカップin静岡2022年大会の出場アーティストから３組7名（プリコロハウス、アストロノーツ、BiG Roots）が参加し、会場を沸かせるとともに、当該イベントの出場者が2023年の大道芸ワールドカップin静岡に出演したことで、静岡市と全州市の野外イベントによる相互交流が実現しました。

【主催】
全州市、全州文化財団
【開催日】
2023年10月7日(金)～10月9日(月)
【会場】
全州韓屋村、
全羅監営、豊南門（韓国・全州市）
【来場者数】
123,895人

大道芸ワールドカップin静岡

30回目の節目の大会となった2023年は、コロナ禍を経て４年ぶりの通常開催となり、歴代チャンピオン等海外アーティストを含む８カ国52組のアーティストが妙技を繰り広げました。第30回記念特別企画として、総勢50名に及ぶアーティストが繰り広げる音楽と技のコラボレーション企画「スペクタクルショウSpark!」を初めて開催したほか、天候に関係なく屋内で楽しめるステージも用意しました。また、静岡市と交流がある韓国釜山市及び2023年の東アジア文化都市に選定されている韓国全州市から、フェスティバル交流アーティストとして計５組が出演しました。百万人を超える来訪者により、市街地は大いに賑わったほか、普段は公共空間である公園や路上もパフォーマンススポットとなり、まさに「まちは劇場」を体現するイベントとなりました。

【主催】
大道芸ワールドカップ実行委員会
【開催日】
2023年11月2日(木)～11月５日(日)
【会場】
駿府城公園ほか　全18ポイント
(静岡市)
【来場者数】
1,180,000人

＜韓国全州市の参加アーティスト＞
キム・ジェイン
キム・スンジュン

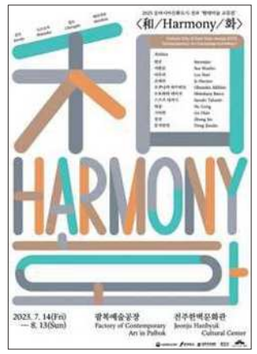
現代アート交流

韓中日現代美術交流展「和/화/Harmony」

日中韓３ヶ国４都市から11名の現代美術作家が参加し、韓国全州市にて、東アジア文化都市の調和と平和な未來に向けて「和/화/Harmony」をテーマに現代美術の作品展示を行いました。東アジア3国は儒教と漢字文化など文化的絆を共有していますが、近年、政治、経済、軍事的な理由で反目を重ねてきました。本展示では、文化の力には危機と激動の瞬間にも協力して一緒に克服できる底力があることを示し、また、東アジアの現代美術の進むべき道を模索し、現状を振り返る好機となりました。

＜参加作家＞　11名（韓国４名、日本３名、中国４名）、57作品
韓国：Haejun Jo 、Beomjun Kim、Ruri Lee、Wanho Seo
日本：本原令子、鈴木崇、奥中章人
中国：Gu Dian（成都市）、張晋 Zhang Jin（成都市）、何工 He Gong（成都市）、Deng Jian Jin（梅州市）

【主催】
全州市、全州文化財団
【開催日】
2023年7月14日(金)～8月13日(日)
【会場】
八福芸術工場、寒碧文化館展示室
（韓国・全州市）



日中韓アーティスト協働

中国・韓国から静岡県に招へいしたアーティストが、各地域に滞在し作品制作を行う「アーティスト・イン・レジデンス」を実施しました。参加アーティストは地域でのリサーチを行い、アーティスト同士や地域住民との交流を図りながら作品を制作し、芸術祭での作品展示等を行いました。また、作品制作過程や、制作者の声などをWebサイトやSNSで発信しました。

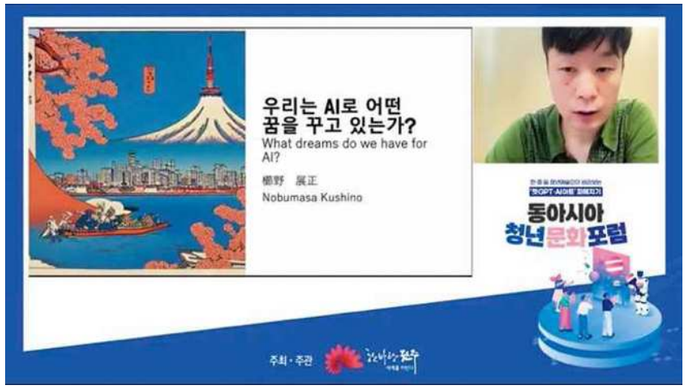
【主催】
原泉アートプロジェクト、
ＮＰＯ法人クロスメディアしまだ、
PROJECT ATAMI実行委員会
【開催時期】
2023年7月～12月
【会場】
掛川市、島田市、熱海市

＜実施団体/参加作家＞
原泉アートプロジェクト（掛川市）/ 柯明 KE MING（中国）、施琦 SHI QI（中国）王墨石　WANG MOSHI（中国）
NPO法人クロスメディアしまだ（島田市）/イ･イス LEE ISOO（韓国）、Instant Coffee（韓国）
PROJECT ATAMI実行委員会（熱海市）/ 刘毅 LIU YI（中国）

学術交流

東アジア青年文化フォーラム

「韓中日青年芸術人によるChatGPT・AIアートの考察～我々は、ChatGPTやAI作品を芸術作品として認めるべきか～」をテーマに掲げ、日中韓の若手芸術関係者が、文化芸術はＡＩ時代とどのように向き合っていくべきか、オンラインでの発表・討論を行いました。静岡県からは、櫛野展正氏（アーツカウンシルしずおかチーフプログラムディレクター）が「我々はAIにどんな夢を見るのか？」と題した発表を行い、意見交換に参加しました。



【主催】
全州市
【開催日】
2023年8月17日(木)
【会場】
オンライン（ZOOM、YouTube）、オフライン（韓国伝統文化の殿堂）によるハイブリッド開催
【参加者数】
80名（オフライン60名、オンライン20名）

静岡県立大学グローバル地域センターシンポジウム「東アジア地域における博物館・図書館の役割」

中国成都市の成都博物館副館長　黄暁楓氏が「地域文化の拠点としての博物館－成都博物館の展示戦略とプロモーションを例として」と題し講演したほか、静岡市歴史博物館　館長中村羊一郎氏が「地域の歴史を学び、市民で育てる博物館」と題した講演を行いました。また、「本をとおした地域交流　昔・今・未来」と題したパネルディスカッションでは、韓国全州市図書館本部の趙美貞氏が全州市の図書政策を紹介した他、あひる図書館副館長　徳丸まゆみ氏、静岡県立中央図書館　鈴木由美氏が登壇し、静岡市の私設図書館、公立図書館の事例を紹介しました。県民、図書館関係者、静岡県大学課主催の「学生フォーラム」参加者である成都、梅州、及び全州の学生が来場し、参加者からは、成都の博物館にかける情熱や企画力への関心の高さ、全州の図書館をとおしたまちづくりの様子に対し、驚きと「勉強になった」との声が寄せられ、まさに「東アジア文化都市」の名にふさわしいシンポジウムとなりました。

【主催】
静岡県立大学グローバル地域センター
（協力：静岡県大学課、地域外交課）
【開催日】
2023年10月8日(日)
【会場】
グランシップ会議ホール風(静岡市)
【来場者数】
100人

その他の交流

東アジア文化交流フェア EAST ASIA meets SHIZUOKA

「春の式典」に引き続き、東アジア文化都市2023静岡県の本格的な幕開けを盛り上げるイベントがゴールデンウィークに開催されました。“五感で楽しむ文化交流“をテーマに東アジアをテーマに様々なイベントが行われ、東アジアカルチャーステージのほか、中国・韓国の食文化が楽しめるグルメコーナーや、文化体験のできるワークショップ、各国の遊び体験コーナー、伝統衣装の展示や試着やなど、子供から大人までが多彩な東アジアの文化を楽しみました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【開催日】
2023年5月3日(水)～5月4日(木)
【会場】
グランシップ大ホール・海、芝生広場(静岡市)
【来場者数】
19,931人

静岡県・韓国忠清南道友好協定締結10周年記念公演

静岡県と韓国忠清南道（チュンチョンナムド）との友好協定締結10周年を記念し、忠清南道舒川（ソチョン）郡立伝統舞踊団及び佐藤典子舞踊団による文化公演を開催しました。また、ホワイエでは忠清南道の観光イベント紹介及び静岡空港利用促進のPRを実施しました。400人の来場者に、両県道の文化芸術や交流のあゆみ、忠清南道の魅力を紹介することができました。

【主催】
静岡県、韓国忠清南道
【開催日】
2023年5月24日(水)
【会場】
グランシップ中ホール（静岡市）
【来場者数】
400人

韓国文化の日in Shizuoka

静岡県と韓国忠清南道の友好協定締結10周年等を記念し、様々な韓国文化に一日で触れることができるイベントを開催しました。ステージでは、韓国の人気歌手によるアカペラ公演や、全州剣舞などの韓国伝統文化公演、テコンドーパフォーマンス、K-POPダンス、日韓人気YouTuberが全州市の魅力を紹介する観光トークショーが行われました。このほか、会場には韓国文化体験コーナーが設置され、韓服試着、コチュジャン作り、韓国茶プチ試飲会、韓国伝統工芸、ハングルカリグラフィー、ハングルハンコ作り、K-POPダンス教室などにより、来場者は韓国文化を堪能しました。

【主催】
駐日韓国大使館韓国文化院、静岡県
【開催日】
2023年10月28日(土)
【会場】
グランシップ中ホール（静岡市）
【来場者数】
900人

東アジア文化都市2023 IN ATAMI

韓国全州市の文化交流団を熱海市に迎え、熱海芸妓の定期公演に合わせた全州市公演団による特別公演や、有名料理講師による全州市発祥のビビンバの料理教室、全北大学教授による特別講演「全州市の魅力について語る」を行い、両市間の相互理解と友好親善を深めました。

【主催】
熱海市日韓親善協会
【開催日】
2023年10月29日(日)
【会場】
熱海芸妓見番ほか（熱海市）

東アジア文化都市2023静岡県記念事業（ロダンウィーク連携事業）中国文化体験イベントブース&ステージ

静岡県立美術館の「ロダンウィーク2023」にあわせ、2日間に渡り中国文化を身近に感じられる体験型イベントを開催しました。静岡県とともに東アジア文化都市に選出された中国成都市、梅州市の文化紹介ブースをはじめ、成都が誇る伝統芸能「変面」のステージや、中国茶の紹介・試飲、漢服試着体験、シャンシャンの写真展やパンダの着ぐるみと記念撮影など、多くの来場者が中国文化を楽しみました。

【主催】
(一財)アジア芸術文化促進会
【開催日】
2023年11月4日(土)～5日(日)
【会場】
静岡県立美術館（静岡市）
【来場者数】
450人

ふじのくに芸術祭2023・合唱コンクール

東アジア文化都市2023静岡県特別招待として、韓国・全州市のダルビッハーモニー合唱団37名が韓国の合唱曲や「翼をください」を披露し、合唱を通じた交流を行いました。コンクールには県内12団体が参加し、浜松ライオネット児童合唱団（浜松市）が芸術祭賞を受賞しました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、静岡県文化協会
【開催日】
2023年11月19日(日)
【会場】
グランシップ中ホール（静岡市）
【来場者数】
650人

コア事業

超老芸術展から稲田泰樹氏の≪クライシス－地球温暖化≫

事業報告（コア事業）プログラム内容

ふじのくに⇄せかい演劇祭2023

SPACでは、1999年に開催された世界の舞台芸術の祭典「第2回シアター・オリンピックス」の成功を受けて、2000年より「Shizuoka 春の芸術祭」を毎年行い、各国から優れた舞台芸術作品を招聘・紹介してきました。2011年からは、名称を「ふじのくに⇄せかい演劇祭」と改め、新たなスタートを切りました。

「ふじのくに⇄せかい演劇祭」という名称には、「ふじのくに（静岡県）と世界は演劇を通して、ダイレクトに繋がっている」というメッセージが込められています。静岡県の文化政策である「演劇の都」構想と連携しながら、世界中から優れた演劇・ダンス・人形劇・映像などの舞台芸術作品を静岡に集め、毎年ゴールデンウィークに開催しています。国や地域を超えて、アーティストや観客、地域の人々が直接交流することのできる祝祭（フェスティバル）です。

成果

令和５年は静岡県が「東アジア文化都市」に選ばれたことから、中国・韓国からの招聘作品を多くラインナップしました。開幕を飾ったのは、中国の小劇場演劇をリードする演出家孟京輝による『アインシュタインの夢』。韓国からは『ＸＸＬレオタードとアナスイの手鏡』『パンソリ群唱～済州島 神の歌～』『Dancing Grandmothers～グランマを踊る～』の３作品を上演し、多彩な舞台表現に触れることができました。また、日中韓の演出家によるトークイベント「いま演劇にできること～アジアの演出家たちの視点～」も行い、活発な意見交換ができました。

(c)Y.INOKUMA

(c)Y.INOKUMA

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター　ほか
【日程】
2023年4月29日～5月7日
【会場】
静岡芸術劇場、静岡県舞台芸術公園（静岡市）
【来場者数】
1,873人

ふじのくに野外芸術フェスタ『天守物語』

SPACの芸術総監督である宮城聰が演出しました。本作の初演は1996年、以降国内外30都市で上演し、各地で大きな反響を生んだ宮城監督の代表作の一つです。俳優による生演奏、一つの役を語りと動きの「二人一役」の手法を取り入れている、宮城監督の祝祭劇の原点でもあります。アジアの多様な文化を衣裳やメイク、舞台美術等に取り入れた作品となっています。

静岡では、「ふじのくに⇄せかい演劇祭」やストレンジシードと同時期に開催しました。また、浜松では、浜松いわた信用金庫の協賛企画として、対象地域在住の小中高生50名をご招待しました。開演前には、SPAC文芸部による作品の解説を行い、泉鏡花の『天守物語』を読んだことがない方にも楽しんでもらえるような取り組みを行いました。

成果

静岡会場では、「ふじのくに⇄せかい演劇祭」、ストレンジシードと同時期に開催することにより、招聘した海外の団体とSPACがお互いの作品を鑑賞することができました。招聘団体の中には中国、韓国の団体も含まれ、東アジア文化都市としての文化の交流の場となりました。また、浜松会場では、本作の舞台がお城であるため、浜松城城郭を背景に上演したことで、来場者にも大変喜ばれました。

26年間上演している作品のため、SPACのファンだけでなく、多くの県外ファンも来県しました。また、野外で上演することにより、客席から見える景色も作品とマッチしてよかったとの声が多くありました。

【主催】
ふじのくに野外芸術フェスタ実行委員会
【日程】
2023年5月3日～5月6日、5月27日～5月28日
【会場】
駿府城公園紅葉山庭園前広場特設会場（静岡市）、浜松城公園 中央芝生広場 特設会場（浜松市）
【来場者数】
2,147人（静岡市）、589人（浜松市）

©M.HIRAO

©Y.INOKUMA

富士山世界文化遺産登録10周年記念式典

富士山が世界文化遺産に登録決定してから、10年の節目に当り関係者を招待して記念式典を開催しました。式典では、静岡・山梨両県知事が、「富士山の普遍的価値を守り伝えながら地域の発展を目指す」との富士山世界文化遺産登録10周年共同宣言に署名するとともに、会場では登録10周年を記念して作成した７分間のＰＲ動画を公開しました。

また、富士山の文化的価値について、富士山世界文化遺産学術委員会委員長の青柳正規氏から「世界遺産としての富士山」と題した基調講演がありました。認定NPO法人富士山世界遺産国民会議運営委員長の小田全宏氏によるコーディネートにより、３名の専門家(聖心女子大学現代教養学部国際交流学科教授 岡橋純子氏、上智大学大学院地球環境学研究科教授 織朱實氏、株式会社合力代表取締役 近藤光一氏)を招き、「富士山から発信する持続可能な社会の実現」をテーマにしたパネルディスカッションを行い、これからの富士山についての議論を深めました。

成果

本式典には、国会議員や静岡・山梨両県関係者、一般公募客等合せて約350人が出席し、登録10周年を祝福することができました。

式典では、基調講演やパネルディスカッションを通じて、これからの富士山を見据えての議論が行われ、観客にもわかりやすく伝えることができ、世界文化遺産登録10周年の機運醸成を図ることができました。本式典は、東京で開催されたため、マスコミにも多く取り上げられることで全国からも注目され、東アジア文化都市2023コア事業に相応しい事業となりました。

【主催】
富士山世界文化遺産協議会、静岡県、山梨県
【日程】
2023年6月22日
【会場】
東京国際フォーラム（東京都）
【来場者数】
350人

ふじのくにデジタルアートコンテスト

次世代の文化の担い手となる若者世代が文化芸術に触れる足がかりを作ること、また新しい文化であるデジタルアートを発信することで本県の文化振興の一助とすることを目的として、仮想空間の中で、ものづくりを楽しむことが出来るゲームソフト「Minecraft（マインクラフト)」で作成したアート作品を募集・審査･表彰･展示する「ふじのくにデジタルアートコンテスト」を開催しました。

応募期間４ヶ月間、応募テーマ「静岡県」、小学生以下の部・中学生以上の部の２部門で開催し、マインクラフトの第一人者であるプロマインクラフター「タツナミシュウイチ氏」を審査委員長とし、全国的に類を見ないマインクラフトをアート作品として捉える話題性のあるコンテストとなりました。

成果

応募総数207点という数は、自治体が実施したマインクラフトを用いたコンテストとしては最大規模の応募数となり、県内のみならず全国からも応募がありました。また、商業施設を中心に開催した展覧会では約2,000名もの観覧者が来場し、パソコンを用いて作品の裏側を覗く、デジタルアートならではの世界を楽しみました。

応募されたアート作品は創意工夫に富んでおり、子どもを中心とした若い世代の静岡愛とそれを作品として表現し伝える技術を再確認するきっかけとなりました。

応募者・観覧者を中心に「来年以降も開催して欲しい」という声が非常に多く寄せられ、多様な文化のあり方の1つを示せる事業となりました。

【主催】
静岡県
【日程】
2023年7月1日～12月26日
【会場】
静岡県庁（静岡市）
【来場者数】
207人（応答数）

ふじのくにこども芸術大学

県文化振興基本計画における重点施策「文化芸術に触れる機会の拡充と人材育成の促進」に基づき、第一線で活躍するアーティスト等との交流を通じ、優れた文化芸術に出会い身近に親しむ機会を提供するため、県内の小・中学生を対象とした個人参加の体験・創造講座を実施しました。

三枝成彰学長が中心となって調整し招聘した、各界一流のアーティスト等を講師として、実行委員会が企画した各講座（特別講座）は、公募により受講生を決定し、県内３会場で講座を開催しました。

成果

県内３会場の12講座に対して1,780人の応募があり、抽選により当選した316人が参加しました。各会場での三枝成彰学長と講師による対談形式の基調講演をはじめ、イラストレーターのわたせせいぞう氏や、パティシエの鎧塚俊彦氏、ピアニストの横山幸雄氏、コスチューム・アーティストのひびのこづえ氏など、各分野の第一線で活躍する講師が、ワークショップを通じて文化芸術の楽しさを子どもたちに伝える貴重な機会となりました。

【主催】
ふじのくに子ども芸術大学実行委員会
【日程】
2023年7月29日、8月5日、8月20日
【会場】
沼津プラサヴェルデ（沼津市）、クリエート浜松（浜松市）、グランシップ（静岡市）
【来場者数】
316人

しずかるフェスタ

静岡県は、競技かるた界の最高峰であるタイトル戦「名人位決定戦」で２連覇を果たした川瀬名人を輩出するとともに、昭和54年から毎年開催されている「全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会」においては、本県出場校の優勝回数が日本一の24回を誇るなど、競技かるたの聖地です。この文化の特色を活かし、かるた文化の魅力をアピールするイベントを開催しました。

県内在住の名人川瀬氏や永世名人西郷氏、県高校競技かるた部の指導に長年あたっている竹中氏による、競技かるたのフォーラムや名人の実力パフォーマンス、県立静岡東高等学校の生徒による模範試合の見学、実際に競技かるたを体験する教室を行いました。

また、百人一首以外の様々なかるたの展示や体験コーナー、ちはやふる基金によるグッズ販売などのイベントスペースや、食を楽しめる屋外スペースを設置し、競技かるた初心者でも楽しめるイベント内容としました。

成果

参加者は、開催地である掛川市を中心に県内中西部在住の方々が多く、年代は10代から70代以上まで幅広い層の参加を得ることができました。多くは百人一首経験者であったが、県内に競技かるた名人が在住していることを知る方は少なく、県が競技かるたの聖地であることを広くアピールすることができました。

また、漫画『ちはやふる』の作者末次氏による本イベントの開催告知がオリジナルイラストと共にSNS発信されたことで、県内のみならず県外にも本県と競技かるたの親和性を伝えることができました。

【主催】
静岡県、東アジア文化都市2023静岡県実行委員会
【日程】
2023年9月23日
【会場】
大日本報徳社（掛川市）
【来場者数】
132人

超老芸術展

高齢になってから、または高齢になってもなお、独自の創作を続ける高齢者による芸術表現を「超老芸術」と名づけ紹介しました。これまで取材発掘してきた県内の高齢芸術家だけでなく、全国各地で人知れず創作を続ける高齢の芸術表現を一堂に集めた展覧会を開催しました。さらに、展覧会に足を運ぶことができない人たちのためにメタバース上での展覧会空間も展開しました。

成果

来館者アンケートでは「大変よかった」73%、「よかった」25%という回答があったほか、次回展開催を望む声が28件寄せられました。60代以上の来館者が半数以上を占め、アンケート回答者の半数以上が「何か表現活動をしてみようと思った」と答えるなど、「超老芸術展」が観覧者の表現活動を触発する機会となりました。

静岡県内の高齢の出展者が自主的に在廊し作品解説をするなど、出展者自身のQOLの向上にも繋げることができました。

全国各地から独学で表現活動を続ける22組の高齢者の表現活動を紹介したことで、「超老芸術」の言葉の認知度が高まり、「老い」に対する否定的なイメージを払拭する機会となりました。

【主催】
アーツカウンシルしずおか
【日程】
2023年10月3日～10月8日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
1,767人

静岡県伊豆文学祭記念事業『伊豆の踊子』

古今東西の名作を連続上演する「SPAC秋→春のシーズン2023-2024」の1作品目として、SPAC-静岡県舞台芸術センターが川端康成の小説「伊豆の踊子」を舞台化しました。演出に演出家・多田淳之介、映像監修に本広克行を迎え、原作に描かれた風光明媚な伊豆各地の撮り下ろし映像を織り込みました。会場は、静岡市（静岡芸術劇場、グランシップ内）、下田市、伊豆市修善寺で上演しました。

静岡一般公演では「英語・中国語（簡体字）・韓国語のポータブル字幕機の貸出サービス（無料）」を実施しました。

成果

本作は、“観ると行ってみたくなる”「観光演劇」と銘打ち、演劇を用いて伊豆の観光資源に新たな光を当て、その魅力を発信し、幅広い世代から好評を得ています。静岡・下田・修善寺公演において、一般公演（有料）を8回実施し、計1,402名が来場しました。中高生鑑賞事業公演（無料招待）を19回実施し、計38校4,351名が鑑賞しました。アンケートでは鑑賞者の内、約９割が「とても良かった・良かった」と回答し、また、観劇をきっかけに「実際に伊豆地域を訪れたい」という声も多く聞かれました。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター
【日程】
2023年10月2日～12月31日
【会場】
静岡芸術劇場（静岡市）、下田市民文化会館（下田市）、修善寺総合会館（伊豆市）、浜松市浜北文化センター（浜松市）、沼津市民文化センター（沼津市）
【来場者数】
5,753人

伊豆文学祭

伊豆が日本文学の聖地であることを国内外に広く情報発信することを目的に開催しました。

１日目の「伊豆文学フォーラム」では、「伊豆の踊り子」の朗読や、「金色夜叉」の講談、伊豆文学の魅力を発信するゲストによる対談などを実施しました。

２日目は「全国文学サミットin伊豆」では県内外の文学を用いたまちづくりをしている自治体（花巻市、前橋市、小諸市、伊豆市）を招待し、事例紹介や文学によるまちづくりについて議論を行いました。午後に開催した、「ふるさとと文学2023シンポジウム」では、映像作品鑑賞、外国人を含む作家、批評家の対談、朗読劇などを通じて、ふるさとと文学を結びつける内容としました。また、「ブックマルシェ伊豆」では、本の販売をはじめ、飲食料品の提供や、図書館主催の子ども向けワークショップを開催しました。

成果

「伊豆文学フォーラム」では、朗読、講談、対談等の企画を通じ、伊豆文学の魅力を多面的に発信することに成功しました。

「全国文学サミットin伊豆」では、全国の文学を用いたまちづくりに関する知見と特色ある取組が紹介され、文学のまちづくりに努める自治体の連携を謳う共同宣言を発出しました。来場者は、ことばの持つ力、文学の可能性を強く感じる機会となりました。また、ブックマルシェ伊豆では、若い方やこどもたちが多く参加し、にぎわいを創出しました。

２日間で598人もの来場者を集め、文学の聖地としての伊豆を印象づけることができました。

【主催】
静岡県、
伊豆文学フェスティバル実行委員会、
伊豆のふるさとと文学2023実行委員会
【日程】
2023年10月14日～10月15日
【会場】
アクシスかつらぎ（伊豆の国市）
【来場者数】
598人

第9回静岡国際オペラコンクール

令和５年１月から５月に募集を行い、271名（33の国と地域）から申し込みがありました。提出されたオペラアリア２曲の音源による予備審査等を経て、11か国の60名が、コンクール参加対象となりました。10月28日から30日まで行われた第１次予選には、51名が参加し、それぞれピアノ伴奏で２曲のオペラアリアを披露した結果、４か国16名が第２次予選に進みました。第２次予選は、11月１日・２日に行われ、出場者が予め選んだ役が含まれるオペラ全曲の中から、審査委員会が指定した約20分の場面をピアノ伴奏で演奏しました。その結果、２か国６名が本選に進みました。11月５日に行われた本選では、髙橋直史氏の指揮、東京交響楽団の演奏と共に、オペラアリア２曲を披露しました。審査の結果、１位から３位まで韓国勢が独占することとなった一方、山下裕賀さん（三浦環特別賞・メゾソプラノ）と伊藤尚人さん（静岡県出身・バリトン）の日本人２名が本選に進み、健闘しました。

成果

コロナ禍明けのコンクールということで、年齢制限の配慮を行ったこともありますが、応募者の増加は喜ばしく、何より静岡県出身歌手が本選に出場できたことは快挙です。前回より、来場者数は微減しましたが、学校単位の鑑賞数が減少したのが原因で、一般の来場者は、前回より増加しました。それ以外、You Tubeによるライブ配信を行い、６日間で１万人以上がコンクールを鑑賞しました。演奏映像はアーカイブ配信を行っているため、現在でも視聴でき、７万人以上（１月23日現在）が視聴しています。静岡文化芸術大学の学生も参加したボランティアの支えにより、本コンクールは成り立っています。なお、東アジア文化都市の１つである中国の成都市からも２名が出場し、うち１名が第２次予選に進みました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、
静岡文化芸術大学、
静岡国際オペラコンクール実行委員会
【日程】
2023年10月28日～11月5日
【会場】
アクトシティ浜松（浜松市）
【来場者数】
3,418人

ふじのくに民俗芸能フェスティバル

フェスティバルでは、県内東部・伊豆の各地で伝承されている、民俗芸能保護団体５団体が出演し、下記の各演目が上演されました。

三島囃子保存会（三島市）による「三島囃子」では、三島囃子の映像を背景として、「しゃぎり」と「お囃子」が演じられました。戸田の漁師踊・漁師唄保存会（沼津市）による「戸田の漁師踊・漁師唄」では、「伊勢音頭」や「鯨突き」などが演じられました。小稲来宮会（南伊豆町）が伝承する「小稲の虎舞」は、舞台上に「虎山」と呼ばれる演台を設置し、虎の衣をまとった演者による虎舞が演じられました。沼田神楽保存会（御殿場市）による「沼田の湯立神楽」では、湯立の釜の周りで獅子が舞う「釜めぐり」が演じられました。大坂湯立神楽保存会（御殿場市）による「大坂の湯立神楽」では、獅子が剣を持って舞う「剣の舞」が披露され、終盤には幣束（へいそく）と呼ばれる縁起物を観客に配り、多いに盛り上がりました。

各演目については、観客の理解を深めるため、芸能解説者による各民俗芸能や演目の詳細な解説を行うとともに、ロビーにて関連資料の展示を行いました。

成果

当日は319名の来場者があり、通常は現地に行かなければ鑑賞できない演目を見ることができ、また演目の解説やロビーでの展示を実施したことによって、民俗芸能の魅力を感じるとともに、理解が深まったとの来場者の感想を得ることができました。

社会情勢の変化等により、保存継承が困難な民俗芸能保護団体が多くなる中、県民の民俗芸能への理解、関心を深めることで、その支援の裾野を広げる観点から意義ある催しとなりました。

【主催】
ふじのくに無形民俗文化財活性化実行委員会
【日程】
2023年11月19日
【会場】
三島市民文化会館ゆうゆうホール（三島市）
【来場者数】
319人

三霊山学術フォーラム

富山県、石川県、静岡県は、日本三霊山（立山、白山、富士山）を背景に、スポーツや文化芸術、観光等での連携事業に取り組む方針で、令和５年１月に「三霊山連携協定」を締結しました。

本フォーラムは、三県の文化学術分野における連携のキックオフとして開催しました。中国・清華大学の劉 暁峰 教授をはじめ、立命館大学の本郷 真紹 特命教授、慶應義塾大学の鈴木 正崇 名誉教授をお招きし、日本と中国の古代の山岳信仰をテーマに、特別講演やパネルディスカッションを実施しました。また、静岡大学名誉教授である平形 精逸 氏揮毫の書作品「日本三霊山」の贈呈式も行われ、書に込めた思いを語りました。

フォーラム当日は、三霊山パネル写真展や、富山県、石川県、静岡県、富士山絵伝のブースが出展し、各県のブースでは物販やPR活動が行われました。富士山絵伝のブースでは、アニメーション映像を放映し、多くの方が鑑賞しました。

成果

フォーラムには123人が出席しました。県外からの参加者もおり、山岳信仰に関心のある多くの方が参加しました。

本フォーラムの開催は、富士山が世界文化遺産に登録されて10年の節目である年に、信仰の対象としての富士山について見つめ直すきっかけとなり、また、中国と日本の山岳信仰の相違点を考えることによって、それぞれの文化圏の特徴を改めて実感することができ、東アジア文化都市2023に相応しい事業となりました。

【主催】
静岡県
【日程】
2023年11月23日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
123人

東アジア文化都市2023静岡県記念事業「書道フェスティバル」

「書道フェスティバル」は、日中韓共通である書道文化を、多くの人に触れてもらうことで、その新たな魅力を発信するとともに、書道文化を次世代へ継承することを目的に開催しました。

静岡出身のクリエイティブ書家、岩科蓮花氏の迫力あるオープニングパフォーマンスからはじまり、静岡東高等学校、静岡城北高等学校、駿河総合高等学校、静岡学園中学校・高等学校の書道部による迫力ある書道パフォーマンスのほか、ＳＮＳで若者から絶大な人気を集める、音楽アーティスト「もにゅそで」と岩科蓮花氏のコラボパフォーマンスを披露しました。また、実際に観客が参加して岩科蓮花氏からアドバイスを受け、書道を披露する参加型書道教室も行いました。

中ホールのロビーでは、日中韓の書道文化の歴史についての展示のほか、日中韓共通漢字の808字、またそれに関連し、過年の「今年の漢字」の展示を行いました。

成果

書道文化について、普段馴染みがない人に触れてもらう機会となるよう、若者に人気のある音楽アーティスト「もにゅそで」と書家のコラボパフォーマンスを披露しました。その結果、若い世代の入場者も多く見られたほか、アーティストを目当てに来場した方もおり、普段は書道に親しみのない人へのアプローチができました。

また、高校生の迫力ある書道パフォーマンスに感動したという声も多く、書道文化の次世代を担う高校生の活躍を広めることができました。

【主催】
静岡県
【日程】
2023年12月20日
【会場】
静岡市民文化会館（静岡市）
【来場者数】
230人

企画展「角の魅惑-日本のシカ化石とニホンジカ-」

日本最古級のシカや氷河期のヤベオオツノジカなどを展示し、シカの仲間の進化と日本の絶滅ジカの多様性を紹介しました。また、1800万年前の地層から見つかったシカ科の全身骨格化石、シカ科の起源を解き明かす最古級の種を、実物化石と復元骨格標本による紹介や、かつて静岡県に生息していたヤベオオツノジカやカズサジカなどの絶滅シカ類を化石をもって紹介しました。

成果

日本最古のシカの展示や大型のヤベオオツノジカの展示が多くの来館者の注目を集め、１万人に迫る来館者数を記録しました。また、シカ問題などを題材とした講演会を開催することにより、より多くの来館者にシカ対策の現状等を啓発することができました。

【主催】
ふじのくに地球環境史ミュージアム
【日程】
2022年12月3日～５月7日
【会場】
ふじのくに地球環境史ミュージアム（静岡市）
【来場者数】
9,010人

おもしろい人に会いたい!!2023 -しずおかアートプロジェクト見本市-

「文化芸術による地域振興プログラム」の2022年度実施団体による１年間の活動報告を主軸に据えた大規模イベント「おもしろい人に会いたい!!2023」を開催しました。アーツカウンシルしずおかの取組を様々な切り口で紹介し、思いもよらない発想や洞察力で、関わる人々の創造性を引き出すアーティストや、アートプロジェクトへの期待感を醸成することを目指しました。

成果

ステージ上での大ダコとゴジラの邂逅に始まり、ライブ出演者との対面に感激する往年のファン、アート関係者と貴重な資料を囲み話がはずむ実施団体、息を合わせて変幻自在の≪蛸みこし≫をかつぐ初対面同士の人々、ワークショップエリアでカラフルな素材に目を輝かせる子どもたち。地域の未来を見つめ、その可能性をひらくために様々な出会いを生み出すべく工夫を重ねて動く人たちを、これからも支援していくアーツカウンシルの想いが具現化された賑やかな１日となりました。

【主催】
アーツカウンシルしずおか
【日程】
2023年3月12日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
900人

第26回伊豆文学フェスティバル

第26回伊豆文学賞表彰式及び伊豆地域５市町による申請のあった「文学の聖地伊豆と温泉」のしずおか遺産認定式を開催しました。

例年審査員による講演会を行っている伊豆文学塾では、特別ゲストの直木賞受賞作家今村翔吾氏と伊豆文学賞審査員太田治子氏による特別対談、講演会を実施しました。午前中には井上靖にまつわる施設を巡る伊豆文学バスツアーを開催しました。

成果

直木賞作家今村翔吾氏からは、「自分の小説家人生の始まりが伊豆文学賞であった。どんなことでも協力したい」との心強い言葉があり、講演会の参加者からも熱気が伝わってきました。バスツアー参加者からは、「井上靖をテーマにしてゆかりの地を巡ることができて良かった」など好評の声が多数寄せられました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
伊豆文学フェスティバル実行委員会
【日程】
2023年3月12日
【会場】
修善寺生きいきプラザ（伊豆市）
【来場者数】
179人

第24回すぱっくこども大会

生き生きとした個性を持った子どもたちをはぐくみ、応援することを目的として、2001年から事業を継続し、これまでに、763組1,580名の小学生が参加し、歌やダンス、演奏、落語など得意の身体表現を披露してきました。普段は世界レベルのプロフェッショナルな作品を上演する「静岡芸術劇場」で、県内の子供達に個性と才能を存分に発揮できることを期待しています。また、劇団員が参加者の発表をサポートすることで、子供達と劇団が気軽に触れ合える場となっています。

成果

41組71名に及ぶ県内の小学生がダンス、楽器演奏、歌唱、大道芸、落語、演劇など幅広いジャンルの演技を披露しました。また、我が子の発表を見るという目的で初めて劇場に来る方にとって、本格的な舞台、音響・照明効果の中で生の舞台へ触れる貴重な機会となりました。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター
【日程】
2023年3月18日～3月19日
【会場】
静岡芸術劇場（静岡市）
【来場者数】
396人

SPAC演劇アカデミー2期生成果発表会・修了式

SPAC演劇アカデミーは、〈世界で活躍できる演劇人〉を目指す若者の感性を育む1年制の演劇塾です。2期生である15名の高校生たちは、週3回、SPACの俳優・スタッフによる指導のもと、演劇の実技・英語・教養・小論文に取り組みながら、互いに切磋琢磨しました。その活動の成果発表として三島由紀夫の戯曲『葵上』の上演と、修了式を一般公開しました。

成果

成果発表会では、実技で行ってきたトレーニングと、寺内亜矢子演出による『葵上』を披露することができました。また、修了式では、アカデミー生ひとりひとりが１年間を振り返り、学校とは違った形の仲間や、講師との交流の成果を言葉にし、来場した観客に想いを伝えることができました。

【主催】
静岡県
【日程】
2023年3月26日
【会場】
静岡芸術劇場（静岡市）
【来場者数】
242人

デモクラティックスクール び～だとつくる人々

陶芸、アート、料理などを「つくる」人との出会いを作ることで、フリースクールに通う子どもたちに様々な成長の種を蒔きます。また、スクールでフェスタを行い地域住民との相互理解を促します。

成果

1年に1回の開催の学園祭「び～だフェスタ」では、様々なイベントを行った成果として地域の住民、学校教員、保護者とその知人、卒業生や見学者など様々な人が参加しました。「つくる人」のレジデンス事業では、陶芸や壁を削る現代アートに子ども達が自然と触れて関わっている姿を見ることができました。事業を通じて、文化の創造を感じられる場所となってきたことが感じられました。

【主催】
つくるぞうのへや
【日程】
2023年4月1日～12月31日
【会場】
デモクラティックスクールび～だ
（浜松市）
【来場者数】
100人

新収蔵品展

県立美術館では、17世紀以降の東西の風景画や富士山を描いた作品、20世紀以降の美術動向を示す作品、静岡県ゆかりの作品、ロダンと近代の彫刻など、幅広くコレクションしています。昨年度は、当館の収蔵方針に従い、３名から76点の寄贈を受けました。そのうち、日本画２点、日本近代の版画３点と水彩１点とともに、太田正樹氏からご寄贈いただいた70件の現代美術作品の中から抜粋して紹介しました。

成果

日本画、日本近代の版画、現代美術と幅広い分野の展示であったことや、会期中に寄贈に関する記者発表を行い、主要メディアで紹介されて話題を呼んだことにより、多くの来場者に当館の新たな収蔵品を楽しんでいただくことができました。

【主催】
静岡県立美術館
【日程】
2023年4月11日～5月21日
【会場】
静岡県立美術館（静岡市）
【来場者数】
1,619人

センス・オブ・ワンダー

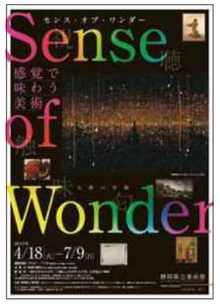
大部分の展覧会は視覚による鑑賞を基本としますが、本展は、作品の素材、モティーフや主題を、視覚以外の感覚器官（蝕、聴、嗅、味）や空間感覚、また記憶や想像力を働かせて鑑賞できるように展示しました。

成果

展示の方法を工夫し、来館者が当館の収蔵品を五感を駆使して楽しみながら作品を鑑賞でき、多様性に富むコレクションを楽しんでいただけました。

クロード＝ジョゼフ・ヴェルネ《嵐の海》1740年頃
キャンヴァス、油彩　89.0×167.0cm（静岡県立美術館所蔵）

【主催】
静岡県立美術館
【日程】
2023年4月18日～7月9日
【会場】
静岡県立美術館（静岡市）
【来場者数】
16,611人



企画展「富士山世界遺産登録10周年記念美と祈りの霊峰（やま）富士山」

富士山が世界遺産に登録されてから10周年、当センターの開館から６年目に入り、研究や展示と一体である富士山に関わる諸分野の資料収集も、当センターにおいて着実に歩みを進めてきました。これらの当センターの収蔵品の中から、２期にわたる収蔵品展を企画展示しました。前期は「描かれた富士山」をテーマに朝廷に仕えた土佐派と徳川将軍の御用をつとめた狩野派の絵師による富士山絵画の共演、後期では、「祈り（信仰）」をテーマに信仰の対象としての富士山を紐解く資料、富士山信仰に関わる内容をセレクトし、紹介しました。

成果

美（藝術）と祈り（信仰）をテーマに、２期にわたる収蔵品展を開催することにより、世界遺産として登録された富士山の一側面を来館者に見せて伝える事ができ、古来から人々を魅了しつづけてきた霊峰の普遍的価値を再認識してもらうことができました。

【主催】
静岡県富士山世界遺産センター
【日程】
2023年4月29日～7月3日
【会場】
静岡県富士山世界遺産センター（富士宮市）
【来場者数】
25,545人

グランシップ東アジア文化交流フェア EAST ASIA meets SHIZUOKA

「東アジア文化都市2023静岡県」の実施に伴い、ゴールデンウィークに家族で楽しめるイベントを開催しました。ステージイベント、東アジアグルメコーナー、中国・韓国の文化体験ができるワークショップの開催など、子供から大人まで、気軽に文化交流を楽みました。

成果

5月2日に静岡県が主催した公式式典「春の式典」を引き継ぐ形で「東アジア文化都市2023静岡県」の機運を盛り上げるための一翼を担うことができました。

【主催】
（公財）静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年5月3日～5月4日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
19,931人

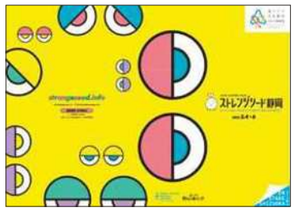
ストリートシアターフェス　ストレンジシード静岡

駿府城公園、静岡市役所前、静岡市街地を舞台に展開するストリートシアターフェスティバルです。同時開催のふじのくに⇄せかい演劇祭と連動し、コアプログラム2作品、オフィシャルプログラム5作品、オープンコールプログラム5作品の計14プログラムを実施しました。「コアプログラム」は、フェスティバルディレクターのウォーリー木下が脚本演出を行う新作『χορός／コロス』と、3 年ぶりとなる海外（韓国）からの招聘作品『Woman with Flower』を上演しました。

成果

「ストリートシアターって何だ？」をテーマに設定しました。出演団体にもストリートシアターならではの作品作りを意識した創作を動機づけることで、演劇、ダンス、美術のジャンルを横断するストリートシアターパフォーマンスが誕生し、多くの観客を魅了しました。

【主催】
ふじのくに野外芸術フェスタ実行委員会
【日程】
2023年5月4日～ 5月6日
【会場】
駿府城公園内各所、静岡市役所・葵区役所前、人宿町、毎日江崎ビルなど（静岡市）
【来場者数】
23,865人



考古学技術体験

考古学技術体験は、一般の方を対象に出土文化財の保存処理に関する専門的な技術を通年で学び体験していただくことで埋蔵文化財をより深く理解し、より身近に感じてもらうことを目的に実施しています。参加者は保存処理前の触れただけで壊れてしまいそうな木製品や金属製品を、保管・活用・展示ができる状態にするまでの工程を実際の作業を通して学びます。このような出土文化財の保存処理体験を実施しているのは、全国で当センターだけです。

成果

体験作業ができるスペースは定員10人ですが、希望者多数のため、５月17日開催の第１回は、講義のみ希望者全員の聴講可能としました。26人の参加者があり、埋蔵文化財を保存処理し、未来に継承していくことの重要性について理解を深めました。

【主催】
静岡県埋蔵文化財センター
【日程】
2023年5月17日
【会場】
静岡県埋蔵文化財センター（静岡市）
【来場者数】
26人

グランシップトレインフェスタ

鉄道模型コーナーや鉄道写真展など、家族で楽しめる鉄道イベントです。鉄道グッズや県内の名物駅弁の販売の他、県内の鉄道会社のブースもあり、鉄道の魅力に触れられる二日間となりました。

成果

「東アジア文化都市2023静岡県」をテーマにした鉄道トークの他、鉄道模型展示やキッズフロア等を実施し、多くの家族連れに楽しんでもらうことができました。

【主催】
（公財）静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年5月20日～ 5月21日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
22,005人

GAKKO PROJECT
～自然と文化の伊豆半島学びなおしの旅～

美しい海と山に恵まれた伊豆半島は、古くから豊かな歴史文化を持つ地域であり、世界ジオパークに認定された国際的地質遺産を持ちながら、現状では少子高齢化、限界集落化の著しい地域となっています。これから、この地域でどうやって生きていくべきかを問われる時代に入った今、これからの「地域」のあり方を問い直し、民の力を育てる場、お互いに育ち合う場を作ることが必要なのではないかと考え、GAKKO PROJECTを立ち上げ、全7回の講座を開催しました。

成果

各回とも、地元を中心に少人数の参加者で、講師と対話ができる距離を大事にして講座を準備しました。体験の講座では現地に赴き、伊豆という土地のダイナミックや、豊かな自然を体感することができ、参加者から「本当に楽しかった！実際に訪れることの大事さを知った」という声を多数いただきました。伊豆在住者、あるいは伊豆をテーマに活動している講師の方々の視点を通じて伊豆半島を見つめ直すことができたことは大きな成果となりました。

【主催】
GAKKO PROJECT
【日程】
2023年5月20日～ 12月31日
【会場】
南伊豆町、伊豆市、東伊豆町、熱海市、伊東市
【来場者数】
97人

太田正樹コレクション展

旧清水市（現静岡市）出身の太田正樹氏（1993年～2022年）から、個人の資産を県民に提供したいとの考えにもとづき、平成20年度から令和４年度までの15年間に、優れた現代美術作品106件の寄贈がありました。地域の美術館を支える故人の遺志を顕彰して、寄贈作品の中から選りすぐりの作品を展示しました。

成果

開催直前に寄贈に関する記者発表を行ったことから、主要メディアにニュースとして取り上げられ話題を呼ぶとともに、人気のある現代作家の作品が紹介されていたことから、多くの方々が来館し、作品を楽しむことができました。

【主催】
静岡県立美術館
【日程】
2023年5月23日～7月9日
【会場】
静岡県立美術館（静岡市）
【来場者数】
537人

あるもんで演劇 演劇×オルタナティブ教育×オクシズ

静岡市初のオルタナティブスクール「静岡あたらしい学校」の子どもたちが主体となって、オクシズ地域の人的・物的資源“あるもん”を活用しながら演劇づくりを行い、子どもたち・地域の人たちを繋いでいくプロジェクトです。演劇づくりに関わる誰もが活躍する経験を得ることを目的としています。

成果

演者もお客さんも葵区牛妻の水神社前に集合し、そこから会場である校舎まで楽器を鳴らしながらのパレードを行いました。公演では地域の方がお助け隊として参加、制作した「自分の人形」を動かしながら、自分の好きなものや人形の紹介を行いました。最後にライブペインティングを行い、庭に設置された大きなキャンバスに好きなものを自由に描きました。地域の方や、静岡市内外から家族で参加した方もおり、牛妻地域を知っていただくきっかけになりました。

【主催】
特定非営利活動法人
静岡あたらしい学校
【日程】
2023年5月24日～10月31日
【会場】
静岡あたらしい学校、安倍ごころ（静岡市）
【来場者数】
45人

つくって発見☆こどもアートdeサステナブル！

～ハイザイ・ハザイのクリエイティブ・リデュースでこどもを育むプロジェクト～
【こどもアート養成講座 2023 幼児編】

廃材・端材のアートワークショップを通じて、園や学校、企業等と連携し、子ども主体のまちづくりや「こどもアート（ありのままの自分を表現すること）」の普及をめざすプロジェクトを開催しました。

5月～6月は教育関係者を対象に、子どもや高齢者、障害者とのアートを通じた関わり方の基礎を学ぶ全3回の養成講座を開催しました。8月～11月は、地域の店舗や企業から集めた廃材・端材を素材とした子ども向けの造形ワークショップを大型商業施設やコミニティスペースで全4回開催しました。また、期間中は、園・小中学校と連携し、地域性や環境を活かした廃材・端材による全3回の出前講座を開催しました。

成果

期間中は302人の参加者及び、企業や商店、行政、園や学校との連携により多様な関わりが育まれました。企業等から収集した廃材・端材をアート素材として扱い、環境について学ぶと同時に、アートを通じてこどもの心を捉え返すことを目的に取り組みました。結果、こどものみならず大人も作品づくりに熱中する姿に、「こどもとアート」が人間という心性の根っこにあることを感じる事業となりました。

【主催】
Lab Qrio
【日程】
2023年5月28日、6月11日、7月9日、7月29日、9月10日、10月28日、11月1日
【会場】
三島市民生涯学習センター（三島市）、サントムーン柿田川（清水町）ほか
【来場者数】
302人

ふじのくに芸術祭2023・演劇コンクール

演劇コンクールは、県内アマチュア演劇団体等の参加を求め、コンクールを行うことにより、県内の演劇活動の活性化を図り、その水準の向上に努めることを目的に開催をしました。本年はコンクール参加５団体、協賛参加３団体、計８団体の参加がありました。浜松市から富士市まで、広くアマチュア演劇団体が参加し、浜松市の「劇団からっかぜ」が芸術祭賞を受賞しました。また、審査委員は県演劇協会会員のほか、県民から公募し、選ばれた審査員が審査に当たりました。

成果

今年は、例年に比べ単独での劇団の公演よりも、合同公演や、プロデュース公演が多くみられ、地域で協力をし、子供から大人までが参加する公演がありました。そうした団体が本コンクールに参加をし、審査をすることで、地域の文化活動に対する一助にもなりました。また、審査員の一部を県民から公募により行ったことで、様々な視点から審査ができました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、静岡県文化協会
【日程】
2023年6月1日～12月3日
【会場】
県内各所
【来場者数】
2,804人

熱海の街と人を繋ぐ、地域コーディネーター育成プロジェクト

地域コーディネーターが熱海市民や商店街に取材をし、アート視点で見た「熱海の魅力MAP」を作成、発表しました。発表では、熱海の魅力の再確認やアプローチを行いました。

成果

地域コーディネーターが取材を行う中で、「若い子が頑張っているなら応援したい！」という声が多く聞こえました。そんな熱海の住民の方たちのサポートのおかげで、取材件数も目標値を大きく超えることが出来ました。この事業が、熱海の住民の方たちとの良い関係づくりの契機となったと実感しています。

撮影：鈴木竜一朗

【主催】
PROJECT ATAMI実行委員会
【日程】
2023年6月1日～11月30日
【会場】
熱海市内の商店街等
【来場者数】
62人

SPAC学校訪問プロジェクト「ひらけ！パフォーミングアーツのとびら」

SPAC-静岡県舞台芸術センターは、「静岡県子どもが文化と出会う機会創出事業」の一環として、SPAC学校訪問プロジェクト「ひらけ！パフォーミングアーツのとびら」を2019年度から実施しています。本事業は、SPACの俳優・スタッフが各学校や放課後児童クラブなどを訪れ、演劇やダンスといったパフォーミングアーツ（舞台芸術）に触れていただく機会を提供しています。

成果

令和５年度は36校（施設）より応募があり、そのうち17校を訪問しました。プログラムは、鑑賞型プログラム「味わおう！出前劇場」をはじめ、参加型プログラム「学ぼう！えんげき教室」「育てよう！ダンスの種」のうち、学校が抱える課題などにあわせて実施しました。実施後の教員や生徒からの反応はいずれも高評価で、継続的な実施を希望する学校が増えるなど、非常に満足度の高い内容でした。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター
【日程】
2023年6月1日～12月31日
【会場】
静岡県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校、放課後児童クラブ、放課後こども教室など
【来場者数】
1,512人

すぱっくおやこ小学校

すぱっくおやこ小学校は、親も子も同じ「小学生」になって授業を受け、手を動かしたり話し合ったり、共同作業や対話中心の授業を行い、親子で一緒に学び、お互いに発見するための学校です。静岡開催では、地域の駄菓子屋さんを講師に招き、実際に駄菓子屋を開いて利益を得る方法を学ぶ「算数」の授業などを実施しました。また、浜松会場では、科学館のエデュケーターとSPACの音楽家による「音楽」の授業を展開、沼津会場では、地域の建築家を講師に招いた「図工＋社会」の授業を開催しました。

成果

本事業はSPACの人気事業となっています。特に、浜松の音楽の授業では、親子でオリジナル楽器を作るスペシャルな授業が展開され、沼津の図工+社会の授業では、想像を膨らませる演劇の力を活かして、住みたい家をおやこで議論し、各々の個性を活かした模型を作るなど、やこそれぞれがお互いの新たな一面を知り、関係性をさらに深く構築することができました。

©牧田奈津美

【主催】
静岡県
【日程】
2023年6月3日～7月23日
【会場】
静岡芸術劇場（静岡市）、浜松科学館みらいーら（浜松市）、沼津市民文化センター（沼津市）
【来場者数】
208人

murono尋常生学校

社会的課題を抱えた地域住民がゆっくり時間をかけて、作家や専門家と関われる"学校"的な空間をつくり、また中長期的な関係性を探ることにより、行政と専門家と地域住民による新しい文化イベントの座組とします。

成果

日頃直接は関係性のない集落を対象に地区全体に回覧板広報を行い、本事業から住民とのセッションを試み、少子高齢化、後継者不足と漠然とある集落特有の不安要素を共有して、今の生活に持ち出し住民主体のプロジェクトとなるように努めた結果、参加者からの多くの声を聞くことができ、あたらしい寄り合いの必要性をより強く感じることができました。

【主催】
室野地農工商組合　mA-FaB
【日程】
2023年6月10日～12月31日
【会場】
室野地区集落（富士市）
【来場者数】
55人

ふじのくに芸術祭2023・高校生短歌・俳句・川柳コンクール

高校生短歌・俳句・川柳コンクールは、静岡県の将来の文化を担う若い世代が芸術の喜びを知り、自ら創作活動を行うきっかけとしてもらうことを目的に開催しました。今年度の高校生コンクールは、6,884作品の応募があり、その中から短歌、俳句、川柳それぞれ入賞・入選50作品、計150作品を決定しました。入賞、入選作は、県民から公募した優秀な文芸作品を収録する「県民文芸」作品集に掲載をするほか、受賞者に賞状等を贈呈しました。

成果

昨年度（2022年度）よりも応募校数が増加し、より様々な作品が集まりました。若者が文学に触れる機会を創造するとともに、特に優秀な作品は表彰することで、若者の文学への創作意欲を高められたコンクールとなりました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年6月15日～9月13日
【会場】
県内各所
【来場者数】
6,884人（応募数）

ふじのくに芸術祭2023・文芸コンクール

文芸コンクールは、広く県民から文芸作品（小説、児童文学、評論、随筆・エッセイ、戯曲・シナリオ、詩、短歌、俳句、川柳）を公募し、審査後、入賞・入選作品を「県民文芸」作品集に掲載するものです。今年は510点の応募があり、その中から入賞・入選作品94点を決定、「県民文芸」作品集に掲載しました。

成果

応募数は前年から５作品減少したものの、今年は、９年ぶりに20代の芸術祭賞受賞者が誕生しました。（詩部門）県民が創作をした作品を審査し、優秀なものについては表彰をし、作品集に掲載をすることで、県民の創作意欲を高める一助となりました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年6月15日～9月1日
【会場】
県内各所
【来場者数】
310人（応募数）

心のままアートプロジェクト

障害を抱える人が地元の高校生のサポートを受けながら自己表現する「アートワークショップ」と、制作した作品の「展覧会」を実施しました。展覧会では“企業賞”を設け、企業に選んだ作品を貸し出すことで企業との繋がりを深めました。アートワークショップや展覧会への参加が難しい重い障害を抱える人を含む障害との関わりを持つ人たちが、日頃悩んでいる内容や支援方法のアイデアなどについて情報交換・共有する「相談室」を実施しました。

成果

アートワークショップへの多くの高校生の参加や展覧会の来場者アンケートの結果から、事業実施による障害理解の深まりを感じています。相談室は、障害を抱える子どもの発達の悩みを共有し合える貴重な場となりました。

【主催】
特定非営利活動法人こころのまま
【日程】
2023年6月17日、7月22日、
8月4日、11月23日、11月26日、
12月2日
【会場】
サンウェルぬまづ、cafe/day
（沼津市）
【来場者数】
1,311人

アートプロジェクトのつくり方「きかくの場」

アートプロジェクトの企画立案を通して、地域を見つめる細やかな視点を身につけ、静岡県内でアートプロジェクトの担い手として活躍してもらうことを目的に全3回で開催しました。インディペンデント・キュレーターでありながら、長年現代アートを巡る教育プログラムに携わってきた小澤慶介氏を講師に迎え、受講生同士や静岡県内で創造的な実践を展開している話題提供者との対話を重ねながら、自分だけの企画を練り上げます。

成果

県内外からアートプロジェクトの実施に興味のある方20名が参加しました。アーティストだけでなく、行政や福祉施設職員といった幅広い分野の方々が受講しました。普段は出会わない分野の方々が本講座におけるグループワークを通して、新たなネットワークを形成しており、今後の活動に役立つ内容だったという意見がありました。複数の受講者からアーツカウンシルしずおかの「令和６年度文化芸術による地域振興プログラム」への応募がありました。

【主催】
アーツカウンシルしずおか
【日程】
2023年6月25日、9月9日、
12月10日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
60人

アートや文化のある日常への“きてん”をつくるプロジェクト

沼津アートMAPの制作や、市内の作家のアトリエ訪問および交流などを通して、日常において文化芸術に向き合う機会を創出します。市民ひとりひとりのアートに対する能動性を育みながら、新たなコミュニティの形成を目指すプロジェクトです。

成果

実際にアトリエを訪問し、作品や制作風景の鑑賞や、作家との会話を深めることで人と人としてのつながりをつくることができました。企画後も参加者が継続して関心を持ち続け作家の展示等に足を向けるなどアートへの積極性を生み出すことにつながりました。

【主催】
きてんきち
【日程】
2023年7月1日～12月31日
【会場】
沼津市内の作家のアトリエ
【来場者数】
13人

企画展「牧野富太郎がみつめた植物ー植物標本が語るものー」

日本を代表する植物学者であり、「日本植物学の父」と称される牧野富太郎博士は、多くの新種植物を発見、記載し、日本の植物相解明に大きく貢献しました。本展示では、牧野博士が採集した20点以上にのぼる植物標本を公開するとともに、牧野博士直筆の手紙・原稿などを展示し、その生涯と業績をたどりました。また、その功績や秘話についての講演会を開催し、氏の人物像に迫りました。

成果

期間中の来館者数は、ＮＨＫの牧野博士の人生を題材にしたドラマとの相乗効果により、予想を大幅に超える１万４千人あまりの来館者を記録しました。また、企画展が好評であったことから、展示期間を当初の９月３日から10月22日まで延長しました。

【主催】
ふじのくに地球環境史ミュージアム
【日程】
2023年7月1日～10月22日
【会場】
ふじのくに地球環境史ミュージアム
（静岡市）
【来場者数】
14,668人

富士山世界遺産登録10周年記念国際シンポジウム「世界の聖なる山と富士山」

富士山がユネスコ世界文化遺産として登録されてから10年目の記念に合わせて、「世界の聖なる山と富士山」というテーマで国際シンポジウムを開催しました。イタリア、ニュージーランド及び中国の「聖なる山」の研究者・保全関係者が参加し、富士山を含むこれらの聖なる山の歴史、特色、保全管理について各国関係者が講演を行うともに、今後の富士山の保全や後世への継承について、国際的な見地から議論を深めました。

成果

世界文化遺産としての富士山のもつ意義を再認識するとともに、世界の聖なる山についての知見を広めることができました。また、各国の世界遺産や聖なる山の関係者と意見交換をし、交流をすることにより、今後のグローバルな視点をもって保全管理にあたる契機とすることができ、東アジア文化都市2023静岡県を象徴する事業となりました。

【主催】
静岡県富士山世界遺産センター
【日程】
2023年7月1日～7月3日
【会場】
富士市文化会館ロゼシアター
（富士市）
【来場者数】
374人

南熱海における身体表現文化の拠点設立に向けた事業

熱海の南側「多賀・網代地域」にある小山臨海公園を中心とし、南熱海における身体表現文化の拠点と環境づくりを目的にした取組です。今年度は地域のリサーチ、小山臨海公園体育館でのワークショップや近隣の学校へのアウトリーチ、住民とのトークディスカッションを実施しました。

成果

近隣の学校へのアウトリーチでは、中学校。小学校、保育園、幼稚園を含めて合計7つの施設で実施し、100名の子どもたちに身体表現に触れてもらいました。また、報告会ではこれまでに参加した約10名の地域住民と、アーティスト5名によって今後の意見交換が行われました。

【主催】
特定非営利活動法人atamista
【日程】
2023年7月7日～12月31日
【会場】
小山臨海公園、熱海市内小学校等
【来場者数】
112人

地域コミュニティ活性化に向けた伝統芸能活用プロジェクト【しゃぎりツアー】

4月～8月にかけて三島の夜の風物詩となっている地域伝統芸能「しゃぎり」の練習風景の見学を行いました。三嶋大祭りにおいて、市内を曳き回す当番町の山車を一緒に曳き回す体験を行いました。

成果

移住者、移住検討者を含む方々と、三島の伝統芸能である「しゃぎり」を体験することで、身近に感じる時間となりました。地域の文化的な資源と地域住民の関係性を構築することの一助になれました。

【主催】
(株)シタテ シャギリフェスティバル実行委員会
【日程】
2023年7月7日、8月15日～8月17日
【会場】
三島市内
【来場者数】
21人

企画展「知られざる富士山」

富士山は2013年６月22日のユネスコによる世界文化遺産登録から10周年の節目を迎えました。その知られざる魅力について富士山の自然史標本を用いて紹介しました。赤色立体地図と富士山の溶岩樹形・火山弾を展示するとともに、２m×２mの富士山ハザードマップ模型を用いて視覚的にもわかりやすく富士山の噴火に対するリスクを解説しました。また、富士山麓各所で採取した地層剥取り資料を用い、「噴火のデパート」と称された富士山の噴火と崩壊の歴史を紹介しました。

成果

世界文化遺産登録から10周年を迎えた富士山について、その成り立ちや自然を題材にしたイベントを開催し、多くの方々が来館しました。同時に開催した牧野富太郎展との相乗効果により１万３千人を超える来館者数となりました。

【主催】
ふじのくに地球環境史ミュージアム
【日程】
2023年7月15日～10月22日
【会場】
ふじのくに地球環境史ミュージアム(静岡市)
【来場者数】
13,867人

第１回埋文セミナー「考古学ってなに？」

埋文セミナーは一般の方を対象に、県内全域で遺跡を調査している当センターが蓄積した考古学に関する知識や情報、その研究成果や埋蔵文化財関連諸科学を県民にわかりやすく伝え、文化財に誇りと愛着を持つ県民意識の醸成を図ることを目的に実施しています。今年度は、「はじめての考古学」と題して４回に分けて考古学の歴史や考え方、発掘調査からどのようなことがわかるのか等を解説しました。

成果

第１回は「考古学ってなに？」をテーマに、考古学の定義や考古学独特の考え方、考古学の研究方法を説明した後、中世の山茶碗を例に形態分類とその変遷、遺物の新旧から読み取ることができる歴史を解説し、定員を上回る73人の参加者が考古学への関心を高めました。

【主催】
静岡県埋蔵文化財センター
【日程】
2023年7月15日
【会場】
静岡県埋蔵文化財センター(静岡市)
【来場者数】
73人

企画展「地層剥ぎ取り資料が語る富士山の噴火と崩壊」

富士山は「噴火のデパート」と称されるほど、その生い立ちの中で様々なタイプの噴火を起こしてきました。同時に、富士山は急速に成長してきた火山であるため、非常に急峻で不安定な火山となり、その結果、巨大な山体を何度も大きく崩壊させてきました。この企画展では、富士山麓の各所で採取した地層剥ぎ取り資料を展示し、富士山で繰り返されてきた噴火と大規模な山体崩壊の歴史を解説しました。

成果

富士山で過去に発生した噴火と崩壊の歴史を示す貴重な実物資料を展示することにより、来館者に富士山の生い立ちや歴史を学ぶ機会を提供し、今後富士山で発生しうる様々な現象やそのスケールを伝えることができ、東アジア文化都市2023静岡県を象徴する企画展として開催することができました。

【主催】
静岡県富士山世界遺産センター
【日程】
2023年7月22日～9月18日
【会場】
静岡県富士山世界遺産センター(富士宮市)
【来場者数】
28,175人

SPACインクルーシブシアター　てあとるてをとる『ちかくにあるとおく～鏡の国のアリスより～』

舞台芸術にふれる機会が少ない方々も楽しめる演劇作品を創造・上演するプロジェクトである、SPAC インクルーシブシアター「てあとるてをとる」。赤ちゃんからからお年寄りまで、また障がいを持つ方々とそのご家族や介助者に寄り添いながら、あらゆる人と「豊かな観劇体験」を共有することを目的とし、2022年度からスタートしました。2023年は、本プロジェクト１作目として昨年創作した『ちかくにあるとおく～鏡の国のアリスより～』を再演しました。

成果

7月22日～24日の3日間で全6公演を実施しました。うち、2公演はベイビー向け公演、残る4公演はバリアフリー公演として実施し、通常の演劇公演には足を運びにくい客層が多く来場しました。また、今回新たな取り組みとして、視覚障がい者向けの音声ガイドを導入しました。そのほか、チラシ等の広報物ではやさしい日本語を使用し、英語も併記するなど、より多くの方に情報を届ける工夫を行いました。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター
【日程】
2023年7月22日～7月24日
【会場】
静岡芸術劇場（静岡市）
【来場者数】
244人

平間至写真展「写真は愛とタイミング！」

写真家・平間至は、タワーレコードのコーポレートキャンペーン「NO MUSIC, NO LIFE.」をはじめ、数々のアーティスト写真を撮影し、「音楽が聴こえてくるような躍動感のあるポートレート」により、新しいスタイルを打ち出してきました。また、同時に平間写真館TOKYOで撮影されている家族写真では、それぞれの家族の在り方やそのかけがえのない一瞬を捉えた作品により、家族の記憶を紡ぐ場として、“写真”が大きな役割を果たすことを再認識させてくれます。平間至の躍動感ある写真を通して、身近にある大切な人々を思うきっかけになる展覧会となりました。

成果

会場構成・デザインも含め、グランシップでしかできない写真展を開催することができました。県外からの来場者の割合は10％近くを占め、広く関心を集めることができました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年7月25日～8月20日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
2,012人

美術館のなかの書くこと

近年、書くことはデータが主体となり、ますます非物質的、非個性的になっています。本展では、当館のコレクションのはじまりである小杉文庫から様々な手跡の逸品を出陳するとともに、日本近代の書作品や文字が書き入れられた絵画作品、箱書きや画家の書簡といった作品・関連資料を展示。個性あふれる豊かな手書き文字を一つの扉として、作品とそれをとりまく世界を紹介しました。

成果

「手書き文字」という普段とは異なる観点からコレクションを紹介することで、来場者の方から、当館コレクションに様々な角度から興味関心を持ってもらい、楽しんで鑑賞してもらうことができました。

【主催】
静岡県立美術館
【日程】
2023年7月25日～9月18日
【会場】
静岡県立美術館（静岡市）
【来場者数】
2,299人

糸で描く物語

手仕事の温もりと美しさによって、幅広い層に人気を博している刺繍は、伝統的な装飾品から日用雑貨にいたるまで、様々な形で現代の生活に浸透しています。本展は、そうした刺繍をめぐるアートを複数の角度から紹介しました。

成果

東欧の伝統的な衣装やテキスタイル、イヌイットの壁掛け、絵本の挿絵、精緻なオートクチュール刺繍などの多彩な作品を展示し、刺繍愛好家などに大変好評で、新規来場者の開拓につながりました。

【主催】
静岡県立美術館
【日程】
2023年7月25日～9月18日
【会場】
静岡県立美術館（静岡市）
【来場者数】
13,689人

東アジア文化都市2023静岡県記念コンサート オーケストラで楽しむ「映画音楽コンサート」

「東アジア文化都市2023静岡県」の開催にあたり、静岡県の文化力を国内外に示し、音楽文化における機運の醸成を図り、公演機会の少ない地域で公演を実施することで、広く県民にクラシック音楽を直接鑑賞する機会を創出するため、県内３会場において、国内で演奏活動をする中国人２名、韓国人３名をゲストに招き、コンサートを実施しました。公演では、指揮者からお客様に向け「東アジア文化都市2023 静岡県」の説明をするなど祝祭感を演出しました。

成果

映画音楽を中心とした親しみやすい選曲に加え、中国、韓国出身の演奏者をメインにした楽曲を加えるなど、東アジア文化都市にちなんだ特色を出した公演を実施し、クラシックコンサートになじみのない客層も満足することができました。

【主催】
静岡県
【日程】
2023年7月29日、
7月30日、9月30日
【会場】
アクトシティ浜松（浜松市）、富士宮市民文化会館（富士宮市）、伊東市観光会館（伊東市）
【来場者数】
1,216人

見ているようで見えていない“まち”に気づく・見つけるアートプロジェクト

静岡市の蒲原で、どこか遠くなってしまった「まち」と「人」の関係を、「好き」という気持ちを使って、少しだけ近づけてみる実験のような取り組み実施しました。

7月から10月の期間に実施したワークショップや散歩会を経て、使われなくなった町屋での「おしゃべり作品展示会」を11月の週末計6日間開催しました。これまで長い間見向きもされなかった場所に、自然と視線が向き、人が集う状況が生まれ、止まっていた時間が動いたような状況でした。

成果

11月の「おしゃべり作品展示会」は、天候にも恵まれ想定した来場者数50人を大きく超える80人を数えました。展示会の雰囲気は、会場の内外至る所でおしゃべりに花が咲き、長く使われていない建物とは思えないドラマチックなシーンを生み出し、その状況もまた、地域住民が目にすることで関心を寄せる状態につながりました。また、その一部始終を記録していた写真の展示と活動の報告会を開き、一連の活動がもたらした、「まち」と「人」の距離が近づいたシーンを広く共有することができた事業となりました。

【主催】
“まち”と“好き”であそぶ人たち
【日程】
2023年7月29日～12月31日
【会場】
蒲原地区とその通り沿いの使われなくなった町屋（静岡市）
【来場者数】
93人

てあとろんデー！A special day in MMTheatron!

2023年4月に静岡県舞台芸術公園にオープンしたミニミュージアム「てあとろん」の周知を目的に、2ヶ月に1度の頻度で開催するイベントです。朝の読書会や、園内ツアーなど定番メニューに加え、SPAC俳優による朗読会や演劇公演などの特別メニューも用意しました。また、地域のお店のフードやドリンクを楽しむことができるカフェ営業を実施し、1日を通して「てあとろん」を楽しんでもらうイベントです。

成果

7月29日は、初の「てあとろんデー」の開催で、朝の読書会、園内見学ツアーに加え、SPAC俳優による宮沢賢治の『双子の星』の朗読会を行いました。園内見学ツアーには建築に興味のある方、朗読会にはSPACファンや親子連れ、カフェにはウォーキングで訪れた団体など、企画ごと多様な来場者がありました。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁
【日程】
2023年7月29日
【会場】
静岡県舞台芸術公園（静岡市）
【来場者数】
54人

マイクロ・アート・ワーケーション2023

地域住民とアーティスト等が出会うきっかけをつくり、新たなプロジェクトの創出などコミュニティの未来づくりに寄与することをめざし、2021年度にスタートしました。地域のまちづくり団体等が「ホスト」となって、約1週間「旅人」として各地に滞在するアーティストと地域住民との交流をコーディネートします。「旅人」となったアーティストは、地域の魅力をnoteで発信しました。

成果

ホスト及び旅人を公募、マッチングした結果、県内全域から13団体のホストと17都府県から37名の旅人が参加しました。マイクロ・アート・ワーケーション実施後のアンケートからは、「既存の活動にアートの視点を取り入れたい、新たにアートを活用した取り組みを立ち上げてみたい」というホストや、「今後、静岡県で活動をしてみたい」と回答した旅人が多くいました。これまで実施してきた地域からは、ホストと旅人によるイベントが開催されるなど、本事業をきっかけとした新たなアートプロジェクトの動きも出てきています。

【主催】
アーツカウンシルしずおか
【日程】
2023年8月1日～11月12日
【会場】
県内各所
【来場者数】
259人

『Reborn―灰から芽吹くー』

カメルーン出身でフランスを拠点に活躍する演出家・振付家のメルラン・ニヤカム氏と、オーディションで選ばれた静岡県在住の中高生・55歳以上のメンバーにより、芸術表現として世界に通用するメッセージを持った新しい舞台を創作する2010年から開始した事業です。本年度は、2019年から創作を開始し、新型コロナウイルス感染症により活動延期を余儀なくされながらも、日本とフランスをオンライン上で繋げての稽古を積み重ね3年を経て昨年初演された『Reborn』を再演しました。

成果

疫病・地球環境・移民など現代社会が抱える問題を示唆し、再び生きる意味を見出すといった普遍的な力強さが明示され、ポストコロナ時代に前向きなメッセージを与えました。また、出演者の家族・友人にとって気軽な来場のきっかけとなり、SPACの国際事業と地域をつなげる貴重な機会となりました。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター
【日程】
2023年8月5日～8月6日
【会場】
静岡芸術劇場（静岡市）
【来場者数】
332人

書く！SPAC戯曲講座

劇作のコツを楽しく学びながら、自分自身や日々の生活に目を向け、ひとりひとりがオリジナルの物語を紡いでいきます。講座の最終回となる第４回では、受講生が執筆した短編戯曲をSPAC俳優によるリーディングで披露し一般公開します。劇作を通して、身の回りの出来事の中で新しい視点を持つようになり、講座を通して、第一線で働いている劇作家、演出家の言葉や考えを聴くことで演劇自体にも興味を持ってもらいます。

成果

参加者８名のうち、６名が短編戯曲を書き終えることができました。今年は人数が少なかったため、参加者全員の戯曲をリーディング上演することができ、書いただけでは発見できなかった自分の戯曲の魅力やさらに向上できる点を見つけることができた参加者もいました。

SPACの他の事業にも参加したいと思ってくれた参加者がいました。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター
【日程】
2023年8月12日、9月30日、
10月28日、12月16日
【会場】
下田市民文化会館（下田市）
【来場者数】
13人

グランシップビッグバンド・ジャズ・フェスティバル2023

県内で活躍するビッグバンドがグランシップに集結し、熱いパフォーマンスを披露しました。大人から子どもまで幅広い年齢層に親しまれている真夏のジャズイベントです。

成果

今回の出演バンドは8団体が演奏しました。コロナ感染症の5類移行に伴い、飲食販売を再開するなど、飲んで食べてジャズを聴くというスタイルで運営し、本来の賑わいが戻りつつあると感じるイベントとなりました。入場者数は、近年落ち込んでいましたが、目標にしていた1,000人を超えることができました。また、アンケート結果より、親子スペースが好評で、楽器体験も含め家族で楽しむことができる空間を提供することができました。

【主催】
(公財) 静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年8月13日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
1,004人

古代体験まつりフェスタ埋文2023

中学生以下の子供とその家族を主な対象に、まが玉づくり、火起こし、弓矢、古代服の試着等の普段できない様々な古代の生活を体験することで、古代の人々の暮らしや文化を学び、理解を深めてもらう「古代体験まつりフェスタ埋文」を夏休みに開催しました。来場する子供達に年齢の近い沼津城北高校や常葉大学教育学部・大学院、東海大学人文学部の生徒、学生が運営側として参加し、多くの方が楽しみました。

成果

暑い中、148人が来場し、汗を拭いながら火を起こし、まが玉を磨き上げる作業に熱中し、大人も子供に戻ったような笑顔で弓矢を射るなど、古代の人々の生活に思いをはせながら本県の歴史や文化に触れるよい機会となりました。

【主催】
静岡県埋蔵文化財センター
【日程】
2023年8月19日
【会場】
静岡県埋蔵文化財センター(静岡市)
【来場者数】
148人

SPACシアタースクール『グスコーブドリの伝記』

学校では触れる機会の少ない「演劇の面白さ・奥深さ」を、静岡県の子どもたちとその保護者の方々に知ってもらうことを目的として、2007年にスタートしました。SPACの俳優・スタッフによる指導のもと、発声、スズキ・トレーニング・メソッド（前芸術総監督・鈴木忠志が考案した俳優訓練法）を基にしたトレーニング、楽器演奏などを通して「舞台に立つためのからだづくり」を学び、みんなでつくりあげた作品を発表しました。

成果

県内小学校に募集チラシを配布して、計20名の参加者が集まりました。今年は新作を上演したということもあり、スクール生同士がじっくり話し合いを重ねながら創作する時間がありました。スクール生からは、「難しかったが、台本の読み解く力をつけることができた」という声が上りました。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター
【日程】
2023年8月19日～8月20日
【会場】
静岡芸術劇場（静岡市）
【来場者数】
393人

国際オペラコンクール協賛企業との連携イベント

浜松シティオペラ協会に依頼し、オペラを知ってもらうという内容で構成されたコンサートを行いました。敷居が高いと思われがちなオペラですが、「カルメン」「フィガロの結婚」など日常の様々な場面でその楽曲が使用されている例を、解説付きで披露しました。また古くから知られており、教科書にも出てくる民話「夕鶴」を題材にしたオペラも取り上げました。言葉の壁を取り去るため、外国語のオペラは、できるだけ日本語に訳して演奏しました。

成果

イオンに買い物に来た様々な客が、店内に大きく響き渡るオペラ歌手の歌声に足を止めて、一時のオペラを鑑賞しました。選曲に工夫を凝らし、オペラを身近に感じてもらうことができました。また、第９回静岡国際オペラコンクール開催告知についても、広報用うちわの配布や店内のチラシ・デジタルサイネージなどにより効果的に行うことができました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、静岡文化芸術大学、静岡国際オペラコンクール実行委員会
【日程】
2023年8月20日
【会場】
イオン浜松志都呂セントラルコート（浜松市）
【来場者数】
300人

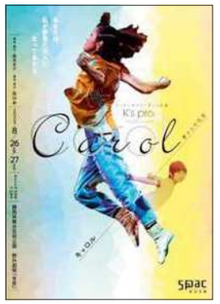
SPAC県民月間2023　K's pro.
コンテンポラリーダンス公演『Carol 夢からの伝言』

「県民月間」は、県内で舞台芸術活動を行っている団体が、SPACの劇場を会場として、自主的な作品創作・上演活動をSPACと協同で行う活動です。静岡市を拠点に活動するダンスカンパニー「K's pro.」が、静岡県舞台芸術公園野外劇場「有度」で、『クリスマスキャロル』を下敷きにしたオリジナルダンス作品を上演しました。

成果

SPACが占有使用している劇場を県民が使用できる貴重な機会であり、また、ダンス作品ということもあり、普段のSPACの公演とは異なる客層が数多く来場しました。舞台芸術の裾野を広げるとともに、静岡県舞台芸術公園やSPACを知っていただく契機となりました。

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター、K's pro.
【日程】
2023年8月26日～8月27日
【会場】
静岡県舞台芸術公園（静岡市）
【来場者数】
458人



国際オペラコンクールプレイベント

過去のオペラコンクール入賞者で、現在国内外で活躍している３名（ソプラノ吉田珠代さん、テノール城宏憲さん、バリトン髙田智宏さん）の歌手を招き、ヴェルディとプッチーニのオペラ名場面を披露しました。初心者にもわかりやすい解説を交えたり、出演者の歌声ではない生の声をインタビューという形で聞いてもらうことにより、オペラ鑑賞だけに留まらない多岐にわたる内容で、幅広くオペラに対する理解を深める機会となりました。

成果

募集定員を大きく上回る応募があり、その居住地は、浜松近郊だけではなく、県内各地に加え、首都圏からも複数名の参加がありました。アンケート結果では、回答者の99%が非常に良かったと回答しました。感想の中には、「素晴らしい歌声だった」、「解説付きで良かった」、「コンクールにもぜひ行きたい」というものが見られ、身近にオペラの素晴らしさを感じてもらうことができました。合わせて行ったチケット販売において、予想を上回る数のチケット売り上げがあり、コンクールへの関心の高さを感じる事ができました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、静岡文化芸術大学、静岡国際オペラコンクール実行委員会
【日程】
2023年8月27日
【会場】
静岡文化芸術大学（浜松市）
【来場者数】
494人

HELLO YOSHIWARA ～吉原商店街に出会おう！～

富士市吉原商店街の個性豊かな店主4名が企画する街歩きツアーおよびトークイベントを実施しました。アーティスト4名はこの前後に滞在制作を行いました。アーティストの成果物に留まらず、店主Aは自身が撮影した写真と紐づく衣服コーディネートを、店主Bは常連客を巻き込み自作した地図を、店主Cは街歩き時の台本から発展させた自叙伝テキストを展示しました。総じて、店主の吉原商店街に対する視点、個人史や興味嗜好が魅力として顕在化しました。

成果

街歩きツアー計4回、トークイベント計3回には地域住民ら58名が参加しました。展示には計108名が来場し、開始3日で複数リピーターが発生する等好評を博すことができました。

「初めて知る地元の事があった」、「街や店主の人柄へ愛着を感じた」などの感想が得られ、特に展示では「新しい店主・店を知った」とその後店へ足を運ぶ来場者が出る等の効果がありました。

【主催】
吉原中央カルチャーセンター
【日程】
2023年9月1日～12月31日
【会場】
富士市吉原商店街
【来場者数】
166人

地域コミュニティ活性化に向けた伝統芸能活用プロジェクト【しゃぎりフェスティバル2023】

自治会・町内会や子供会をはじめとする地域コミュニティが衰退傾向にある現代において、地域伝統芸能の継承活動の価値に改めて目を向け、今後の在り方に関して三島の「しゃぎり」を事例に探るプロジェクトです。9月3日にはメインイベント「しゃぎりフェスティバル」を開催し、しゃぎりの魅力を多角的に伝えました。

成果

事業の核となる活動「しゃぎりフェスティバル」を継続開催できたことで、各町内の自己研鑽や後継者育成をけん引し、地域伝統芸能の継続に寄与することができました。9月3日の「しゃぎりフェスティバル」では、しゃぎりの伝統曲に韓国民謡を織り込んでの演奏や、外国籍の方やしゃぎり未経験の方も一緒に演奏するなど、身をもって体感できたことで、国内だけでなく外国の方々にも「しゃぎり」の魅力を共有できました。

【主催】
しゃぎりフェスティバル実行委員会
【日程】
2023年9月3日
【会場】
三島市民文化会館ゆうゆうホール（三島市）
【来場者数】
451人

移動美術展（小山町総合文化会館）

当館では、県民の財産である県立美術館所蔵品をより多くの方が鑑賞できるよう、地域に親しまれる身近な場所でコレクションを展示する移動美術展を開館3年目の1988（昭和63）年より毎年開催しています。本展では、小山町総合文化会館において、旅と人生をテーマとして富士山を描いた絵画や国内外の風景画など当館コレクションの多彩な作品を24点紹介しました。

成果

会期中、担当学芸員によるフロアレクチャーを4回開催しました。フロアレクチャーの様子が『岳麓新聞』で掲載されるなど、旅と人生という馴染みやすい作品紹介の切り口によって、当館まで普段なかなか来場することのできない方々の関心を広く集めました。

【主催】
静岡県立美術館、小山町教育委員会
【日程】
2023年9月3日～9月14日
【会場】
小山町総合文化会館（小山町）
【来場者数】
777人

グランシップ静岡能　能楽入門公演

「能楽入門公演」は、650年以上の歴史のある能楽を身近に感じられることで人気の公演です。はじめて能楽に触れる方、一度は観てみたいけれど本格的な能楽公演は、という方におすすめの公演です。

成果

静岡ゆかりの徳川家康が主役の大河ドラマ「どうする家康」、「東アジア文化都市２０２３静岡県」にあわせて、『野守』のダイジェスト能、仕舞『邯鄲』を上演しました。解説と合わせて、能楽の魅力をわかりやすく伝えることができました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県、静岡県能楽協会、静岡新聞社・静岡放送
【日程】
2023年9月10日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
572人

ふじのくに芸術祭2023・水石展

水石とは、室内で石を鑑賞する日本の生活文化であり、自然石からさまざまな自然美を連想し、水盤や台座に配置して一つの世界を創造するものです。このたび、ふじのくに芸術祭2023では４年ぶりに水石展を開催しました。自然石を風景などに見立てた静岡県水石連盟会員の水石作品52点を展示しました。

成果

３日間で約293人の来場者数があり、盛況の裡に開催することができました。水石にふれたことのない方の参加もあり、今後、新しい層への普及にも期待する展示会となりました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年9月22日～9月24日
【会場】
菊川文化会館アエル（菊川市）
【来場者数】
293人

移動美術展（沼津市民文化センター）

当館では、県民の財産である県立美術館所蔵品をより多くの方が鑑賞できるよう、地域に親しまれる身近な場所でコレクションを展示する移動美術展を開館3年目の1988（昭和63）年より毎年開催しています。本展では、沼津市民文化センターにおいて、旅と人生をテーマとして沼津ゆかりの山口源らの作品や国内外の風景画など当館コレクションの多彩な作品を28点紹介しました。

成果

会期中、コレクションをモチーフとしたシルクスクリーン技法の体験講座のほか、担当学芸員によるフロアレクチャー、県立美術館ボランティアによるギャラリーツアーといった関連イベントを開催しました。多数の来場者に当館コレクションに親しんでもらうことができました。

【主催】
静岡県立美術館、
（公財）沼津市振興公社
【日程】
2023年9月22日～10月1日
【会場】
沼津市民文化センター（沼津市）
【来場者数】
1,942人

ふじのくに芸術祭2023・書道展

ふじのくに芸術祭2023は、広く県民に芸術作品の発表や鑑賞をする機会を提供し、県民自ら行う文化活動を支え、静岡県の文化向上発展を図ることを目的に開催し、県民誰もが参加できる総合芸術祭です。今年度の書道展は、552点の応募があり、入賞・入選作品、招待作品の総数401点を展示しました。第25回障害者芸術祭と同時開催することで、障害のある人も、そうでない人も楽しめる展示を行いました。

成果

昨年度より、入場者数が438名（約21％）増加し、これまで以上に多くの方が展覧会を鑑賞しました。また、高校生の入賞者も誕生し、若い世代の文化活動を奨励する機会にもなりました。同展示室にて、障害のある方による作品の展示も織り交ぜたことで、障害者芸術活動の理解を広めることができました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年9月30日～10月5日
【会場】
クリエート浜松（浜松市）
【来場者数】
2,664人

障害者芸術祭（西部）

「障害者芸術祭」は、障害の有無を超えた文化としての価値と魅力を伝える芸術祭です。障害のある人による文化芸術作品の展示や、誰もが参加できるワークショップを開催することで、相互理解の促進と共生社会の実現を目指しています。一般公募作品の他、県内他展示会の優秀作品や県外作家の招待作品、学生との交流事業作品等を展示しました。また、ふじのくに芸術祭2023との一体化開催を推進しており、本展示は書道展と同時開催しました。

成果

書道展会場との周遊施策とし、ポイントラリーの実施や県書道連盟による「書き初め展」障害者部門の入賞作品展示、障害のある人による作品の書道展フロアでの展示を行いました。一般の方からの応募作品は71点と例年以上の応募がありました。

【主催】
静岡県
【日程】
2023年9月30日～10月5日
【会場】
クリエート浜松（浜松市）
【来場者数】
395人

暮らしの根っこを考えるワークショップ ～普段の生活から河津町の“今”を見つめる～

アーティストのファシリテーション力を活かし、「河津町の生活」をテーマに地域住民を対象とした全3回のワークショップを実施しました。自分の考えや価値観に新たな気づきを得る機会を育むことを目的としています。

成果

河津町民一人一人が周囲や自身を取り巻く環境を捉え直すためのワークショッププログラムを、アーティストがファシリテーターとなり、計2回開催。参加者が自分の考えや価値観に新たな気づきを得て、心置きなく自己表現できるコミュニティ形成の一助となりました。

【主催】
Working Space Bagatelle
【日程】
2023年10月1日～12月31日
【会場】
Working Space Bagatelle ほか
（河津町）
【来場者数】
15人

第５回　熱海未来音楽祭

ジャンルや国境を超え、非常に親密でかつ未来を拓く力を持つ、そんな「表現の今、ここ」を求め、「即興」を通して、その場でしか生まれない音楽を街の風景と共に作り上げる音楽祭です。熱海市内各地の屋内外、店舗、空きビルなどでパフォーマンスを実施しました。

成果

熱海の街を背景に、即興演奏を中心として、演劇的で先端的なジャンルを超えた音楽祭を開催し、新たな熱海の魅力を発信できました。中国、韓国、アメリカ、ドイツなどから来日した音楽家も出演し、日中韓の民謡や楽器を取り入れた即興演奏やコラボレーション、ワークショップが好評でした。ドイツのジャズフェスのプロデューサーが視察に訪れるなど、国際的なイベントとなり、今後の展開が期待されます。

撮影：木村雅章

【主催】
熱海未来音楽祭
【日程】
2023年10月1日～10月22日
【会場】
熱海市内の各所
【来場者数】
650人

企画展「富士を介して信を通じる」 ー平川義浩絵葉書コレクションにみる富士山の姿ー

絵葉書は明治時代中期から昭和初期にかけて、人々にとって重要な情報伝達手段のひとつであり、その中には、様々な形で富士山が登場するものが見られます。国内屈指の絵葉書コレクターである兵庫県在住の平川義浩氏から、令和４年度に寄贈された富士山の絵葉書1,834点の内、選りすぐりの653点を展示しました。展示では、「写真と富士山」、「広告と富士山」、「風景画と富士山」等15のテーマに分類し、当時の人々が富士山に込めた願いや想いを考えながら観賞してもらう展示としました。

成果

企画展を通じて、多様なテーマに登場する富士山の姿を楽しんでもらうと共に、富士山を題材にした絵葉書を作り、送った人々の姿に想いをはせながら、来館者に絵葉書の奥深さや魅力を感じてもらう展示となり、東アジア文化都市2023静岡県を象徴する企画展となりました。

【主催】
静岡県富士山世界遺産センター
【日程】
2023年10月7日～12月3日
【会場】
静岡県富士山世界遺産センター
（富士宮市）
【来場者数】
25,989人

第６回　熱海怪獣映画祭

「熱海を怪獣の聖地に」を合言葉に、映画上映とゲストによるトーク（10月7日～9日）の他、屋外ステージと飲食の「熱海怪獣ビール祭り」（10月7日、８日）など多彩なイベントを開催しました。怪獣ファンや市民と一緒に熱海のまちを盛り上げました。

成果

怪獣映画上映では、初の試みとして活動弁士や落語家が登場することで、怪獣ファン以外の来場客も生まれました。熱海怪獣ビール祭りには市長や熱海芸妓も登場し、ステージの怪獣音頭を市長や市民も一緒に踊るなど盛り上がりを見せました。

【主催】
（一社）熱海怪獣映画祭
【日程】
2023年10月7日～10月9日
【会場】
熱海市内の各所
【来場者数】
4,968人

文化財を学ぶin日本平夢テラス「静岡県の出土品にみる東アジア」

日本平夢テラスにおいて、静岡県所蔵の文化財の特別展示とミニ講座を毎年秋に開催しています。今回は、東アジア文化都市2023静岡県の事業として、中国や朝鮮半島との関係を示す古墳時代の須恵器、飛鳥・奈良時代の瓦、中世の磁器を厳選しました。また、東アジアの影響で変遷する銭を展示して徳川家康にはじまる貨幣制度も紹介しました。ミニ講座は、10月16日（月）と10月30日（月）に開催し、県文化財課の専門職員が特別展示された文化財の解説を行いました。

成果

コロナ制限が解除になったことから来館者が増え、東アジア文化都市2023静岡県や大河ドラマ「どうする家康」のテーマに合わせた文化財の展示を多くの方が楽しみました。ミニ講座は計120人が参加し、専門職員の解説を熱心に聞いていました。

【主催】
静岡県、日本平夢テラス
【日程】
2023年10月13日～11月21日
【会場】
日本平夢テラス（静岡市）
【来場者数】
72,930人

お祭りごっこ！みんなでつくる凸凹（でこぼこ）まつり

浜松市の中心市街地はコロナ禍を経て商業の担い手の不在、衰退化などの課題などを抱えています。同時にマンション住民や高齢者介護施設も増加し、産業中心のまちから生活や暮らしといった人々の幸せを実現する（福祉、well-being）街への変容が希求されています。そこで、浜松ちまた会議（街のステークホルダー30団体・個人が参加するプラットフォーム）を通じて、商業だけではない新しい街の関わり方、遊び方、出会い方を提案するお祭りを開催しました。

成果

半年にわたる地道な広報や自治会、マンション住民への広報活動を通じて今まで出会ったことない人たちとの出会い、繋がりが生まれました。さらにプレイベントや凸デコづくりに参加した近隣住民や市民は延べ100人にわたり、初回の事業でしたが、参加者たちから来年度の開催を望む声が多く届いたのは非常に大きな成果でした。また、当日は2,000人以上に及ぶ来場者があり、特に子ども、高齢者、障害者など多様な人々が「楽しいという感覚を通じてともにいる空間」を作り上げることができました。

【主催】
浜松ちまた会議
【日程】
2023年10月13日～10月14日
【会場】
新川モール（浜松市）
【来場者数】
2,000人

Cliff Edge Project うぶすなの水文学

伊豆半島中央部伊豆市貴僧坊地区を中心に展開するアートプロジェクトです。この地の水環境と土着の神々への信仰について、昨年度からリサーチを続けてきた13名7組のアーティストによる美術展、ダンスと雅楽のコラボ公演を開催しました。

成果

アンケート回答のうち、展覧会に満足とやや満足が合わせて８３％の回答を得ました。具体的には、１．作品の完成度、アーティストの質が高く見応えがあった。２．展覧会を通して貴僧坊という土地の魅力（自然や歴史）を感じることができた。といった感想が聞かれました。

【主催】
Cliff Edge Project
【日程】
2023年10月14日～11月11日
【会場】
伊豆市貴僧坊地区各所
【来場者数】
537人

版画でひもとく聖書と神話

西洋の歴史や文化の根幹を成す聖書とギリシア神話を主題とする版画作品を紹介しました。

成果

全出品作品に解説キャプションをつけ、フロアレクチャーも通常より多く実施することにより、日本ではあまりなじみのない主題の作品に触れていただくことができました。

【主催】
静岡県立美術館
【日程】
2023年10月17日～12月10日
【会場】
静岡県立美術館（静岡市）
【来場者数】
2,423人

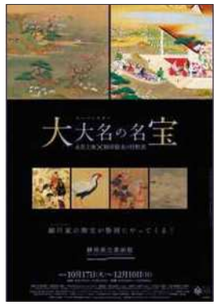
大大名の名宝

永青文庫は、大大名・細川家に伝来した文化財を擁する美術館で、大名家伝来の作品を保管する美術館・博物館の中でも屈指のコレクションを有しています。本展では、永青文庫が所蔵する狩野派の作品および狩野派に影響を与えた中国絵画の優品を選りすぐり、当館の狩野派作品を組み合わせて展示しました。室町時代から幕末期に至る狩野派の歴史を名品によってたどる充実した内容となりました。

成果

狩野派は、中国絵画を範として画風を確立・洗練させた流派であり、質量ともに充実した本展出品作を通して、東アジアの絵画的伝統の日本における展開について示すことができました。県内だけでなく県外からの問い合わせや来場者も多くありました。

【主催】
静岡県立美術館
【日程】
2023年10月17日～12月10日
【会場】
静岡県立美術館（静岡市）
【来場者数】
8,290人



障害者アートフェア

障害のある人の多様な作品の魅力を静岡の地から国内外に向けて広く発信するため、静岡県障害者芸術祭の一環として「障害者アートフェア」を開催した。世界で活躍中の障害のある人による芸術表現を展示する招待作家展や、県内の障害のある人を対象に作品を公募し、審査によって入賞者を決定する県内公募展等を開催した。

展示初日には本イベントの開始式と県内公募展の公開最終審査会を行った。

成果

県内初となる公募展では審査を通過した41点が展示され、障害者芸術分野における芸術性の向上と芸術の多様性を認識する契機となった。

招待作家展は、世界で活躍する作家作品の展示を受け、県外からの来場者もあり、静岡の地から障害者芸術の魅力を発信することができた。

【主催】
静岡県
【日程】
2023年10月25日～11月5日
【会場】
静岡県立美術館県民ギャラリー
（静岡市）
【来場者数】
1,358人

竹林劇場プロジェクト「タテからヨコに広がる竹林劇場」

藤枝市谷稲葉の「竹林劇場」を公共性の高い新しいパフォーマンス劇場として運用すること目指しています。5月からの月一回のワークショップでは、竹細工や竹灯籠を作り、参加者と共に竹林の整備や遊具、カフェの建設を行いました。10月には、竹灯籠や提灯、たき火で照らされた幻想的な夜の竹林で竹楽団の演奏会を開催し、昼間は明るく清々しい竹林で竹の遊園地と巨大流しそうめんのイベントを楽しみました。竹林劇場の制作過程は動画で記録し、公開しています。

成果

参加者ワークショップ50人、イベント夜51名、昼25名、動画再生回数平均1,000回、Instagram、FB閲覧1万回を超えました。リーフレットを製作し、今後の竹林林劇場の運用の足がかりができました。また、地主さんが喜んでご家族を連れてきてくれたことは何よりの成果と言えました。

【主催】
竹部（バンブ）
【日程】
2023年10月28日～10月29日
【会場】
竹林劇場（藤枝市）
【来場者数】
130人

ふじのくに芸術祭2023・写真展

ふじのくに芸術祭2023は、広く県民に芸術作品の発表や鑑賞をする機会を提供し、県民自ら行う文化活動を支え、静岡県の文化向上発展を図ることを目的として開催しています。県民誰もが参加出来る総合芸術祭です。今年度の美術部門写真展は、224点の応募があり、入賞・入選作品、招待作品の総数56点を展示しました。

第25回障害者芸術祭の一環で東アジア文化都市記念事業「障害者アートフェア」と同時開催し、展示ギャラリーＡで障害者作品、展示ギャラリーＢで写真展作品を展示しました。

成果

「障害者アートフェア」と同時開催したことにより、多くの来場者がありました。昨年度も写真展と障害者芸術祭を同時開催しましたが、昨年度よりも197人増（約38％増）となりました。障害者芸術祭と同時開催したことは、来場者から好評を得ており、今後も一体的開催を推進していきます。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年11月1日～11月5日
【会場】
静岡県立美術館県民ギャラリー
（静岡市）
【来場者数】
715人

グランシップ日中韓映画上映会

国際映画祭で認められた日本、中国、韓国の映画作品４本を上映しました。
11月3日『妻への家路』監督：チャン・イーモウ　出演：チェン・ダオミン他、『82年生まれ、キム・ジヨン』監督：キム・ドヨン　出演：チョン・ユミ他
11月4日『そして父になる』監督・脚本：是枝裕和　出演：福山雅治他、『ベイビー・ブローカー』監督・脚本：是枝裕和　出演：ソン・ガンホ他

成果

「東アジア文化都市2023静岡県」を県民に周知し、認知してもらい、興味関心を持つ機会を創出することができました。日本・中国・韓国それぞれの国の家族、親子、夫婦のかたちを描いた映画の上映を通して、３か国の文化や価値観、社会の姿を紹介するとともに、文化交流や相互理解、３か国友好の機会を創出しました。そして、大ホールの大空間で映画を上映し、映画館とは異なる迫力、音響で、グランシップ大ホールならではの仕立ての映画鑑賞機会を提供できました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年11月3日～11月4日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
1,196人

ふじのくに芸術祭2023・邦楽演奏会

ふじのくに芸術祭2023は、広く県民に芸術作品の発表や鑑賞をする機会を提供し、県民自ら行う文化活動を支え、静岡県の文化向上発展を図ることを目的として開催する、県民誰もが参加出来る総合芸術祭です。音楽・舞台芸術部門「邦楽演奏会」では、静岡県三曲連盟による、琴・三味線・尺八といった日本の伝統音楽を披露しました。

成果

来場者数が138人ではあったものの、若い方の参加者も多く、普段和楽器に親しむ機会の無い方にも、鑑賞の機会を提供することができました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年11月5日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
138人

三島アートプロジェクトによる街中にぎわい創出事業【三島満願芸術祭】

三島市の商店街で行うアートプロジェクトです。空き店舗のシャッターを開け現代アートを展示します。アーティスト、商店街メンバー、移住者を含む地域住人や移住検討者の方と協働して制作に関わります。

成果

三島市内外から延べ1,522名の方の参加があり、本芸術祭を目的に県外から初めて三島に来てくれた人も多くいました。作品も三島らしさを表現することができました。会場となった空き店舗はアート付物件として活用され始めています。

【主催】
三島アートプロジェクト実行委員会
【日程】
2023年11月11日～11月26日
【会場】
三島市内の商店街
【来場者数】
1,522人

文化財クローズアップ「浜松城下町の文化財をさぐる」

県内で注目の文化財をテーマとした特別見学会と講演会を毎年秋に開催しており、今回は、大河ドラマで注目された徳川家康ゆかりの浜松城と城下町をテーマとして開催しました。特別見学会では、浜松市の文化財専門職員の案内により、浜松城公園や市街地にある浜松城跡と城下町の文化財を巡りました。希望者には昼食に地域の食材を使った弁当を用意しました。講演会では、京都大学教授の山村亜希氏による講演「浜松城下町の立地とかたち-地図から考える東海道の城下町-」と、浜松市の和田達也氏による発掘調査成果の発表を行いました。

成果

特別見学会は43人、講演会は94人の参加があり、古地図とともに現在の地形や地名、寺社の存在や発掘調査の成果によって、浜松城を核とした町の成り立ちや構造が明らかになることを現地の見学と講演により体験し、浜松城下町の文化財の価値と魅力にふれることができました。

【主催】
静岡県、浜松市、
静岡県文化財保存協会
【日程】
2023年11月12日
【会場】
浜松城跡、浜松市地域情報センター（浜松市）
【来場者数】
137人

［グランシップ出前公演（三島市）］ 2023年しずおか連詩の会in三島

5人の言葉の表現者が織り成す40編の創作現代詩を本人の解説とともに披露しました。

成果

今回は「東アジア文化都市2023静岡県」の開催に合わせて、中国出身の詩人・田原氏を招聘しました。母語、年齢、性別が異なる参加者が互いが刺激し合いながら、時間や空間を飛躍しながら、未来への希望を表現した内容の連詩が完成しました。

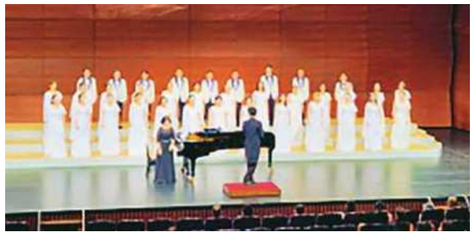
【主催】
（公財）静岡県文化財団、
三島市民文化会館、静岡県
【日程】
2023年11月12日
【会場】
三島市民文化会館ゆうゆうホール
（三島市）
【来場者数】
127人

ふじのくに芸術祭2023・合唱コンクール

ふじのくに芸術祭2023は、広く県民に芸術作品の発表や鑑賞をする機会を提供し、県民自ら行う文化活動を支え、静岡県の文化向上発展を図ることを目的として開催する、県民誰もが参加出来る総合芸術祭です。合唱コンクールは、広く県内から合唱団の参加を求め、コンクールを行うことで、地域における合唱団、サークルの育成及びその水準の向上を図ります。例年、前回コンクールの芸術祭賞受賞団体が招待団体として演奏を披露しますが、今年はこれに加え、韓国全州市のダルビッハーモニー合唱団による招待演奏が披露されました。

成果

全17団体による演奏が披露され、来場者数はコロナ禍以前並みの650人となりました。ダルビッハーモニー合唱団は３曲を披露し、日本語による「翼をください」では、会場一体が深い感動に包まれました。閉会式では静岡県側からは駿河千筋細工による花瓶を、全州市からは韓紙工芸による扇を記念品として互いに贈呈し、交流を深めました。



【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年11月19日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
650人

浜名湖のその先へ ～Re Blooming～

静岡最西端の湖西市白須賀地区を舞台に、宿場の歴史や四季折々の暮らしに寄り添いながら、住民とアーティストが一緒につくるアートプロジェクトです。11月には、作品展示やワークショップ、ビオトープの自然観察ツアーなどを行うメインイベントを開催しました。

成果

白須賀の素材を使ったアーティストによる展示やワークショップ、交流を通して、地域の魅力に気づくきっかけを作ることができました。特に小学生による地図づくりでは、子どもの視点からの地域の楽しみ方や白須賀の未来への希望が集まりました。

【主催】
SMS
【日程】
2023年11月23日～11月26日
【会場】
白東館（旧吾妻屋）ほか（湖西市）
【来場者数】
670人

ふじのくに芸術祭2023・美術展

ふじのくに芸術祭2023は、広く県民に芸術作品の発表や鑑賞をする機会を提供し、県民自ら行う文化活動を支え、静岡県の文化向上発展を図ることを目的として開催する、県民誰もが参加出来る総合芸術祭です。今年度の美術部門美術展は、254点の応募があり、入賞・入選作品、招待作品の総数161点を展示しました。また、第25回静岡県障害者芸術祭の一環で10月に開催した東アジア文化都市2023静岡県記念「ふぁいんだー」作品公募展の入賞４作品を招待展示しました。

成果

最高位である静岡県芸術祭賞受賞者４名のうち２名が高校生となり、若者の活躍が目立つ非常に喜ばしい結果となりました。また、「ふぁいんだー」公募作品展の入賞４作品を展示したことにより、来場者は多様な表現による作品をあわせて楽しむことができました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年11月25日～12月3日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
1,039人

ふじのくに芸術祭2023・舞踊公演

ふじのくに芸術祭2023は、広く県民に芸術作品の発表や鑑賞をする機会を提供し、県民自ら行う文化活動を支え、静岡県の文化向上発展を図ることを目的として開催する、県民誰もが参加出来る総合芸術祭です。本年は、日本舞踊、クラシックバレエ、現代舞踊の合同での舞踊公演を実施しました。合同公演は隔年開催で実施されており、第一部は日本舞踊、第二部はクラシックバレエ、第三部は現代舞踊の演目で実施され、子供から大人まで、広い年代の演者が演目を披露しました。部門を超え、様々なジャンルの良さを楽しめる公演となりました。

成果

日本舞踊、クラシックバレエ、現代舞踊の合同舞踊公演は隔年で開催されており、今回は、前回より約140人多い750人の観客が鑑賞しました。観客層も子供から大人まで幅広く、広い年代が舞踊に親しむ機会となりました。

【主催】
静岡県、静岡県教育委員会、
静岡県文化協会
【日程】
2023年11月26日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
750人

『お艶の恋』

古今東西の名作を連続上演する「SPAC秋→春のシーズン2023-2024」の２作品目です。原作は、裕福な質屋の一人娘・お艶と、奉公人・新助の駆け落ちの顛末を描いた、文豪・谷崎潤一郎の初期小説『お艶殺し』です。二度目の演出となる石神夏希が、俳優・スタッフたちとともに丹念に小説を読み解き、いまを生きる観客との結節点を探求しました。のちに耽美派として評価されるフェティシズムあふれる表現や生命力溢れる恋のエネルギーを抽出し、舞台化しました。

成果

一般公演３回・中高生鑑賞事業公演７回で、合計2,311人の観客が鑑賞しました。また、観劇前に静岡市内の旧遊郭等を歩き、観劇後に谷崎潤一郎研究者とともに「映画・演劇における近代の女性表象」について考えるツアーを実施するなど、本作ならではの関連企画も実施できました。

撮影：三浦興一

【主催】
SPAC-静岡県舞台芸術センター
【日程】
2023年12月2日～12月13日
【会場】
静岡芸術劇場（静岡市）
【来場者数】
2,311人

YOKODO33

かつて駿河と伊豆をまたぎ江戸時代初期より民衆の信仰を集めた「駿河伊豆両国横道三十三観音霊場」。忘れ去られようとしているこの巡礼道に残る微かな足跡を辿りながら、各札所の観世音菩薩はもとより道中の供養塔や石碑を絵に納め、巡礼が本来持っていた内省的側面へ立ち返り展示会並びにジャーナルを制作しました。過去の民衆の祈りの歴史や文化をひも解くことにより、今を生きる個々に訴えかける巡礼アーカイブプロジェクトです。

成果

「YOKODO33 巡礼記 その一」と題して大中寺に於いてさとうなつみ氏の巡礼の道中に描いた60枚を超える絵の展示を9日間行いました。会期に合わせてジャーナルも制作。来場者は200名を超えて、当初の目標以上の結果となりました。

【主催】
宗教法人大中寺
【日程】
2023年12月9日～12月17日
【会場】
大中寺（沼津市）
【来場者数】
230人

(公財)静岡県文化財団等主催事業

グランシップ文化講座 新型コロナウイルスとは何か

毎週、静岡県の新型コロナウイルスのゲノム塩基配列を決定している国立遺伝学研究所の井ノ上逸朗氏を講師に迎え、COVID19がどのように始まったのか、発生当時はわからなかったこと、今わかっていることなど科学的な見地から、私たちのすぐそばにあるウイルスの存在に迫ります。

成果

身近なテーマである「新型コロナウィルス」に関する分かりやすい解説と、丁寧な質疑応答で参加者から好評を博しました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年3月25日
【会場】
グランシップ11階会議ホール・風(静岡市)
【来場者数】
60人

国立劇場　歌舞伎鑑賞教室

教室の前半では、歌舞伎の魅力をわかりやすく紹介します。後半は、ヤマタノオロチ伝説を描いた名作歌舞伎を披露します。歌舞伎鑑賞がはじめての方や学生の方々へ、歌舞伎の魅力をお届けします。
近松門左衛門 作「日本振袖始（にほんふりそではじめ）－八岐大蛇（やまたのおろち）と素戔嗚尊（すさのおのみこと）－」

成果

一般来場者、中高生鑑賞プラン活用による中高生等、幅広い年代に歌舞伎を鑑賞してもらうことができました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年6月26日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
1,504人

にっぽんこども劇場～文楽わんだーらんど～

太夫、三味線、人形遣いの三業が息を合わせて創り上げる文楽について、子どもたちはもちろん、はじめての学生のみなさんにもおすすめのプログラムです。文楽という芸能の紹介に加えて、太夫の道具を近い距離で見たり、三味線の音を近くで聞いたり、人形遣いの体験などを用意します。また、舞台装置の操作体験や世界に誇る文楽を担う技芸員による実演もあり、様々な角度から文楽の魅力を知ることができます。

成果

文楽技芸員による解説・実演とワークショップの二部構成とし、日本が世界に誇る「人形浄瑠璃 文楽」に対し、子どものうちから興味・関心を持つきっかけをつくることができました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年7月9日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
186人

東京グランド・ソロイソツ三浦一馬[バンドネオン]

多方面での活躍が光るバンドネオン奏者の三浦一馬が、人気ヴァイオリニストの石田泰尚をはじめとしたクラシック界の精鋭奏者を集め、2017年に結成した東京グランド・ソロイスツです。

成果

県外からの来場者も多く、新たな来場者獲得に貢献することができました。また、中高生鑑賞プランの利用により、県内の管弦学部に所属する多くの学生(56名）が来場しました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県、(公社)全国公立文化施設協会
【日程】
2023年7月22日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
681人

グランシップ寄席～ニホンノコワイハナシ落語・講談・浪曲で震える夏～

日本の三大話芸、落語・講談・浪曲で今も昔も変わらぬ、暑い夏にぴったりの“怪談噺”をたっぷりとお届けします。
出演：立川談笑（落語）、神田阿久鯉（講談）、玉川奈々福（浪曲）、林家つる子（落語）

成果

“怪談”というテーマを設定し、かつ、落語・講談・浪曲という3つの話芸を一緒に楽しむことができる新しい試みでしたが、好評を博すことができました。また、初めて伝統芸能を見る方へのアプローチとして、怪談というテーマ設定が効果的でした。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年7月23日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
478人

グランシップ世界のこども劇場2023

世界中のこどもたちを夢中にさせるパフォーマンスを楽しめる３日間です。

成果

海外カンパニーや海外で活躍する日本のカンパニーの作品を上演し、0歳から大人まで、世界の優れた演劇パフォーマンスを鑑賞してもらうことができました。グランシップのみならず菊川文化会館アエルでの出前公演も実施しました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年8月4日～8月6日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
1,658人

グランシップ誰もがWonderfulアート

生涯の有無を超え、誰もが持つ豊かな感性や表現の素晴らしさを感じられる展覧会です。

成果

美術家・演奏家の白砂勝敏氏が創作した様々な展示作品で構成される「生命のかたち-白砂式創作の渦へ-」と、「つくるよろこびあらわすちから-静岡県内の特別支援学校児童・生徒による作品展-」の2つの展示で構成することで、多様な表現を楽しむ作品を多くの県民が鑑賞しました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年8月26日～9月10日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
2,039人

伝統芸能シリーズ講演会 「岩下尚史の伝統芸能へようこそ！」 ～文楽人形遣い・桐竹勘十郎を迎えて～

テレビや雑誌、グランシップマガジンの連載コラムでも人気の作家・岩下尚史が、日本文化の幅広い知識を元に、注目ポイントを案内します。また、文楽人形遣い・桐竹勘十郎さん（人間国宝）をゲストにお迎えし、文楽の魅力や文楽人形などを楽しく解説します。

成果

人間国宝の文楽人形遣いである桐竹勘十郎氏をゲストに迎え、人形遣いの裏側や育成についての話や実演を交え、文楽の魅力を紹介することができました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年8月26日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
170人

挾間美帆　m_unit

ワールドワイドに活躍するジャズ作曲家・挾間美帆が率いるジャズ室内楽団“m_unit”が10周年記念アルバムを携えて登場、ラージ・アンサンブル・ジャズの世界最先端の姿を静岡で披露します。

成果

従来とは異なる新しい形のジャズを県民に紹介、提供できたことは意義があり、来場者からも高評価を得ることができました。また、付随企画として行った公開リハーサルを見られる機会は、挾間美帆の全国ツアー中グランシップのみであったため、来場者の好評を得ました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年9月23日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
248人

人形浄瑠璃　文楽

ユネスコ無形文化遺産であり、日本が世界に誇る「人形浄瑠璃　文楽」。太夫・三味線・人形遣いの三業が互いに息を合わせ“三位一体”で創り上げられる舞台は、世界のほかの人形劇とは全く異なる文楽ならではの特徴です。【昼の部】義経千本桜　～椎の木の段～すしやの段、【夜の部】 桂川連理柵　～六角堂の段～帯屋の段～道行朧の桂川

成果

県内唯一の「人形浄瑠璃 文楽」の鑑賞機会を県民に提供しました。夜の部来場者限定のミニ講座や呈茶サービス等、公演内容以外の要素も充実させ、文楽をより身近に感じてもらえるように工夫しました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県、(公財)文楽協会
【日程】
2023年10月8日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
874人

本と音楽の素敵な出会い　ラブカは静かに弓を持つ

2023年本屋大賞第２位！の“スパイ×音楽”小説『ラブカは静かに弓を持つ』で大注目の作家・安壇美緒さんと国際的チェリストの横坂源が、演奏とクロストークを展開します。文学と音楽の出会いから生まれる、心に響く言葉やチェロの音色が注目です。

成果

上質な演奏と、書籍やチェロの魅力に触れつつ安壇氏・横坂氏の人間的魅力にも迫るクロストークで、お客様が音楽や文学に興味を持つきっかけを提供できました。また、公演制作の段階から出演者が主体的に関わることで、オリジナリティのある公演が実施できました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年10月15日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
281人

グランシップリサイタル・シリーズ アレクサンダー・ガジェヴピアノ・リサイタル

2021年10月、反田恭平とともに第18回ショパン国際ピアノ・コンクール第2位、最優秀ソナタ賞を受賞のピアニスト、アレクサンダー・ガジェヴのピアノ・リサイタルです。

成果

アンケートでは、ガジェヴ氏の演奏に魅了されたという声が多く寄せられました。来場者に演奏を堪能してもらうよう、心を落ちかせるため、開演冒頭に暗転・カゲアナ・沈黙ののち、ピアノ演奏が始まるという演出も大変好評でした。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年10月23日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
534人

東アジア食彩フェスティバル

四川＆韓国の美味しいものが勢揃いします。中国伝統パフォーマンスだけでなく、大型フードトラック「BISTOR LAND SHIP」も登場。このフェスでしか食べられない限定メニューを調理実演で提供します。日中韓の食と文化を存分に楽しむ二日間です。

成果

中国・成都市と韓国・全州市は、共にユネスコ食文化創造都市に認定されている「食の都」。成都の四川料理やビビンバをはじめとする韓国料理など中韓の食文化を体験するイベントを開催しました。来場者は、秋空の下、本場の美食とともに、変面師 王文強氏率いる中国雑技団によるパフォーマンスも楽しみました。

【主催】
東アジア食彩フェスティバル実行委員会
【日程】
2023年10月28日～10月29日
【会場】
グランシップ芝生広場（静岡市）
【来場者数】
5,023人

東京都交響楽団名曲コンサート 指揮：小泉和裕　ヴァイオリン：三浦文彰

数々の有名オーケストラの首席指揮者や音楽監督を務めてきた小泉和裕と、人気実力を兼ね備えた三浦文彰との競演です。

成果

国内の一流オーケストラと実力派若手ヴァイオリニストとの共演が実現しました。演奏技術や表現力に感嘆する声が多く聞かれ、非常に高い来場者満足度となりました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年11月18日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
629人

グランシップリサイタル・シリーズ 小林愛実ピアノ・リサイタル

2021年10月、第18回ショパン国際ピアノ・コンクールで第4位を受賞したピアニスト、小林愛実のピアノ・リサイタルです。さらなる世界的活躍が期待される小林が繊細かつ大胆で力強い情熱的な演奏を披露します。

成果

小林愛実氏の繊細かつ表現豊かな上質な演奏を多くの来場者に届けることができました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団、静岡県
【日程】
2023年11月29日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
798人

グランシッププレミアム・クリスマス・ライヴ 平原綾香20th Anniversary Concert Tour2023

2023年12月17日にデビュー20周年を迎える平原綾香がグランシップに登場します。圧倒的な歌唱力で人々を魅了し、ミュージカルや声優など様々なジャンルにも挑戦し続けてきた20年の音楽の軌跡です。

成果

ジャズやミュージカルなど多方面で活躍する平原綾香全国コンサートの静岡公演でした。静岡で一流アーティストの上質なコンサートを見ることができて嬉しいと、高い来場者評価を得ました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年12月15日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
874人

グランシップ冬のおくりもの2023 キノ・イグルーの不思議の国のえいがかん

この日のためにセレクトした映画をライブペインティングパフォーマー近藤康平による特別な演出です。

成果

子どもたちのためにキノ・イグルーがセレクトした映画を、近藤康平氏によるライブペインティングとともに、家族で楽しめる場を提供することができました。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年12月17日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
518人

グランシップ冬のおくりもの2023 こどもたちのための静フィルクリスマスコンサート

子どもから大人まで一緒に楽しめるオーケストラのコンサートです。

成果

音楽を家族で気軽に楽しんでもらえる公演として開催しました。公演趣旨に合わせた選曲や、客席前に桟敷席を設ける等、親子で参加しやすい演出・環境が大変好評でした。

【主催】
(公財)静岡県文化財団
【日程】
2023年12月17日
【会場】
グランシップ（静岡市）
【来場者数】
1,824人